

市川橋遺跡

－第23・24次調査報告書－



平成11年3月

多賀城市教育委員会

多賀城市文化財調査報告書第55集

市川橋遺跡

－第23・24次調査報告書－

平成11年3月

多賀城市教育委員会



市川橋遺跡航空写真



SB1000・1010 捩立柱建物跡全景

序 文

古代に陸奥国府がおかれた多賀城の南面は、南北大路・東西大路の二大幹線道路が建設され、整然とした町並みが広がる古代都市がありました。その内部では上級官人の邸宅や、中・下級役人の住まいが次々と発見され、当時の人々が使用した生活の道具をはじめ、儀式やまじないに用いられた遺物などが数多く出土しております。これらは「古代都市」の実態を明らかにするものであり、全国的にも高く評価されるものであると自負するものであります。

さて、今回の市川橋遺跡第23・24次調査は、南北大路と東西大路の交差点を中心に、東西700m、南北900mにも及ぶ広大な範囲を対象としたものであります。本遺跡内でこれほど大規模な発掘調査を実施するのは今回が初めてのことであり、方格地割りの状況やその内部の様相、さらには旧地形の復元等に関して、多くの成果が得られるものと期待しておりました。

調査の結果、南北大路・東西大路をはじめとする道路跡が良好な状態で遺存していることが明らかとなり、その周辺から古代の町並みの一部と見られる建物群や井戸跡などが次々と発見されました。また、大臣宮地区の南側からは、整然と立ち並ぶ城外最大級の建物群が発見され、その性格をめぐって大きな話題となりました。今回のこのような成果が、「古代都市多賀城」の実態解明にいささかなりとも寄与するところ有りとすれば望外の喜びであります。

最後になりましたが、今回の調査にご理解頂き、ご協力を惜しまれなかった地権者の方々をはじめ、調査から本書の作成に至るまでご指導頂いた文化庁、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県多賀城跡調査研究所、東北歴史資料館に対し、厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例　　言

1. 本書は、平成9・10年度の2ヶ年にわたり国庫補助事業「遺跡発掘事前総合調査」として実施した市川橋遺跡第23・24次調査の成果をまとめたものである。
2. 遺構番号は第1次調査からの連続番号である。
3. 本書第1図は建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の1/50,000地形図「仙台」「塩竈」を複製したものである（承認番号 平11東複第208号）。
4. 本書の作成に際し、資料整理は調査員全員が分担して行った。また、本文の執筆にあたっては調査員間で検討を行い、次のとおり分担した。

I 、 III 、 IV 1 • 3 (1) • 4 (1) • 6 (1) 、 V 3 • 4 、 VI	千葉孝弥
II	石本 敬
IV 2 • 5	武田健市
IV 3 (2) • 6 (2)	堀口和代
IV 4 (2) 、 V 1 • 2	鈴木孝行
IV 4 (3)	三浦幸子
IV 4 (4) ~ (7)	菊池 豊
VII 2	松葉礼子（バレオラボ）

なお、VII 1 は東北芸術工科大学で分析したものを掲載したものである。編集は千葉、武田、鈴木が行った。

5. 今回の調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関からご指導、ご協力を賜った。
桑原滋郎 進藤秋輝 加藤道男 真山 悟 斎藤吉弘 後藤秀一 佐藤則之 佐久間光平
村田晃一 普原弘樹（宮城県教育庁文化財保護課）、白鳥良一 丹羽 茂 阿部 恵 佐藤和彦
柳沢和明 白崎恵介 吾妻俊典（宮城県多賀城跡調査研究所）
高野芳宏 手塚 均（東北歴史資料館）、岡村道雄（文化庁）、平川 南（国立歴史民俗博物館）、
藤沼邦彦（弘前大学）、松井敏也（東北芸術工科大学）、恵美昌之（名取市教育委員会）、
古川雅清（創字舎）
文化庁 宮城県教育庁文化財保護課 宮城県多賀城跡調査研究所 東北歴史資料館
東北芸術工科大学
6. 今回の調査成果については既に発表会等で概要を報告しているが、内容が異なる場合は本書の内容が優先するものである。
7. 調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目 次

序 文		
例 言		
目 次		
挿図目次		
写真図版目次		
調査要項		
I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1	
1. 位置と地理的環境	1	
2. 市川橋遺跡の概要と周辺の歴史的環境	1	
II 調査に至る経緯	5	
III 調査の目的と方法	6	
1. 調査目的	6	
2. 調査区の地区割りとトレンチの設定	6	
3. 発掘基準線の設定	6	
4. 道路と区画の名称	6	
IV 発見した遺構	9	
1. A区東部地区	9	
(1) A区東部地区的概要	(2) 主な遺構の概要	
2. A区西部地区	15	
(1) A区西部地区的概要	(2) 主な遺構の概要	
3. A区南部地区	22	
(1) A区南部地区的概要	(2) 主な遺構の概要	
4. B 区	26	
(1) B区の概要	(2) S B1000掘立柱建物跡	(3) S B1010掘立柱建物跡
(4) S X990土壙状遺構と S D942・940・939・935溝跡	(5) S A977材木塗跡	
(6) S E948井戸跡	(7) S D945・946溝跡	
5. C 区	51	
(1) C区の概要	(2) 主な遺構の概要	
6. D区北部地区	58	
(1) D区北部地区的概要	(2) 主な遺構の概要	
7. D区南部地区	65	
(1) D区南部地区的概要	(2) 主な遺構の概要	
V 考 察	73	
1. 遺構の分布とその様相	73	
2. 遺物の分布状況とその年代	74	

3. 多賀城南面における方格地割りとの関係	76	
(1) 道路跡	(2) 南北・東西大路交差点北東地区の様相	
4. 大型南北棟建物について	83	
(1) 変遷と建物配置	(2) 年代	(3) 性格
VII まとめ	85	
VIII 附 章	86	
1. 海獸葡萄鏡の蛍光X線分析	86	
2. 多賀城市市川橋遺跡から出土した8世紀末～9世紀中葉の柱・礎板の樹種同定	87	

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 多賀城外の方格地割り	3
第3図 地区割りおよびトレンチ配置図	7
第4図 A区遺構全体図(1)	11
第5図 №2・4・5・44・62トレンチ遺構平面図	13
第6図 S X900東西道路跡平面図	16
第7図 A区遺構全体図(2)	17
第8図 S B889・890掘立柱建物跡、S I 894竪穴住居跡ほか平面図	19
第9図 S I 903竪穴住居跡平面図	20
第10図 S B1041・1042掘立柱建物跡、S I 1043竪穴住居跡ほか平面図	21
第11図 S X1030東西大路平面図	22
第12図 S B1020掘立柱建物跡平面図	24
第13図 S B919掘立柱建物跡平面図	25
第14図 S B919掘立柱建物跡北西隅柱穴平面図	25
第15図 B区遺構全体図(1)	27
第16図 B区遺構全体図(2)	29
第17図 S B1000・旧河川土層堆積状況	30
第18図 S B1000掘立柱建物跡平面図	31
第19図 S B1000掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(1)	33
第20図 S B1000掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(2)	34
第21図 S B1010掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(1)	36
第22図 S B1010掘立柱建物跡平面図	37
第23図 S B1010掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(2)	39
第24図 S D1011・1013雨落ち溝平面図・断面図	40
第25図 S D1013雨落ち溝、S D1015・1016溝跡平面図・断面図	41
第26図 S A977材木屏跡断面図	42

第27図	S X990土墨状遺構、S A977材木堆跡、S E938井戸跡ほか平面図	43
第28図	S X990土墨状遺構変遷模式図	45
第29図	S X990土墨状遺構、S E938井戸跡ほか断面図	47
第30図	S D945・946溝跡断面図	48
第31図	No53トレンチ遺構平面図・断面図	49
第32図	A・B区出土遺物	50
第33図	S X780南北道路跡平面図・断面図	52
第34図	C区遺構全体図(1)	53
第35図	C区遺構全体図(2)	55
第36図	No20トレンチ遺構平面図	57
第37図	No22トレンチ遺構平面図	57
第38図	D区遺構全体図(1)	59
第39図	No25トレンチ遺構平面図	61
第40図	S X888道路状遺構平面図・断面図	61
第41図	S B883・884掘立柱建物跡、S I 876竪穴住居跡平面図	62
第42図	No28トレンチ発見遺構全体図	63
第43図	S X920東西道路跡断面図	64
第44図	S B881・882掘立柱建物跡ほか平面図	64
第45図	S X830南北道路跡、S I 833竪穴住居跡平面図	66
第46図	D区遺構全体図(2)	67
第47図	D区遺構全体図(3)	69
第48図	S D848・850溝跡ほか平面図	71
第49図	No35・36・37トレンチ発見遺構平面図	72
第50図	旧地形および遺構分布図	75
第51図	B区主要遺構模式図	81

写真図版目次

- 図版 1 調査区航空写真
- 図版 2 A区航空写真
- 図版 3 B区航空写真
- 図版 4 S B1000掘立柱建物跡航空写真、同全景（北より）
- 図版 5 S B1000掘立柱建物跡柱穴断面、雨落ち溝土層堆積状況
- 図版 6 S B1010掘立柱建物跡航空写真、同全景（南より）
- 図版 7 S B1010掘立柱建物跡柱穴断面、雨落ち溝土層堆積状況、同遺物出土状況
- 図版 8 S B1020掘立柱建物跡全景（南より）、同柱抜取穴遺物出土状況
- 図版 9 S X990土墨状遺構全景（北より）、同（東より）、同土層堆積状況（西より）

- 図版10 S A977材木扉跡全景（北より）、同（東より）
- 図版11 №1 トレンチ掘立柱建物跡検出状況（西より）、№42 トレンチ S I 903 竪穴住居跡検出状況（東より）、№42 トレンチ S X 900 道路跡検出状況（東より）、№8 トレンチ掘立柱建物跡検出状況（北より）、№8 トレンチ S I 1044 竪穴住居跡検出状況（西より）、№43 トレンチ遺構検出状況（東より）
- 図版12 №2 トレンチ S D911 南北大路西側溝検出状況（東より）、№2 トレンチ S I 905 竪穴住居跡検出状況（西より）、№5 トレンチ S X 924・925 土器埋設遺構検出状況、№48 トレンチ遺構検出状況（南より）、№11 トレンチ遺構検出状況（東より）
- 図版13 №13（N）トレンチ全景（北より）、№13（S）トレンチ全景（南より）、№13（N）トレンチウマ頭骨出土状況、№49 トレンチ西半部遺構検出状況（西より）、№14（W）トレンチ全景（西より）、№15 トレンチ S D1050 検出状況（南より）
- 図版14 №50 トレンチ全景（東より）、№53 トレンチ全景（西より）、S D945・946 遺跡（北より）、№54 トレンチ全景（西より）、№64 トレンチ全景（東より）、№56 トレンチ全景（北より）
- 図版15 №19 トレンチ全景（北より）、№20 トレンチ S K 787 検出状況、№22 トレンチ掘立柱建物跡検出状況、№23 トレンチ全景（西より）、№25 トレンチ全景（西より）、同遺物出土状況
- 図版16 №26 トレンチ全景（東より）、№27 トレンチ全景（西より）、№28 トレンチ全景（北より）、№28 トレンチ南端部掘立柱建物跡検出状況（北より）、№30 トレンチ S X 830 南北道路跡検出状況（南より）
- 図版17 出土遺物(1) 墨書き土器、ヘラ書き土器、富寿神寶、海獣葡萄鏡、鉄製品、石製品
- 図版18 出土遺物(2) 赤焼き土器、人形土製品、羽釜、土製カマド
- 図版19 出土遺物(3) 鹿角製品、櫛、メガネ状木製品、石帶、鉸具、円面鏡、風字硯、埴

調査要項

遺跡名	市川橋遺跡（宮城県遺跡登録番号 18008）					
所在地	多賀城市市川・浮島・高崎					
調査面積	16,220m ²					
調査期間	第23次：平成9年10月28日～平成10年2月27日 第24次：平成10年4月23日～6月30日・12月1日～12月22日					
調査主体	多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男					
調査担当	多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 木村忠雄（平成10年3月まで） 長田 幹（平成10年4月より）					
調査員	第23次：石川俊英	石本 敬	千葉孝弥	鈴木孝行	武田健市	高橋圭藏
	三浦幸子	車田 敦	堀口和代			
	第24次：石川俊英	石本 敬	千葉孝弥	鈴木孝行	武田健市	高橋圭藏
	三浦幸子	車田 敦	堀口和代	菊池 豊	佐藤恵子	文屋 亮
	高橋 哲（調査補助員）					

I 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 位置と地理的環境

本遺跡の所在する多賀城市は、仙台市の中心部から北東約10kmの位置にある。南西部で仙台市、北西部で利府町、北東部で塩竈市、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。東西約6km、南北約3kmの規模である。

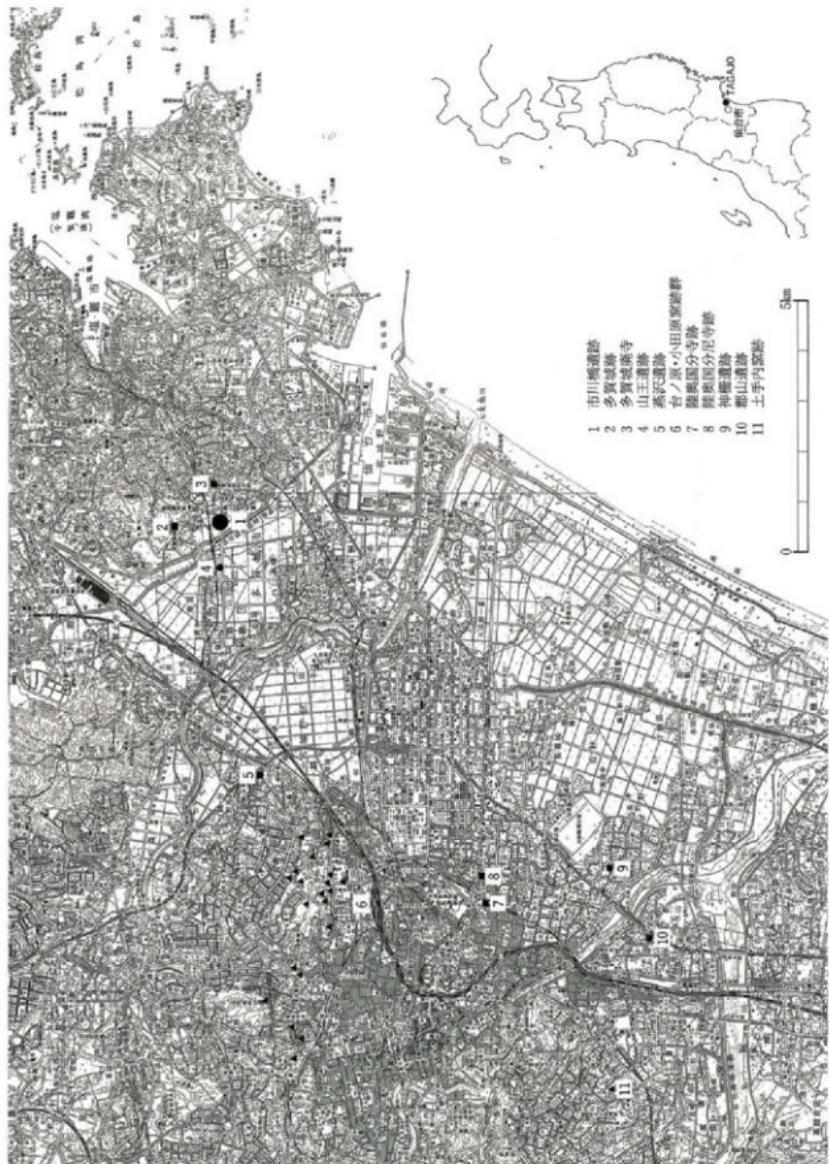
多賀城市的北西から南東にかけて利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川が貫流しており、本市の地形は東西に大きく二分されている。東半部は、北部が松島丘陵と呼ばれる低丘陵である。大部分は標高40~100mであり、南側に向かって枝葉のように延びている。南部は海岸線に平行して多数の浜堤が発達している。一方、西半部は宮城野海岸平野と呼ばれる広大な沖積平野が広がっており、自然堤防、旧河道、後背湿地などが複雑に分布している。本遺跡はこの沖積平野の東端部にあり、丘陵部と接している。おおよそ平坦な地形であるが、浮島地区には五つの小丘陵が点在し、まさに海に浮かぶ島のような景観を呈している。それ以外は、地形図上ではすべて低湿地となっているが、発掘調査によって微高地の広がりが確認され、旧地形は複雑であったことが明らかになってきている。それらの具体的な様子については第V章で改めて述べたい。

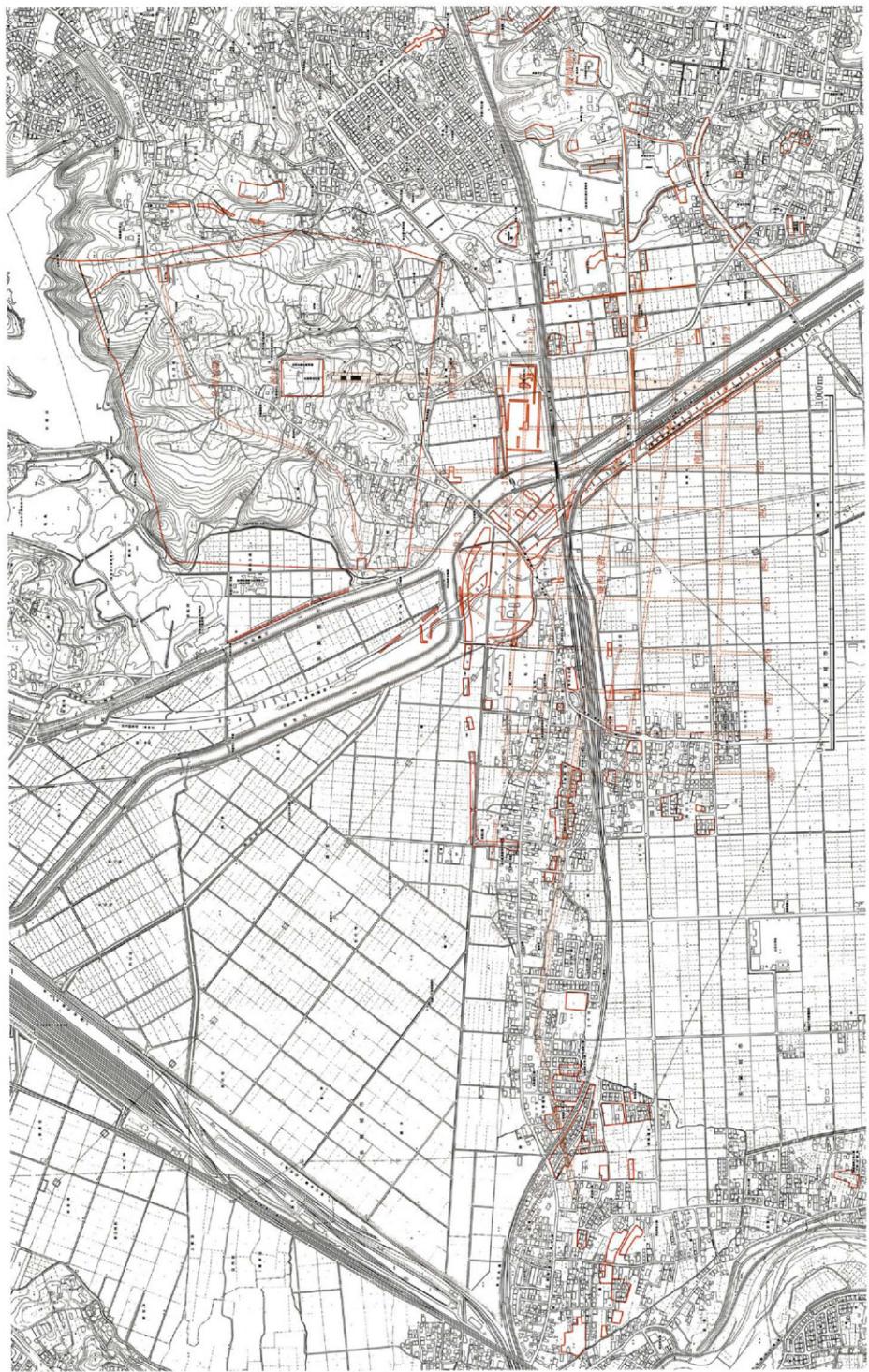
2. 市川橋遺跡の概要と周辺の歴史的環境

本遺跡は、旧石器時代から平安時代に至る複合遺跡として登録されているが、一般には奈良・平安時代を中心とした古代の遺跡として知られている。これまで本市教育委員会によって22回、宮城県教育委員会によって4回、多賀城跡調査研究所によって2回の調査が行われ、道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、運河状の大溝跡、区画溝、水田跡など多数の遺構が発見されている。また、本遺跡の北側の沖積地から丘陵部にかけては特別史跡多賀城跡、東側の丘陵部には多賀城廃寺およびそれを取り巻くように高崎遺跡がある。多賀城は奈良・平安時代を通して陸奥国府が置かれた所であり、奈良時代には鎮守府も併せ置かれるなど律令政府による東北地方経営的一大拠点である。多賀城廃寺はその付属寺院であり、高崎遺跡はそれらと同時代の集落跡と考えられている。また、北側の小丘陵上には館前遺跡（特別史跡多賀城跡附寺跡に追加）があり、国司館あるいは城外官衙と考えられている。一方、本遺跡西側の微高地上には山王遺跡、さらにその西側には新田遺跡があり、いずれも奈良・平安時代の集落跡と考えられている。このように、多賀城跡周辺には同時代の寺跡や集落跡が隣接して広く展開しており、大規模な遺跡群を形成している。

多賀城外に広がる本遺跡および周辺遺跡における調査成果の中で最も注目すべきは、本遺跡西部から山王遺跡東部にかけて、すなわち多賀城南面に施工された方格地割りの発見である。これは、南北大路・東西大路と呼んでいる二つの主要道路を基準とし、東西・南北の直線道路によっておおよそ1町四方の区画を形成したものである。年代的には9世紀以降段階的に施工されたと考えられている。その範囲は、東西約1,100m、南北約750mに及び、多賀城と密接な関わりをもつ地域として注目されている。

図1 国 遺跡の位置





第2図 多賀城外の万葉地圖(1)

II 調査に至る経緯

近年、多賀城市を取り巻く環境の変化は、本市を人口6万人の都市へと成長させる一方、かつての縁豊かな丘陵地や黄金花咲く田園風景を減少させつつある。市街地の拡大傾向は、本市の西部地域で顕著であり、市川橋遺跡が所在する市川、浮島、高崎地区においても宅地開発や幹線道路の整備など新たな土地利用が徐々に進んでいる状況にある。特に本遺跡内で発生する宅地開発については、対象面積が1,000～1,500m²の比較的小規模な開発が多い反面、これらが広範な遺跡の中で虫食い状に点在して行われるため、この状況が将来にわたって統一性に欠けた無秩序な都市景観をつくり出す恐れも出てきていた。こういった弊害をなくすため、遺跡の保護や活用面はもちろんのこと都市計画、自然環境、生涯学習等を含め、多角的な視点からの検討を加えた、総合的なまちづくりを進めていく必要が課題としてあげられていた。

本市の教育委員会では、昭和50年代の半ば以降から本遺跡内で継続的に発掘調査を実施し、資料の蓄積をはかってきた。当地域は、現在おもに水田として利用され平坦な地形が広がっているが、これまでの調査により古代においては低丘陵と微高地、さらに低湿地が複雑に入り組んだ地形であったことが明らかになっている。そして古代の遺構は、低丘陵と微高地に多く分布し、低湿地には水田跡等がわずかに認められる程度であることが明らかになってきた。そのため、旧地形の状況を詳細に把握することが、今後当地域で発生すると予想される種々の開発に適切に対応するために不可欠であろうと考えられた。

このような状況のなか、本遺跡をはじめとする多賀城跡南面地域に所在する各遺跡の近年の発掘調査によって、当地域には多賀城に向かって真直ぐのびる南北大路とそれと直交する東西大路をメインストリートとして約1町四方に区画された古代の町並みが広がっていることが明らかになった。そして、これらの調査の進展と前後して当地域を対象とした組合施工による大規模な土地区画整理事業の計画が持ち上がり、徐々に具体性をおびてきている。その計画をみると、当地域の景観を一変させ地下の遺構に少なからぬ影響を与えるものであるが、一方で歴史と市民生活の調和についても配慮する方針をとっている。特に多賀城市が策定した「特別史跡多賀城跡建物復元等管理活用計画」等をもとに古代の大路を復元して、これを中心とした歴史性が感じられる町並みを整備していくことが計画の大きな柱の一つになっていることも無視できない。

今回の調査は、このような動きを受け、前述したように当地域の旧地形の状況や遺構の広がり、分布密度等を詳細に把握する必要が早急に生じたことが、その契機になっている。この調査は、多賀城を取り巻く古代の都市景観を復元する意味でも、あるいは歴史を生かした現代の都市づくりに有効な手立てを与える意味でも、大きな役割を果たすと考えられる。幸い、多くの地権者の全面的な協力が得られたことや、文化庁が国庫補助事業の一つとして実施している「遺跡発掘事前総合調査」が本遺跡の目的と合致することから、県文化財保護課を交えて調整を行い、この事業の一環として本調査を行うことが認められ、実現の運びとなった。調査は、対象地を東西方向に横断する市道新田・上野線を境に南北に二分し、平成9年度と10年度の2ヶ年にわたって行うことになった。その1年目は南部を対象とし、平成9年10月末から開始し、年度内の終了を目指して実施するに至ったものである。

III 調査の目的と方法

1. 調査の目的

今回の調査は、多賀城南面における遺構の分布状況および旧地形の把握を目的とした。したがって遺構の形状を平面的に記録するにとどめ、遺構内埋土の掘り下げや断割り等は必要最小限度にとどめた。なお、沖積地という性格上複数の遺構面の存在が推定されるが、基本的に古代の遺構を対象としているため、下層遺構の調査は行っていない。

2. 調査区の地区割りとトレンチの設定

調査区は東西約700m、南北約900mの広大な範囲である。この調査区内には南北に市道水入線、東西に市道新田・上野線が走っており、調査区をおおよそ4分割している。便宜上、北西部をA区、北東部をB区、南東部をC区、南西部をD区とした。

調査期間および面積を考慮し、調査は基本的にトレンチ方式とした。多数の遺構の存在が推定されるA・B区は幅6m、遺構分布が希薄と推定されるC・D区については幅3mのトレンチとした。トレンチはA区に17、B区に14、C区に8、D区に16ヶ所設定した。番号はすべて通し番号である(註1)。

3. 発掘基準線の設定

発掘基準線は国土座標「平面直角座標系X」を使用して設定した。広い調査区内で発見される遺構と南北大路・東西大路との位置関係が理解できるよう考慮し、南北大路と東西大路の交差点における座標値X=-189,200.000、Y=13,850.000をそれぞれ東西・南北方向の基準線とした。これらの基準線の交点を今回の調査の原点とし、1m離れるごとに東西方向はE1・E2・E3…、W1・W2・W3…と表示し、南北方向についても同様に表示した。

4. 道路と区画の名称

道路の名称については、他の遺構と同様発見順にS X〇〇などの名称を付しているが、現在多賀城城外の道路に対し一般的に用いられている南北大路、東西大路、西1…、北1…などの名称も適宜使用した。また、方格地割りの個々の名称については、県文化財保護課で使用している名称に準拠した(註2)。南北大路・東西大路を基準とし、その北西地区では、北辺と西辺を画する道路の名称で示した。同様に、南西地区では南辺と西辺を画する道路、北東地区では北辺を東辺を画する道路、南東地区では南辺と東辺を画する道路をもってそれぞれ区画の名称とした(例:北1道路の南、西1道路の東の区画=北1・西1)。

(註1) B区では、遺構検出作業の過程において随時トレンチの拡張を行った。その際、出土遺物取り上げの都合上、実際にはより多くのトレンチ名を付しているが、煩雑になることを避けるため、近接するいくつかのトレンチは、番号の早いもので代表させた。

(註2) 宮城県教育委員会「山王遺跡II—多賀前地区遺構編」宮城県文化財調査報告書第167集 1995

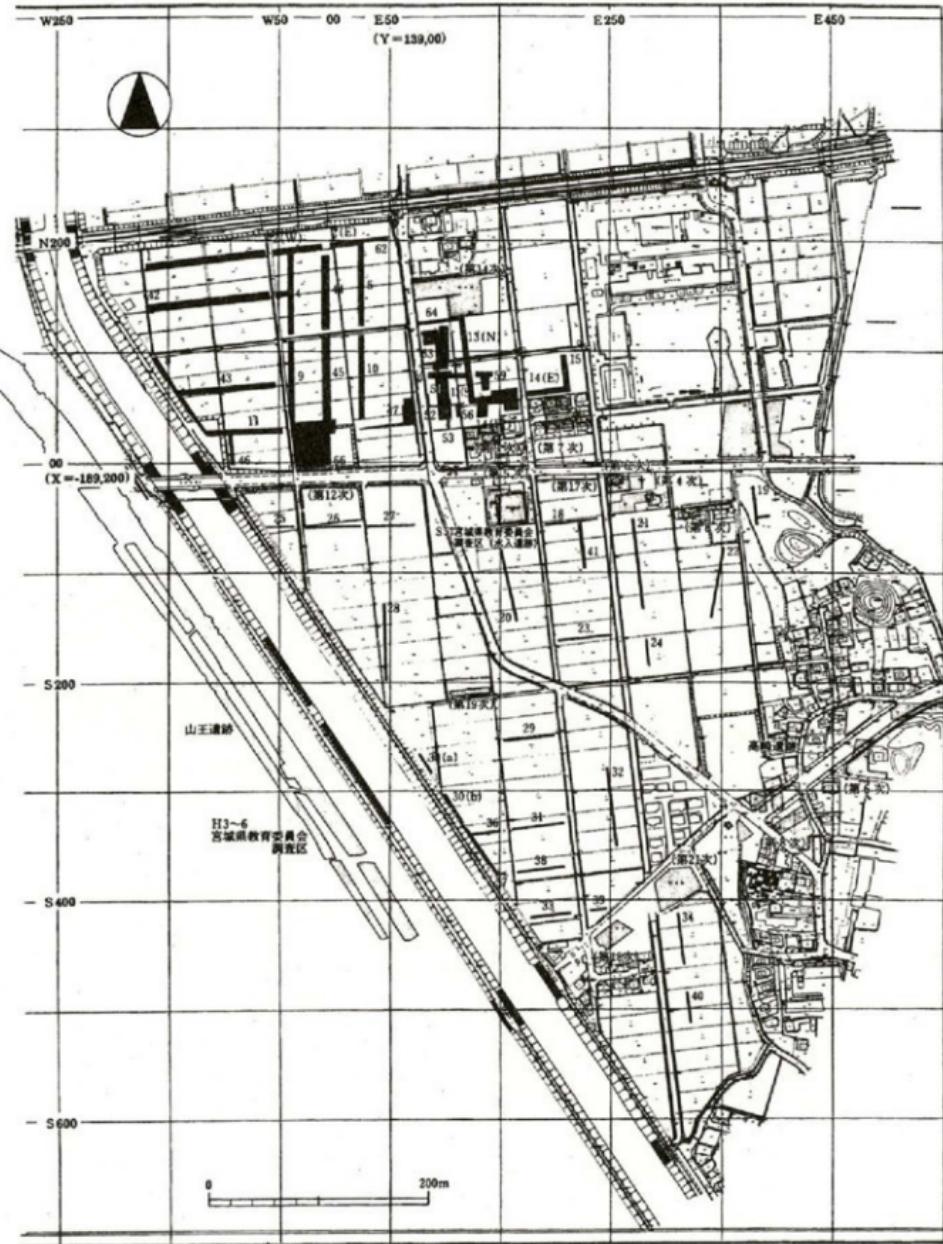


図3 地区割りおよびトレント配管図

仙塩広域都市計画事業多賀城市城南土地区画整理事業 総合現況図



第3図 地区割りおよびトレンチ配置図

IV 発見した遺構

1. A区東部地区

(1) A区東部地区的概要

本地区は、北は東北本線、東は市道水入線に面している。ほぼ全体が水田となっているが、北東部には若干の高まりが認められる。東側に位置する大臣宮の一部である。

トレンチの配置：南北大路の推定線上に南北方向のNo44・45トレンチを配し、その東側に南北方向のNo.5・10トレンチ、西側にも南北方向のNo.4・9トレンチ、さらにNo.4・5・44トレンチの北側に東西方向のNo.2・62トレンチを設定した。

層序：No.4トレンチ南半部には暗褐色粘質土が堆積している。南半部の旧砂押川の上層に堆積してさらにその北側に広がっているものであり、古代以降の堆積層と考えられる。No.44トレンチの北東部にも浅い窪みに黒褐色粘質土が堆積している。灰白色火山灰（註）降下以降の堆積層である。No.9トレンチでは南半部に黒褐色土があり、南端部ではその上面に灰白色火山灰が厚く自然堆積している状況を確認した。遺構は黒褐色土を切るものと、それに覆われるものとがある。本地区ではこれ以外に堆積層は認められず、表土を除去するとほとんどの地点で地山である黄褐色砂質土が現れ、遺構検出面となっている。

遺構分布：No.2トレンチでは西端部でS.I905堅穴住居跡、その南側でS.D906東西溝跡、中央部で南北大路西側溝などを発見した。No.4トレンチでは北端部でS.I913堅穴住居跡、その南側でS.K1061土壤などを発見した。No.5・62トレンチでは、S.I923堅穴住居跡、S.X924・925土器埋設遺構の他、溝跡、小ピット、旧河川など多くの遺構を発見した。小ピットは200基以上発見した。柱痕跡が確認できるものも少数あるが、建物として組み合うものは抽出できなかった。No.9トレンチでは、北端部で小柱穴、中央部で円形の土壤、その南側で東西・南北方向の溝跡などを発見した。

(2) 主な遺構の概要

【S.X910南北大路】No.2トレンチにおいて西側溝を検出した。東側溝は古代以降の旧河川によって破壊されており、検出できなかった。S.D911西側溝は、平面的には5時期の重複が認められ、最も古い時期のものが東側に位置し、それ以降は西側から順に東に移動している。最も古いA期側溝の上層より鉄滓（椀型滓）が出土している。また、No.44トレンチでは路面堆積層と見られる黄褐色砂質土を北壁から約10mにわたって確認した。部分的な断面観察によると、下層に灰白色火山灰の小ブロックが認められる部分がある。

【S.X924・925土器埋設遺構】No.5トレンチのほぼ中央部で発見した。いずれも小規模な掘り方に赤焼き土器高台付皿を埋設したものである。

【S.I905堅穴住居跡】No.2トレンチ西端部で発見した。南半部を検出し、規模は東西2.5m以上である。すでに床面が露出した状態であるが、部分的な断面観察によると下層に1～2枚の床面がみられ、炭化物層も確認した。

（註）灰白色火山灰の降下年代については、陸奥国分寺塔基壇周辺の発掘調査所見と、「日本紀略」承平4年閏正月15日条に見られる陸奥国分寺の塔焼失の記事とが関連付けられている。かつては承平4年（834）を下限として10世紀前半とされていたが（白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所 1980）、近年では10世紀前葉と表示されており（宮城県多賀城跡調査研究所「第61次調査」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1991』1992）、本書も後者に従った。

【S I 913竪穴住居跡】No.4 トレンチ北端部で発見した。S D906溝跡と重複し、それによって北壁が大きく破壊されている。南壁と東壁の一部を検出し、平面形はおおよそ方形と推定される。規模は東西2.2m以上、南北1.2m以上である。東壁に煙道がある。

【S I 923竪穴住居跡】No.5 トレンチ南半部で発見した。東辺と北辺・南辺の一部を確認し、規模は東辺が2.3m以上である。残存状況は悪く、すでに床面が露出している。東辺のほぼ中央に焼土面があり、カマドの可能性がある。

【SK 1061土壙】No.4 トレンチ北半部で発見した不整形の土壙である。規模は、南北約2.1m、東西2.0m以上である。灰釉陶器碗などが出土している。

【SD 1064河川跡】No.2・5 トレンチにおいて発見した。幅約9mで南北方向に延びている。中程には灰白色火山灰が自然堆積しており、最上層の暗褐色粘質土から赤焼き土器の破片が多量に出土した。

【旧砂押川】No.4・44・5 トレンチの南半部はすべて河川改修前の砂押川埋土である。現農道を隔てたNo.9 トレンチの北端部およびNo.45・10 トレンチのほぼ全体も古代から現代に至る河川の埋土となっている。年代的には近代以降のものであるが、護岸のため「しがらみ」を設けたものもあり、No.10 トレンチの南端部では全長約2.6mの木樋を検出した。A区東部地区では多くの部分が旧河道となっている（註）。

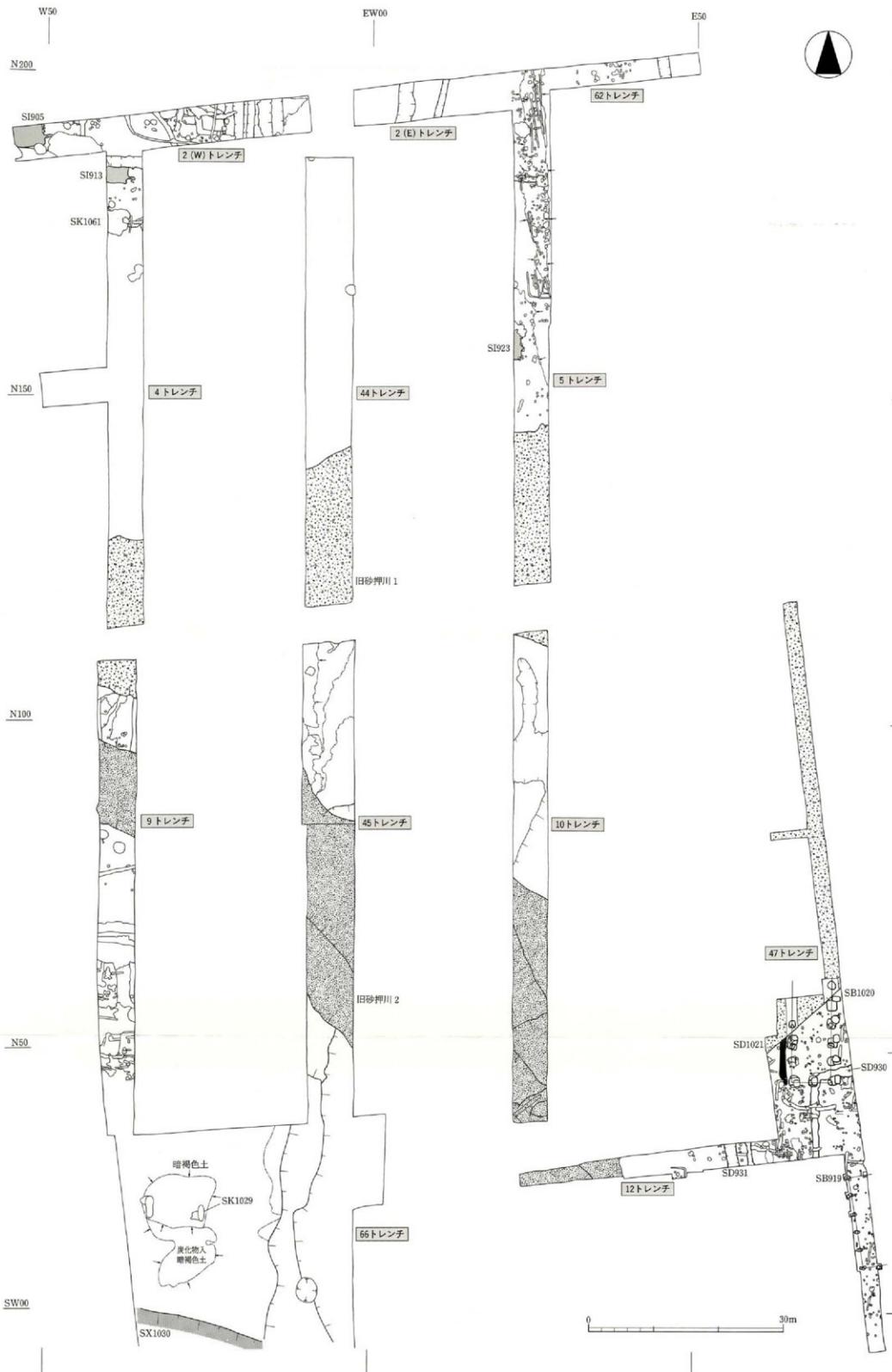


No.9 トレンチ旧砂押川2 「しがらみ」検出状況（南より）



No.10 トレンチ旧砂押川2 木樋検出状況（西より）

（註）旧砂押川1と旧砂押川2はいずれも河川改修前の砂押川と見られ、出土遺物等から近・現代に埋没したことは明らかである。両者の直接的な重複関係は把握できなかったが、平面的なあり方から見れば後者が新しい可能性が高い。ところで、明治24年の地形図（明治24年測量同年製版「鐵電」第二師団參謀部）および昭和22年撮影の航空写真にはそれぞれ当時の砂押川が確認でき、前者の方がやや北側を流れている。このことは発掘調査所見とも一致し、旧砂押川1から旧砂押川2に流路が変化したことがわかる。



第4図 A区遺構全体図(1)



W45

W30

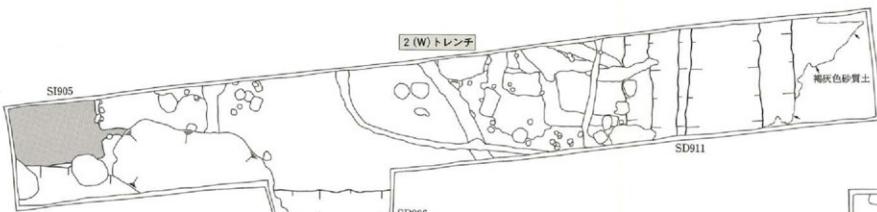
W15

EW60

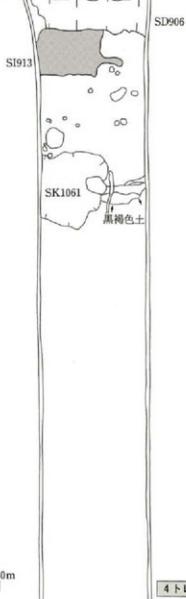
E15

E30

N195



N180



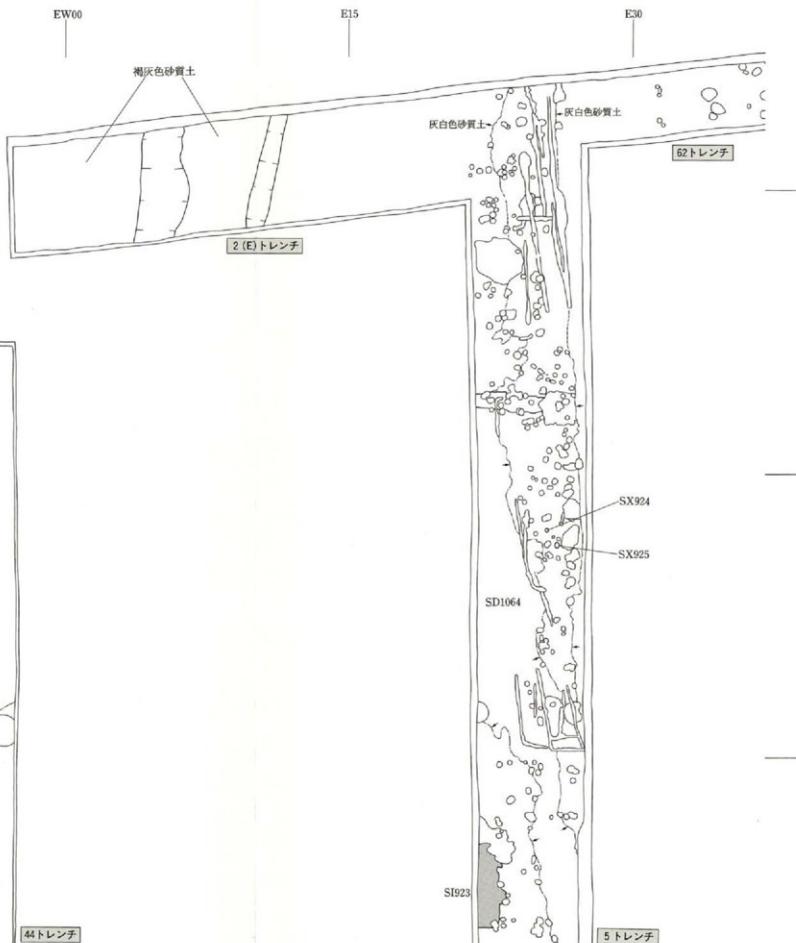
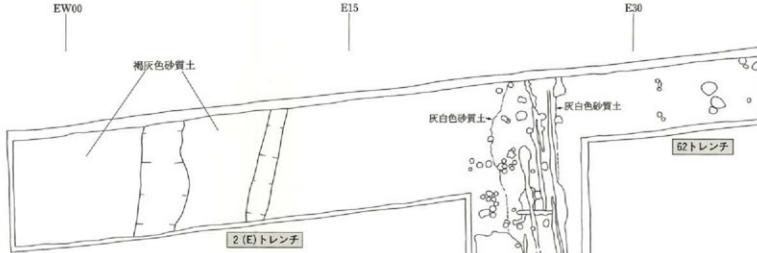
N165

30m

4 トレンチ



44 トレンチ



第5図 No.2・4・5・44・62トレンチ遺構平面図

2. A区西部地区

(1) A区西部地区的概要

本地区は、北は東北本線、西は砂押川、南は市道新田・上野線に面している。現況は全面が水田となっているが、昭和20年代初めまでは本地区北部を砂押川が東流しており、複数の旧河道が認められる。

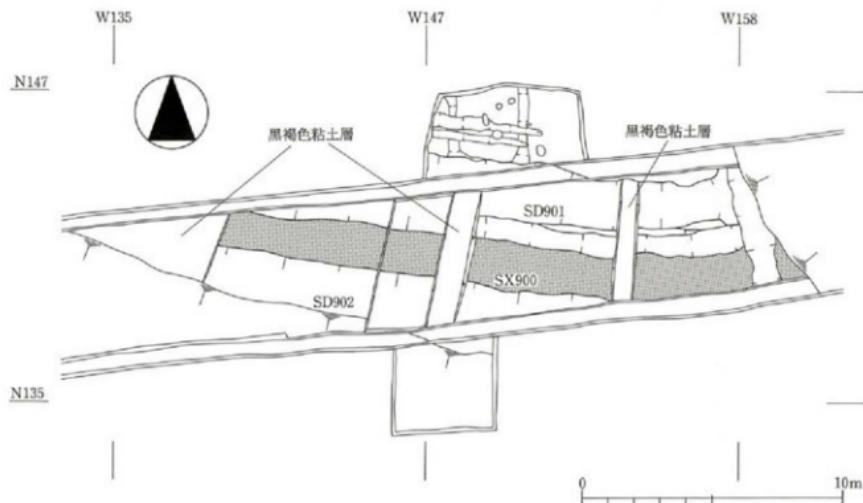
トレンチの配置：北側から東西方向のNo 1・42・43・11トレンチを配置し、砂押川沿いにはNo43トレンチの西端部に接続する南北方向のNo 8 トレンチを設定した。また、No11トレンチ西端部にはこれと接続する南北方向のNo46 トレンチを設けた。

層序：No 1 トレンチ西端部では表土下に黒褐色粘質土が薄く堆積しており、その下層にある黄褐色砂質土上面が遺構検出面となっている。No42 トレンチでは西部に灰白色火山灰降下以降に堆積した黒色粘土が帶状に認められ、中央部から東部でも灰白色火山灰降下以降の堆積層であるオリーブ褐色砂質土、及びそれ以前の河川埋土を確認した。No43 トレンチではNo 8 トレンチと接する部分に黑色粘質土が堆積している。その東側には灰黃褐色砂質土があり、その下が黃褐色砂質土の地山となっている。灰黃褐色砂質土及び地山上面が遺構検出面である。No11 トレンチでは西側に灰黃褐色砂質土、中央部から東部には整地層があり、それらの上面で多くの遺構を確認した。No 8 トレンチでは中央部にNo43 トレンチ同様黑色粘質土が堆積している。その北側及び南側は灰黃褐色砂質土の地山であり、多くの遺構を検出した。No46 トレンチではほぼ全面に灰白色火山灰降下以降の黒色粘土が厚く堆積している。

遺構の分布：No 1 トレンチでは西端部の地山上で掘立柱建物跡 5 棟、竪穴住居跡 1 軒、溝跡 5 条、土壙 4 基、その他多数の柱穴を発見した。中央部から東部はすべて古代から近・現代の河川埋土である。No42 トレンチでも調査区中央部から東部が河川埋土である。このうち西端部および中央部が近世以降の旧砂押川、東半部が灰白色火山灰降下以前の旧河川である。遺構は西部で S X 900東西道路跡、東部の旧河川埋土上面で S I 903 竪穴住居跡を発見した。No43 トレンチでは西端部で南北溝跡と東西溝跡を発見した。南北溝跡については、位置的にみて西 1 道路の西側溝である可能性がある。西部から中央部にかけて小溝群を発見した。東西方向のものと南北方向のものがあり、幅は 30~40cm のもののが多数を占める。中央部では多くの柱穴を検出したが、建物としての組み合わせは明らかでない。なお、中央部において灰黃褐色砂質土から漆紙文書が出土している(註)。No11 トレンチでは西部の灰黃褐色砂質土上面で土壙、溝跡の他、多数の柱穴を発見した。東部の整地層上面では灰白色火山灰の堆積する井戸をはじめ、溝跡や柱穴などを発見した。No 8 トレンチでは灰黃褐色砂質土上面で掘立柱建物跡 2 棟、竪穴住居跡 2 軒、土器溜め 1 基、その他多数の柱穴を発見した。掘立柱建物跡は北側の地山上で検出しており、方向が発掘基準線とほぼ一致する S B 1041 と、やや東に傾く S B 1042 がある。南部でも多くの柱穴を確認しており、建物跡の存在が推定される。なお、北部と南部で検出した柱穴の規模についてみると、北部では 1 辻 60cm 以上のものが多く、南部では 1 辻 20~30cm のものが多いという傾向が窺える。竪穴住居跡は 2 軒発見した。中央部の S I 1043 は南側が黒色粘質土の堆積層に覆われており、全体の規模は明らかでない。南半部の S I 1039 は東西約 4.9m、南北約 4.9m のものである。床面と西側及び北側の周溝が露出しており、残存状況は悪い。No46 トレンチでは S X 1030 東西大路跡や土壙、柱穴などを発見した。S X 1030 東西大路跡は平面的には路面上に堆積した黒色粘土の範囲を検出したにすぎないが、断面で側溝の存在を確認している。

(註) 検出時にはすでに60点の断片となっていた。そのうち2点に文字、12点に墨痕が認められた。

(2) 主な遺構の概要



第6図 SX900東西道路跡平面図

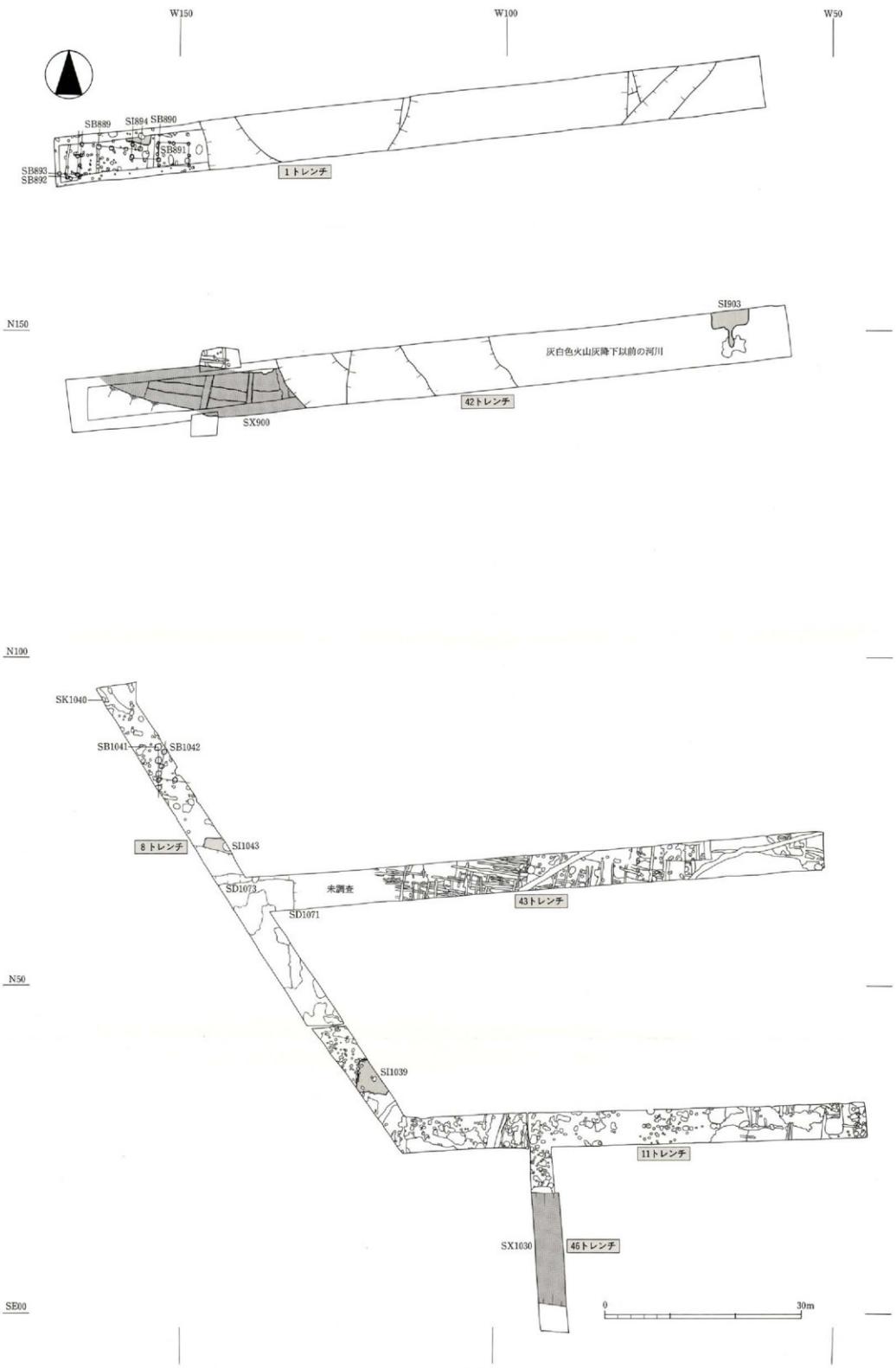
【S X 900東西道路跡】No42トレンチ西部で発見した北1道路である。黒褐色粘土層に覆われており、それを除去した段階で路面および素掘りの側溝を検出した。約20mにわたって検出したが、東西両端は近世以降の旧砂押川によって破壊されている。側溝は、北側溝がSD901、南側溝がSD902である。SD901は平面的にみると、3時期の重複(a→b→c期)が認められた。このうちSD901bの埋土2層には、灰白色火山灰ブロックが多量に混入している。路面の幅はもっとも新しい段階で約1.7mであり、方向は路面中軸で計ると東で約8度南に偏している。

なお、北側溝の東端部はいずれも北側に緩やかに屈曲しており、東側に西1道路との交差点の存在が推定される。

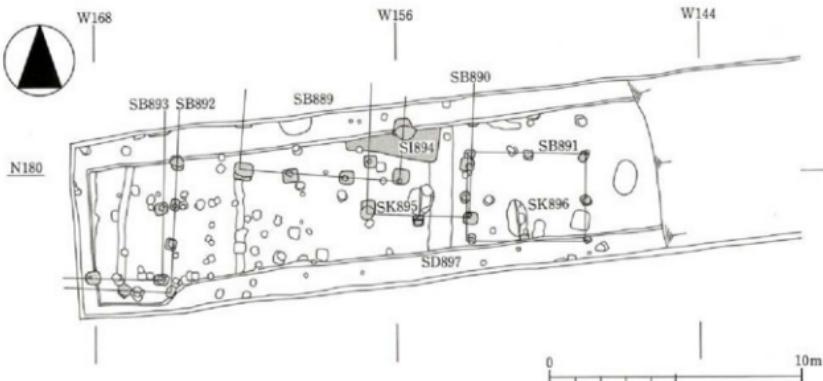
【S B 889掘立柱建物跡】No1トレンチ西端部で発見した東西3間、南北2間以上の東西棟掘立柱建物跡である。S B 890掘立柱建物跡、S I 894堅穴住居跡と重複し、後者よりも新しい。6基の柱穴を検出しており、そのうちの3基で柱痕跡を、2基で柱抜取穴を確認した。桁行は南側柱列で総長約6.3m、柱間が西より約1.9m、2.20m、2.16mであり、東妻の柱間は南より1間目が約2.2mである。方向は南側柱列で計ると、東で約5度南に偏している。柱穴は一辺52~68cmの方形であり、深さは南東隅柱穴で50cmである。柱痕跡は径18~22cmである。柱痕跡の上面や柱抜取穴には炭化物が多く認められた。

遺物は、柱抜取穴から土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。このうち土師器杯はロクロ調整を行ったものであり、甕は非ロクロ調整とロクロ調整の両者がある。

【S B 890掘立柱建物跡】No1トレンチ西端部で発見した南北3間以上、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。S B 889・891掘立柱建物跡と重複し、後者より新しい。6基の柱穴を検出しており、そのうち2基で柱痕跡を、4基で柱抜取穴を確認した。梁行は南妻で総長約4.0m、柱間が西より約2.0m、約2.0mであ



第7図 A区遺構全体図(2)



第8図 SB889・890掘立柱建物跡、S I 894竪穴住居跡ほか平面図

り、桁行の柱間は東側柱列で南より1間分が約2.0mである。方向は南妻で計ると、東で約2度南に偏している。柱穴は一辺40~52cmの方形であり、深さは南東隅柱穴で52cmである。柱痕跡は径16~18cmである。

遺物は、柱切取穴から土師器杯・甕が出土している。このうち杯はロクロ調整を行ったものであり、底部が糸切りのものと手持ちヘラケズリのものがある。

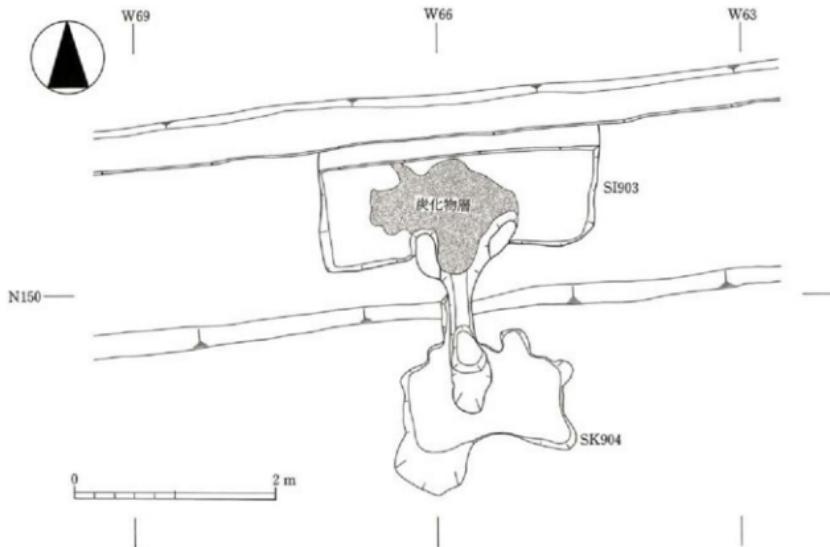
【S B 891掘立柱建物跡】No 1 トレンチ西端部で発見した東西2間、南北2間の東西棟掘立柱建物跡である。S B 890掘立柱建物跡、S K 895土壤と重複し、それらよりも古い。すべての柱穴を検出しており、そのうち3基で柱痕跡を、5基で柱抜取穴を確認した。桁行は北側柱列で総長約4.5m、柱間が西より約2.3m、約2.2mである。梁行は東側柱列で総長約3.5m、柱間は北より約1.7m、約1.8mである。方向は北側柱列で計ると、東で約1度南に偏している。柱穴は一辺24~40cmの方形であり、深さは西妻棟通下柱穴で42cmである。

【S B 1041掘立柱建物跡】No 8 トレンチ北半部で発見した南北3間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。5基の柱穴を発見しているが、柱痕跡は確認していない。柱穴の中心に柱位置を想定すると、方向はおおよそ発掘基準線と一致している。柱間は、南北方向が約2.0m、東西方向が約2.5mである。柱穴の平面形はおおよそ方形であり、規模は一辺約80cmである。

【S B 1042掘立柱建物跡】S B 1041掘立柱建物跡の東側で発見した南北2間以上、東西2間以上の掘立柱建物跡である。4基の柱穴を発見しているが、柱痕跡は確認していない。柱穴の中心に柱位置を想定すると、方向は南北柱列では北で約8度東に偏している。柱間は、南北方向が約2.0m、東西方向が約2.3mである。柱穴の平面形はおおよそ方形であり、規模は一辺約70cmである。

【S I 894竪穴住居跡】No 1 トレンチ西端部で発見した竪穴住居跡である。検出した時点で既に床面が露出しており、残存状況は悪い。S B 889掘立柱建物跡、S D 897溝跡と重複し、前者よりも古く後者よりも新しい。平面形は方形であり、規模は東西約3.5m、南北1.8m以上である。方向は南辺で計ると東で約9度南に偏する。床面は黒褐色土の貼床である。南東部で炭化物が多量に混入する堆積層を確認した。

【S I 903竪穴住居跡】No 42 トレンチ東側で発見した竪穴住居跡である。灰白色火山灰降下以前の旧河川埋土上面で確認した。S K 904土壤と重複し、それよりも古い。平面形は方形であり、規模は東西約2.7m、



第9図 SI903堅穴住居平面図

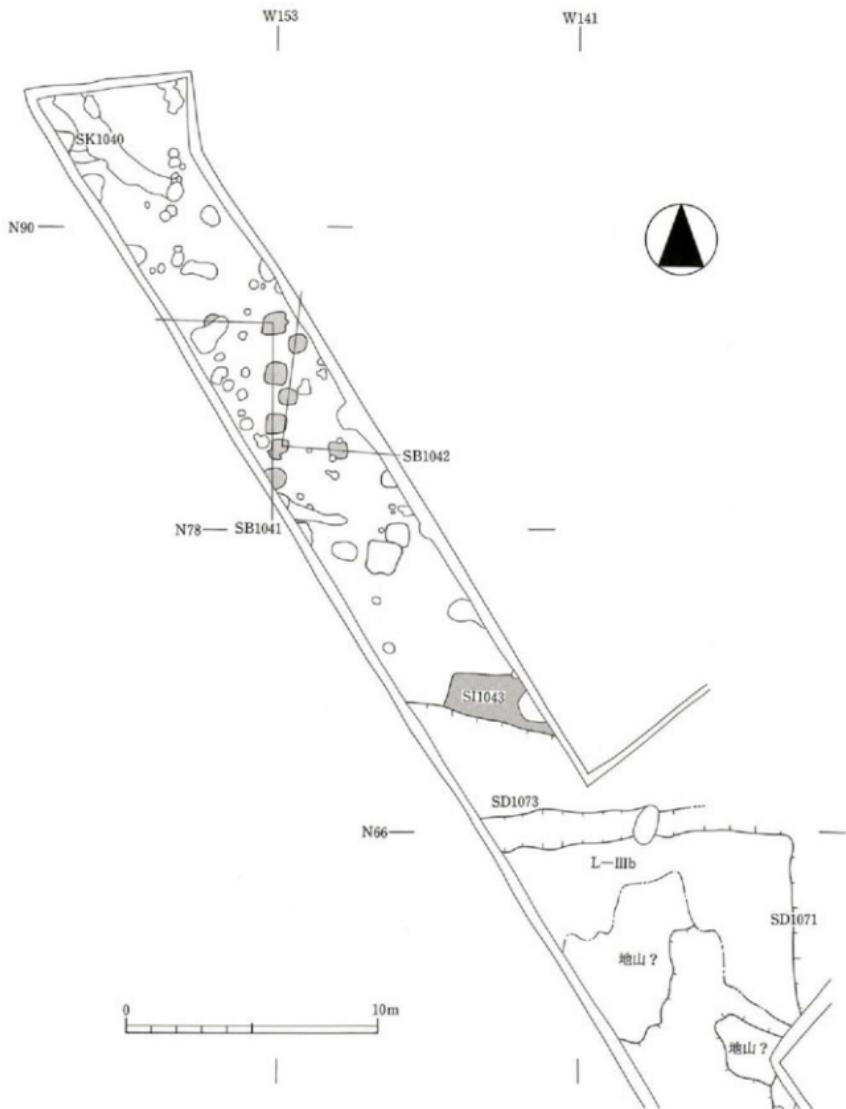
南北1.2m以上である。方向は南辺で計ると東で約8度北に偏する。壁は約10cm残存しており、床面は暗褐色砂質土と黄色粘質土による貼床である。カマドは南辺中央部に敷設されている。側壁は黄色粘質土で構築されており、残存高は8~10cmである。燃焼部は最大幅約40cm、奥行約60cmであり、底面には焼土、炭化物が多量に堆積している。煙道は長さ約1.4m、幅14~20cm、深さ15~20cmであり、先端部が他の底面より一段深くなっている。

遺物は埋土から土師器杯・壺、須恵器杯・高台付杯が出土している。土師器杯はロクロ調整を行ったものであり、底部が回転糸切り無調整のものと手持ちヘラケズリの再調整が施されたものがある。土師器壺はロクロ調整されたものである。

【S D1071・1073溝跡】S D1071溝跡は、西1道路西側溝の可能性がある南北溝である。南北大路中心線(推定)より110m西側で発見した(註)。S D1073溝跡は、その西側に連結する東西方向の溝である。区画溝の可能性がある。いずれも方向は発掘基準線とほぼ一致している。S D1073溝跡は幅1.0~1.6m、S D1071溝跡は幅約0.5mである。

【S K1040土器溜め】No.8トレンチ北端部で発見した東西1.1m以上、南北1m以上の土壠である。多数の土器が折り重なるように埋まっているもので、いわゆる土器溜めである。

(註) 南北大路推定線は、第11次調査区No.2トレンチおよびNo.6トレンチにおける計測値の内、大路の幅員が約19mから約23mに拡幅されたB期の路面中心点を結び、延長したものである(多賀城市教育委員会『市川橋遺跡-第11次調査報告書』-多賀城市文化財調査報告書第50集 1998)。それぞれの中心点の座標はNo.2トレンチ:X=-188,943.65 Y=13,840.54、No.6トレンチ:X=-188,868.40 Y=13,844.96である。



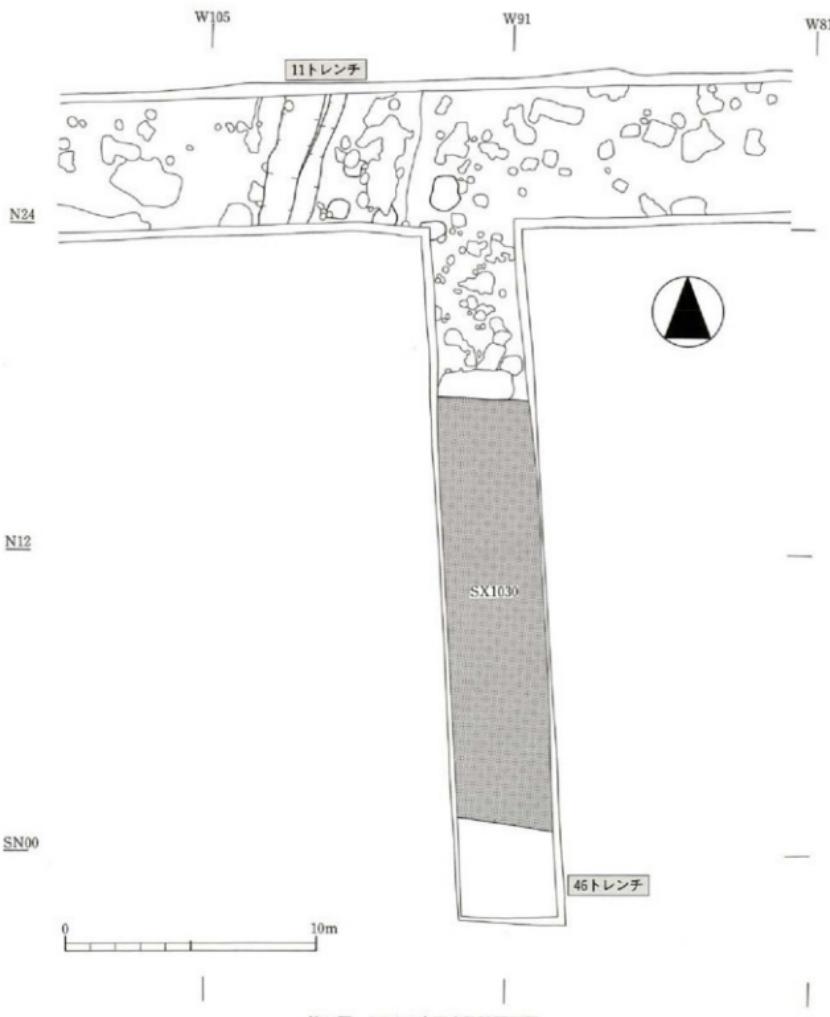
第10図 SB1041・1042据立柱建物跡、SI1043竪穴住居跡ほか平面図

3. A区南部地区

(1) A区南部地区的概要

本地区は、南側が市道新田・上野線、東側が市道水入線に面している。

トレンチの配置：北部地区のNo.9・45・10トレンチの南側に東西35m、南北42mのNo.66トレンチ、その東側に東西方向のNo.12トレンチ、さらにその東端部に南北方向のNo.47トレンチをT字状に配置した。



第11図 SX1030東西大路跡平面図

層位：No12・47・48トレンチでは表土を除去すると直ちに地山である黄褐色土が現れたが、No66トレンチでは遺物を多量に含む黒褐色砂質土があり、トレンチ全体に厚く堆積している。灰白色火山灰降下後の堆積層であり、10世紀前葉以降のものである。

遺構分布：No66トレンチは、今回の調査では黒褐色砂質土を除去できず、遺構の平面的な状況を確認するには至らなかった。しかし、本トレンチには南北大路・東西大路の交差点の存在が想定されることから、サブトレンチを設定してそれぞれ路面や側溝などの確認に務めた。東西大路については残存状況が良好と推定されるが、南北大路については東側が10世紀前葉以降の旧河川によって大きく破壊されている。また、南北大路西側において地山が露出している部分ではいくつかの土壙を発見している。No12トレンチでは小柱穴や溝跡、土壙、河川改修前の旧砂押川などを発見した。No47トレンチでは大規模な南北棟掘立柱建物跡を発見した。その北半部は、市道下で大きく蛇行する旧砂押川で破壊されている。その南側では桁行5間の南北棟掘立柱建物跡を発見した。建物としてまとまらない小柱穴も多数あり、さらに多くの建物跡の存在が推定される。

(2) 主な遺構の概要

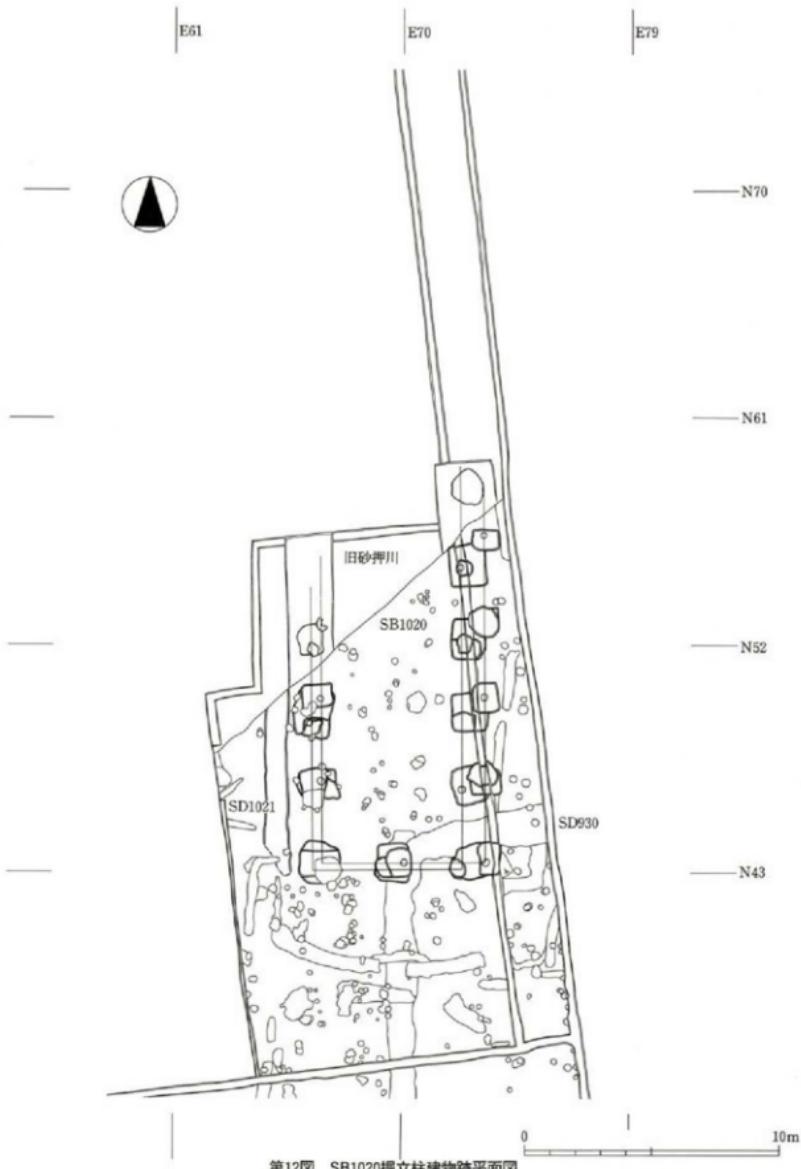
【S X 1030東西大路】No66トレンチにおいて表土を除去したところ、上面を覆う黒褐色砂質土が東西方方向に延びる溝状のくぼみとなって現れ、道路自体が他の遺構面より低く造成されていることが分かる。西壁にサブトレンチを入れ、南北両側溝および路面を発見した。いずれも数時期の重複がある。最も新しい路面は、道路の北側より0.7m低い。遺物は鹿角製品（図版19-1）、および末製品、鉄斧（図版17-17・18）、鎌（図版17-16）などが出土している。

【S B 1020掘立柱建物跡】No47トレンチのほぼ中央で発見した桁行5間以上、梁行2間の南北棟掘立柱建物跡である。旧砂押川により北側を大きく破壊され、南妻と東西両側柱列の一部を検出した。東側柱列は5間分、西側柱列は3間分発見し、すべての柱穴で2時期の重複（A→B期）を確認した。また、西側柱列の西側でSD1021雨落ち溝を1条検出した。

A期：多くの柱穴に柱抜取穴が認められたが、3基の柱穴で柱痕跡を確認した。柱痕跡を確認していないものについては柱抜取穴の中心に柱位置を想定して柱間を推定すると、東側柱列では、南より約3.1m、約2.7m、約2.7m、約3.2m、約3.2mである。また、柱痕跡を確認した南より1間目と4間目の柱間は、3間分で8.86mである。梁行についてはおよそ6.0mである。柱穴の平面形は方形であり、規模は1辺1.4~1.7mである。遺物は、西側柱列の南妻より3間目の柱抜取穴から土師器杯が1点出土している（第32図8）。ロクロ調整後底部を持ちヘラケズリしたものである。

B期：東側柱列はA期より東側に移動し、さらに両側柱列の柱穴の位置はやや北側に移動している。6基の柱穴で柱痕跡を確認した。方向は、東側柱列でみると北で0度34分西に偏しており、おおよそ発掘基準線と一致している。柱間は、東側柱列では南より6.55m（2間分）、6.42m（2間分）である。西側柱列では南より約3.5m、3.29m、約3.9mである。梁行については、総長約6.4m、柱間は西より約3.2m、3.22mである。柱穴の平面形はおおよそ方形であり、規模は長辺1.1~1.5m、短辺0.8~1.1mである。遺物は、南妻棟通下の柱穴から土製人形が1点出土している（第32図12、図版18-6）。

雨落ち溝：SD1021溝跡は、西側柱列の西側で発見した雨落ち溝である。西側柱列との間隔は、溝の中心で見ると0.6~0.8mである。残存状況が悪く、南西隅柱穴の西側で途切れている。規模は幅0.9~1.0mである。

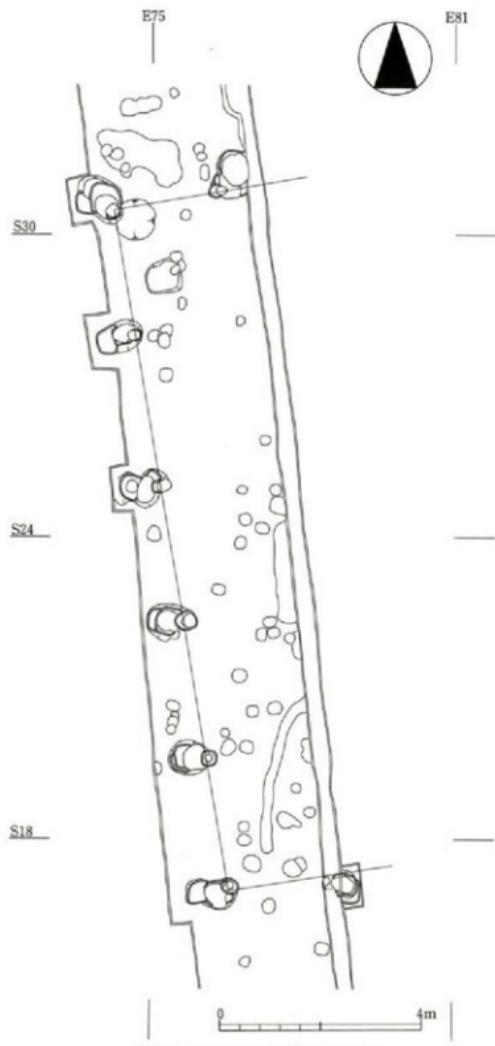


第12図 SB1020掘立柱建物跡平面図

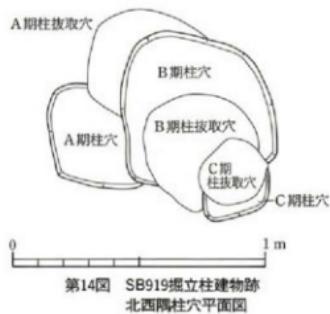
【SB919掘立柱建物跡】No.47トレンチ南半部で発見した南北5間、東西2間以上の南北棟掘立柱建物跡である。3時期の変遷(A→B→C期)があり、新しくなるにつれて柱穴の位置が内側に入り込んでいる。最も新しいC期では8基の柱穴を検出しており、そのうち2基で柱痕跡を、6基で柱抜取穴を確認した。規模は柱抜取穴の中心に柱位置を想定すると、桁行については西側柱列で総長約13.6m、柱間が南より2.60

m、約2.8m、約2.7m、約3.0m、約2.5mである。北妻の柱間については、西より1間目が約2.1mである。方向は西側柱列で計ると、北で約10度西に偏している。柱穴は一辺30~40cmの方形であり、柱痕跡は径16~18cmである。

【SK1029土壤】No.66トレンチの地山上で発見した楕円形の土壤である。規模は長径約2.4m、短径約1.0mである。埋土には灰白色火山灰ブロックが多量に混入しており、検出時に富寿神寶が1点出土した(図版17-13)。



第13図 SB919掘立柱建物跡平面図



第14図 SB919掘立柱建物跡
北西隅柱穴平面図

4. B 区

(1) B区の概要

本地区は、西側が市道水入線、南側が市道新田・上野線に面している。

トレンチの配置：東西方向のNo63・49・14トレンチを北から順に配し、No49トレンチと直交してNo63・14トレンチと連結する南北方向のNo13トレンチ、No14トレンチの東端部に連結する南北方向のNo15トレンチをそれぞれ設定した。さらに、それらのトレンチにおける成果を受け、No50・51・53・54・56・59・64トレンチを追加設定した。

層序：No14トレンチ西半部から西側にかけては遺物を多量に含む暗褐色土が堆積している。この上面では溝跡や小ピットなどわずかの遺構も見られるが、ほとんどの遺構はこの層によって覆われている。この層の上面には灰白色火山灰ブロックが認められる。また、No13トレンチの北半部では黒褐色粘質土が堆積しており、ほとんどの遺構を覆っている。この上面では帯状に延びる灰白色火山灰を数条検出したのみであり、古代以降の水田に関わる擬似畦畔と見られる。また、No49トレンチ東端部およびNo15トレンチでは東側に向かって地盤が傾斜しており、亜泥炭層（スクモ層）の堆積が見られる。

遺構の分布：次に遺構の分布状況について北側のトレンチより見ていいく。No63トレンチではほぼ全域で多数の小柱穴を検出した。柱痕跡が確認されたものもあるが、建物として組み合うものは抽出できなかった。この小柱穴群はその南側のNo64トレンチ北側まで及んでいる。No64トレンチからその南側のNo49（西半部）・50・51トレンチにかけて大規模な南北棟掘立柱建物跡2棟とそれらに伴う雨落ち溝、それらよりも古い方形区画溝や旧河川、また井戸跡、溝跡、土壤など多数の遺構を発見した。その東側に位置するNo13トレンチにおいても小規模な掘立柱建物跡2棟、区画溝、土壤などを発見した。遺構は南側に多く分布している。No14トレンチでは、西半部において南北溝、小規模な掘立柱建物跡、土壘状遺構および溝跡、井戸跡などを発見した。南北溝はその北側に設定したNo59トレンチおよびNo49トレンチ東半部においても確認した。このように、各トレンチにおいて多数の遺構を発見しているが、南西部に設定したNo53トレンチでは西半部で東西溝および南北溝、その南側のNo54トレンチでも東半部で南北溝を1条発見したのみで遺構の分布は希薄である。本地区北東部にあたるNo14・49トレンチ東半部およびNo15トレンチではさらに遺構が少なく、No15トレンチで南北溝と東西溝を各1条、No49トレンチ東端部でも溝1条を発見したのみであり、地形のあり方に影響されている状況がうかがわれる。



E100

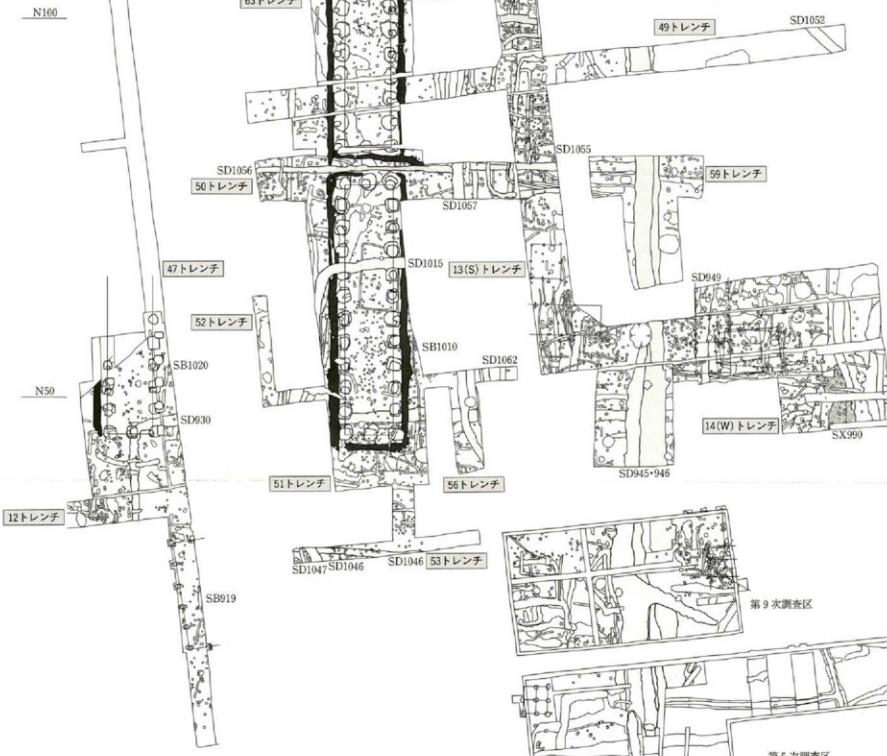
E150

N150



第14次調査区

N100



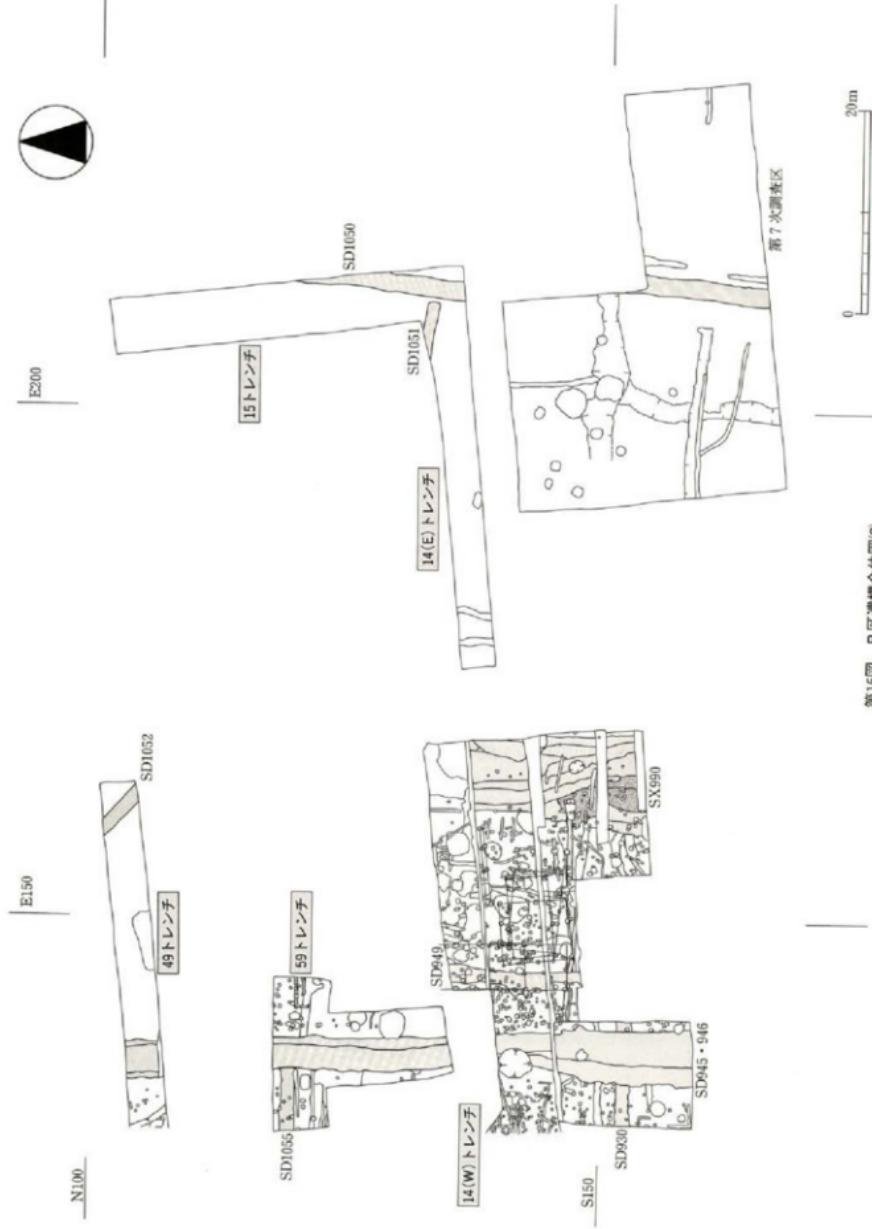
第9次調査区

第5次調査区

0

30m

第15図 B区遺構全体図(1)



第16図 B区測量全体図(2)

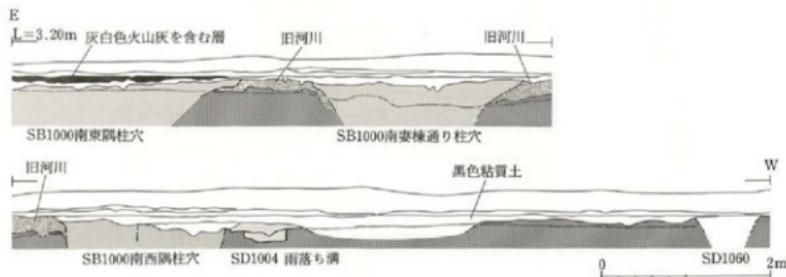
(2) SB1000掘立柱建物跡

No.49トレンチ西半部及びNo.64トレンチで発見した南北11間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。ほぼ同位置での2時期の重複（A→B期）を確認した。A期、B期とも全ての柱が抜き取られている。付属施設として雨落ち溝（SD1001・1002・1003・1004）を確認した。なお、建物の内側でそれとほぼ同じ方向で並ぶピット列を発見した。本建物構築時に建てられた足場穴の可能性が考えられる。

A期：東側柱列の南妻から2間目と3間目の柱穴においてB期柱あたりとA期のそれがおおよそ同位置であることから、A期の柱位置はB期とほぼ同じであったものと推定される。柱穴の平面形は方形で、規模は西側柱列南妻より3間目で見ると長辺1.5m、短辺1.4m、深さ1.0mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は北東隅柱穴でみると、灰黄褐色土を主体とし、黒色粘土ブロック、黄褐色砂質土ブロックが混入している。

B期：桁行については、柱抜取穴の中心に柱位置を想定すると、東側柱列で総長約32.7m、西側柱列で総長約33.0mである。柱間については、柱のあたりが確認できた東側柱列南妻より2間目と3間目の柱穴間が約2.8mである。梁行は柱抜取穴の中心に柱位置を推定すると北妻が総長約6.9m、柱間が西より約3.7m、約3.3mである。軒の出は、柱のあたりと雨落ち溝の中心の間隔から約1.2mと推定される。方向は、西側柱列で柱のあたりが確認できた南妻から3間目と8間目の柱穴で見ると北で約2度東に偏っている。柱穴の平面形は方形で、規模は東側柱列の南妻から9間目の柱穴でみると長辺0.9m、短辺0.8m、深さ0.7mである。壁はほぼ垂直に掘り込まれている。埋土は南東隅柱穴から9間目でみると、黄褐色砂質土、黒褐色粘土、オリーブ灰色砂質土ブロックが入混じった土である。それぞれのブロックはA期のものよりも細かいのが特徴である。

雨落ち溝：SB1000の北辺がSD1001、東辺がSD1002、西辺がSD1003、南辺がSD1004である。南辺を除き2時期の変遷（A→B期）がある。規模はB期で見ると、上幅0.6~1.0m、下幅0.4~0.5m、深さ10~20cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土はA期が灰黄褐色土で地山ブロックを多く含み、B期が黒褐色土である。底面レベル（標高）を見てみると、SD1001の東端ではA期が2.44m、B期が2.56m、北東隅柱穴北側ではA期が2.50m、B期が2.58mとなっており、かなり緩やかではあるが東に向かって傾斜している。なお、SD1001に続くと考えられる溝をNo.64トレンチ東側のNo.13トレンチで発見した。No.13トレンチの東側一帯は東に向かって傾斜し、湿地帯が広がっていることから、東側の湿地に向かって排水していた可能性が高い。



第17図 SB1000・旧河川土層堆積状況



E81

E90

E99

N117

N108

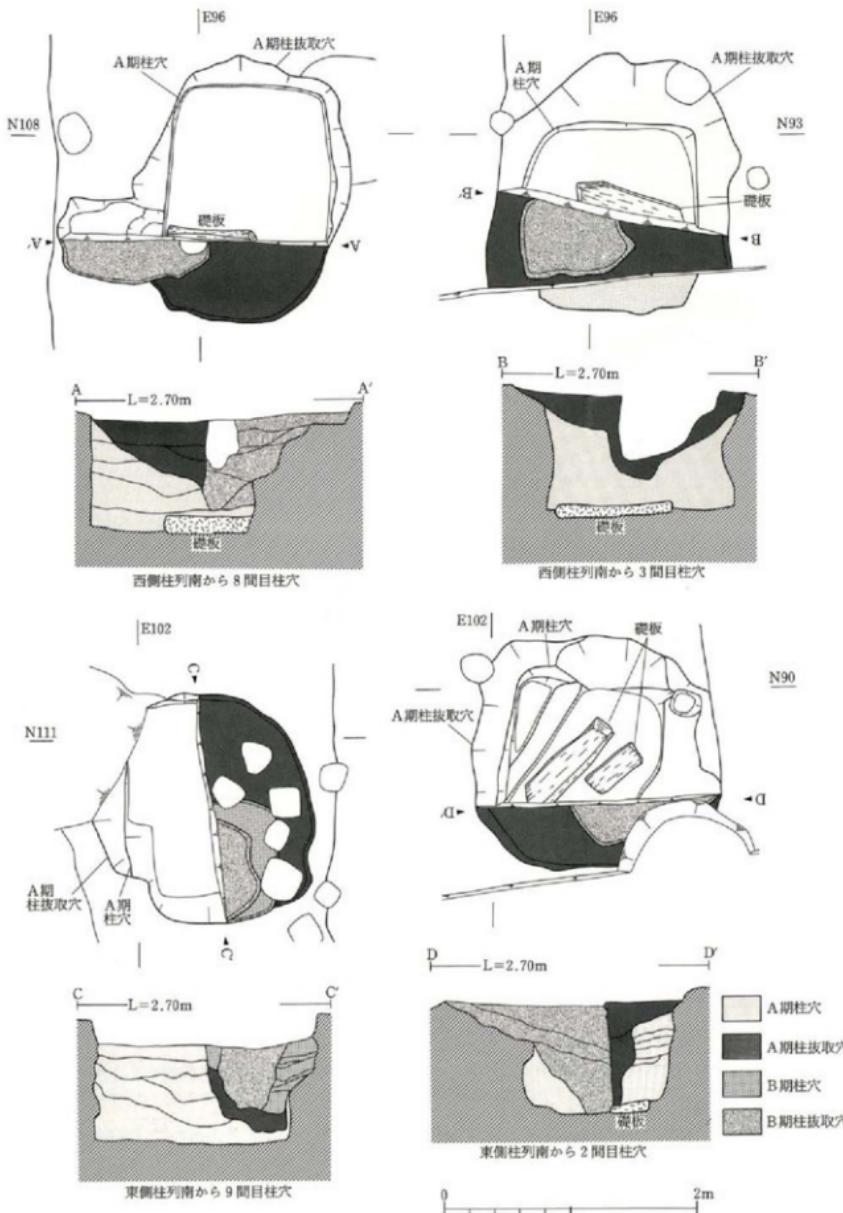
N99

N90

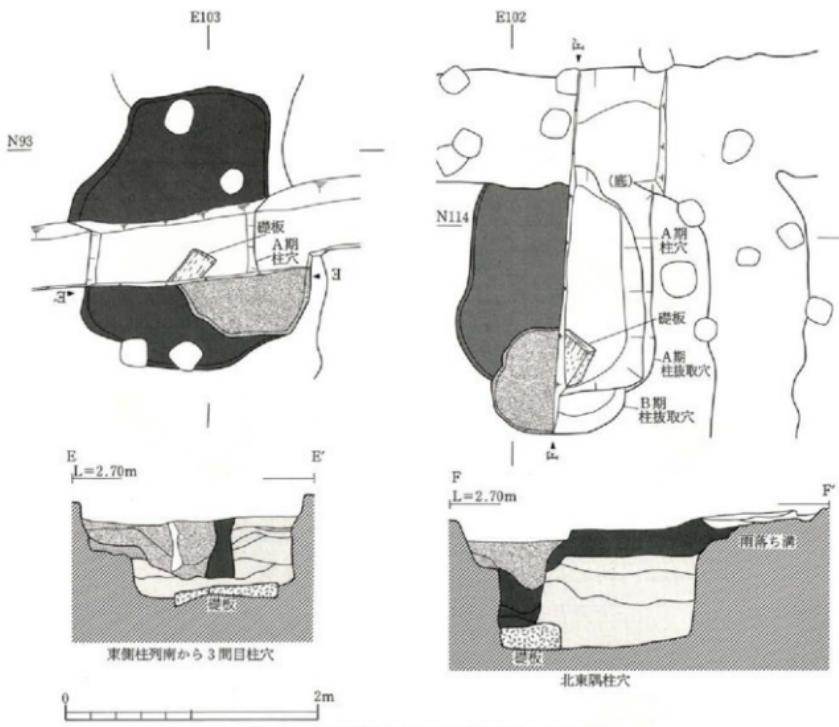
N81

0 10m

第18図 SB1000振立柱建物跡平面図



第19図 SB1000振立柱建物跡柱穴平面図・断面図(1)



第20図 SB1000掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(2)

足場穴：建物の内側で14基発見した。平面形はほぼ方形で、規模は一辺約20cmである。間隔は1.0~3.2mと一定していない。柱痕跡を確認できたものはない（第18図で網をかけた小穴）。

(3) S B1010掘立柱建物跡

No50・51トレチで発見した南北11間、東西2間の南北棟掘立柱建物跡である。本建物は、ほぼ同位置で2時期の重複（A→B期）を確認している。柱穴は第II層に覆れ、すべて地山面で検出した。

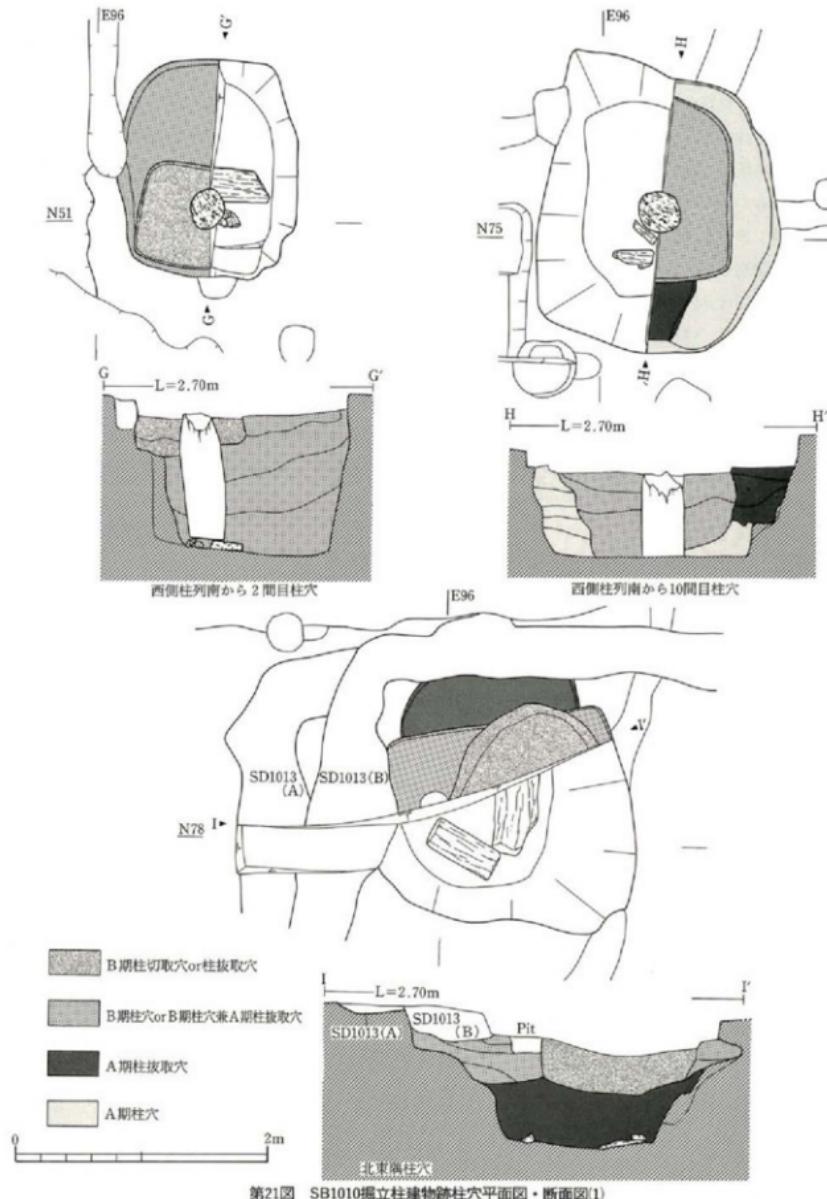
A期：B期の柱穴によってすべて破壊されているため、柱位置が明らかなものはない。しかし、この時期の礎板とみられる柱材を2基の柱穴で確認しており、それとB期の柱位置とが近接していることから、この時期の柱位置および方向についてはB期と同様と考えておきたい。柱穴は方形であり、規模は1辺1.6~1.8mである。埋土は黒褐色砂質土、灰オリーブ色粘質土を主体とし、灰黄色砂質土・暗緑灰色粘質土などがある。西側柱列南から10間目柱穴でみると、10~20cmの互層となっており、B期と比較して丁寧な作業工程が窺える。

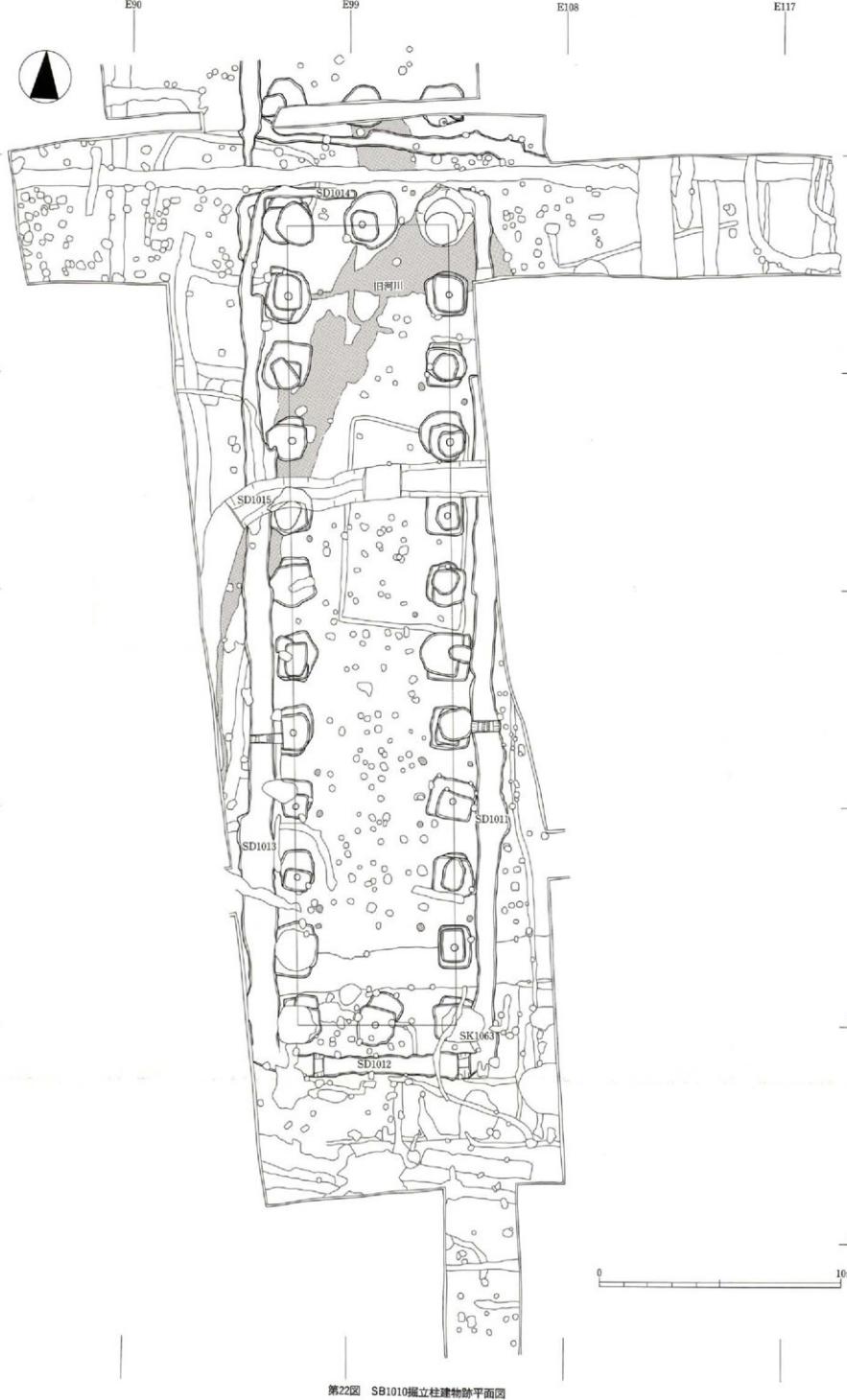
B期：12基の柱穴で柱痕跡を確認した。それらの中には柱切取穴が底面付近にまで及んでいるものもある。断ち割りを行った6基のうち3基は礎板の上に柱が据えられていた。桁行については、棟通り下柱穴でみると、33.12mである。柱間は西側柱列で北より約2.9m・6.20m（2間分）・12.06m（4間分）・2.98m・2.98m・約2.9m・約3.2m、東側柱列でみると北から約2.9m・6.14m（2間分）・3.04m・11.84m（4間分）

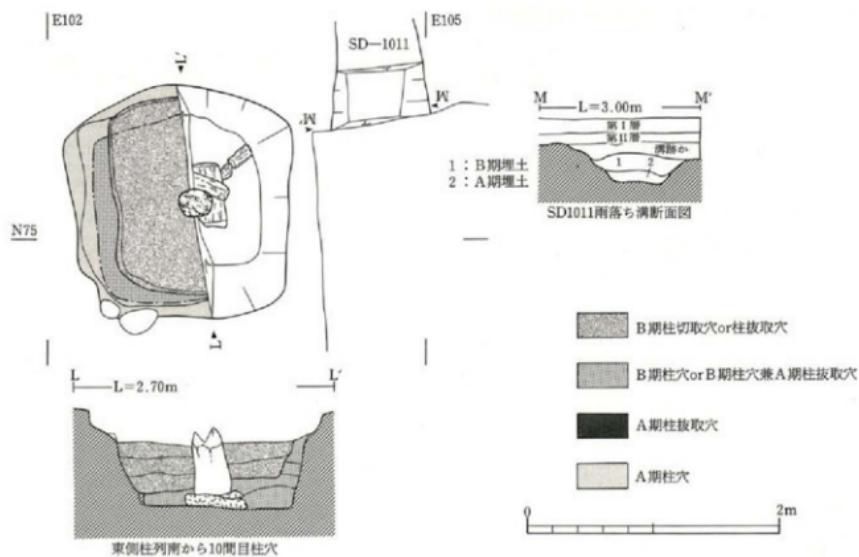
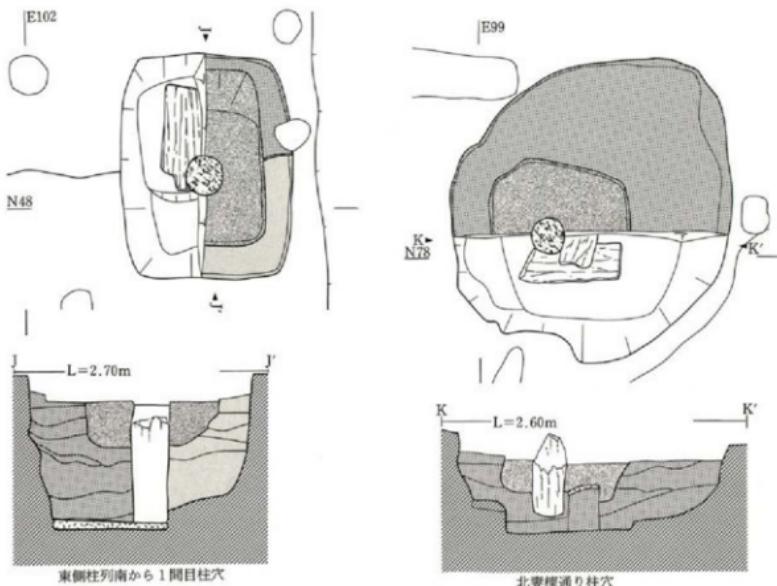
分)・約2.9m・約3.1m・約3.2mである。梁行は北妻で総長約6.7m、南妻で総長約6.5mである。軒の出は、西側柱列とB期雨落ち溝の中心でみると約1.2mである。方向は東側柱列でみると北で約1度西に偏している。柱穴は方形であり、1辺1.0~1.7mである。壁は垂直に掘られており、深さは0.9m~1.5mである。埋土は、黒褐色粘質土を主体とし、黄褐色土や暗オリーブ灰色土が粗く互層となっている。

遺物は、柱穴から土師器杯・甕、須恵器杯が出土している。柱抜取穴からは、土師器杯・耳皿・甕、須恵器杯、黒色漆を施した椀（あるいは皿）、櫛、メガネ状木製品が出土している。土師器杯・甕は、調整が明らかなものはすべてロクロ調整を行ったものである。

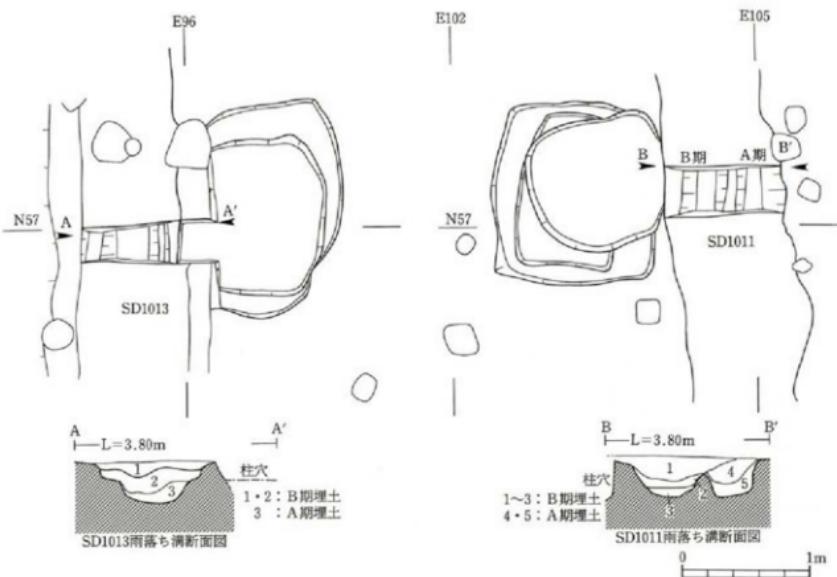
雨落ち溝：S B1010掘立柱建物跡の東辺がS D1011、南辺がS D1012、西辺がS D1013、北辺がS D1014である。建物と同様2時期の変遷（A→B期）がある。A期はB期とほぼ同位置で重複しており、平面的に検出したのは北西部のみである。規模は幅が0.55mである。埋土は2層に分かれ、褐灰色粘質土が主体である。B期は、残存状況の悪い北辺の一部を除き、おおよそ建物の周囲を巡っている状況を確認した。北西隅のみやや内側に入り込んでいるが、それ以外はおおよそ直角に曲がっている。規模は幅0.5~1.0mであり、深さはS D1012で0.2m、S D1011・1013で約0.3mである。埋土は3層に区分でき、1層は黒褐色粘質土、2・3層は褐灰色粘質土である。遺物はS D1011の2層からほぼ完形に近い須恵器杯が2点出土している。それらの底部についてみると、1点はヘラ切り、もう1点は回転糸切りである。







第23図 SB1010掘立柱建物跡柱穴平面図・断面図(2)

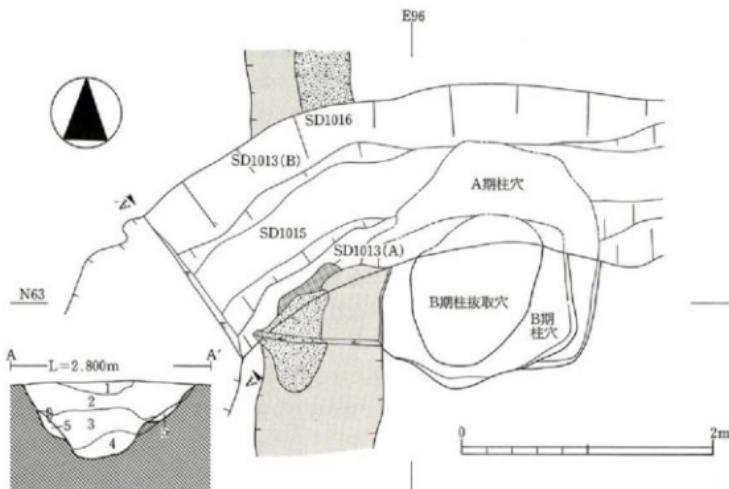


第24図 SD1011・SD1013雨落ち溝平面図・断面図

表1 SB1000・1010および雨落ち溝出土遺物集計表

K = 確認面

		SB1000						SB1010						合計	
		A期 抜穴	B期 抜穴	SD1004 K面	SD1002 I層	A期 柱穴	B期 抜穴	B期 柱穴	B期 抜穴	SD1011 K面	SD1013 I層	B期 2層 埋土			
土器	杯	口クロ	1			4	2		7	6	1	6	3	1	31
		非口クロ		1											1
		回転ヘラケズリ		1						1	1	1			1
		手持ちヘラケズリ		1		1			5		3				10
		ヘラ切り							2						2
		糸切り			1			3	5	15	5	13	4	1	47
		糸切り→回転ヘラケズリ					1								1
		糸切り→手持ちヘラケズリ									1				1
		ヘラ切り→回転ヘラケズリ													1
	壺	ロクロ					1		11	8	7	2	1	30	
須恵器	壺	糸切り							1	1	3				5
		ハケメ	3				3			1	2				9
	杯	回転ヘラケズリ				1				1					2
		手持ちヘラケズリ	1			1			1	1					4
		動止糸切り→手持ちヘラケズリ	2												2
漆焼き土器	杯	糸切り→手持ちヘラケズリ			1					1	1				3
		ヘラ切り→手持ちヘラケズリ	1												1
		ヘラ切り	2	2	1	2	5	5	1	12	17	8	2	10	3
		糸切り	1				1		10	16	7	5	20	1	2
	台杯鉢					2					1	1			5
灰陶陶器	耳皿											1			1
	瓶											1			1
	瓶										3				3
漆陶陶器	瓶											1			1
						6	8	3	5	10	15	1	4	47	304



第25図 SD1013雨落ち溝、SD1015・1016溝跡平面図・断面図

(4) S X990土壌状遺構とSD942・940・939・935溝跡

【S X990土壌状遺構】No14(W)トレンチ東半部において発見した土壌状の高まりである。溝を伴い、4時期の変遷がある(A→B→C→D期)。以下各時期ごとに説明する。

A期:南端部の断ち割り調査によって検出した。西側にSD979遺跡を伴っている。積土は、地山である黄褐色砂質土および黒褐色粘土層上に黄褐色土を粗く積んだものである。規模は、上幅1.4m、基底幅1.8m、高さ0.4mである。SD979溝跡は、上幅1.8m、下幅1.2m、深さ0.4mである。埋土は、黒褐色粘土を主体としている。

B期: A期積土とやや畳んだ状態で残っていたSD979溝跡を埋め、西側に拡幅したものである。西側にSD943溝跡が伴っている。C期積土によって全体が覆われておらず、中央部のE断面におけるSD943溝跡の広がりから、トレンチ北半部までは延びていないと見られる。東側は並行するSD980溝跡に大きく壊されている。この時期の積土は、A期積土の上では黒褐色土を積んでいるのみであるが、SD979溝跡の上では黄褐色土と黒褐色土が互層になっている。規模は、B断面でみると上幅1.0m、基底幅3.0m、高さ0.6mである。SD943溝跡は、No14(W)トレンチ東端部において約17m検出した。西壁際において打込み杭の存在を確認した。SE948井戸跡、SA977木材堆積跡、SD984・942溝跡と重複しており、SD942より古いが他のものより新しい。方向は、B断面とC断面でみると、発掘基準線に対して北で約6度東に偏している。規模は、B断面でみると上幅1.6m、下幅0.5m、深さ0.4mである。底面は、南側から北側へわずかに傾斜している。埋土は、地山ブロックを含む黒褐色粘土である。

C期: B期積土の一部とSD943溝跡を埋め、西側に拡幅したものである。東側にSD980を伴っている。

積土は灰黄褐色土・黄褐色土・炭化物を含む暗褐色土を粗く積んだものであり、その西半部は炭化物を多く含む黒色土層によって覆われている。南北約9m検出し、B断面で見ると上幅2.6m、基底幅3.6m、高さ0.6mである。SD980溝跡は、B断面とE断面で確認した。方向は、発掘基準線に対し北で約6度西に偏している。規模は、上幅2.0m、下幅1.4m、深さ0.7mである。埋土は、黒褐色粘土が主体であり、最上層には黒色粘土層がある。底面は、南側から北側に向かって傾斜しており、比高差は約10cmである。

D期：SD980溝跡を埋め、東側に拡幅したものである。B断面からE断面にかけて約4.7m検出した。積土はSD980溝跡の自然堆積土に、黒褐色粘土・黄褐色粘土・黒褐色土を積んだものである。規模は、B断面でみると上幅4.0m、基底幅5.0m、高さ0.5mである。

【SD942・940・939・935溝跡】土壌状遺構の東側で発見した南北溝である。いずれもそれより新しい。古い順にSD942→SD940→939→935である。ほぼ同位置で重複しており、新しくなるに従い東側に移動している。以下、古い順に説明する。

S D942溝跡：方向は、発掘基準線に対し北で約2度西に偏している。規模は、上幅2.9m以上、下幅1.4m、深さ0.6mである。埋土は黒褐色粘土を主体とし、炭化物や焼土を含んでいる。底面は、南側から北側に傾斜しており、比高差は10cmである。

S D940溝跡：方向は、発掘基準線に対し北で約1度西に偏している。規模は、上幅1.8m以上、下幅0.8m、深さ0.6mである。埋土は黒褐色粘土を主体としている。底面は北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は12cmである。

S D939溝跡：方向は、発掘基準線に対し北で約14度西に偏している。規模は、上幅2.9m以上、下幅2.7m以上、深さ0.3mである。埋土は黒褐色土であり、上層は炭化物・焼土や黄褐色土を含む黒褐色粘土層が互層となる整地層である。底面は、北側から南側に向かって傾斜しており、比高差は23cmである。

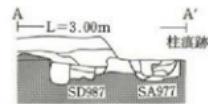
S D935溝跡：方向は、発掘基準線に対し北で約3度西に偏している。規模は、上幅1.95m以上、下幅1.1m、深さ0.45mである。埋土は、炭化物や焼土を含む黒褐色粘土であり、最上層の窪みに灰白色火山灰が堆積している。底面はほぼ平坦である。

(5) SA977柱列跡

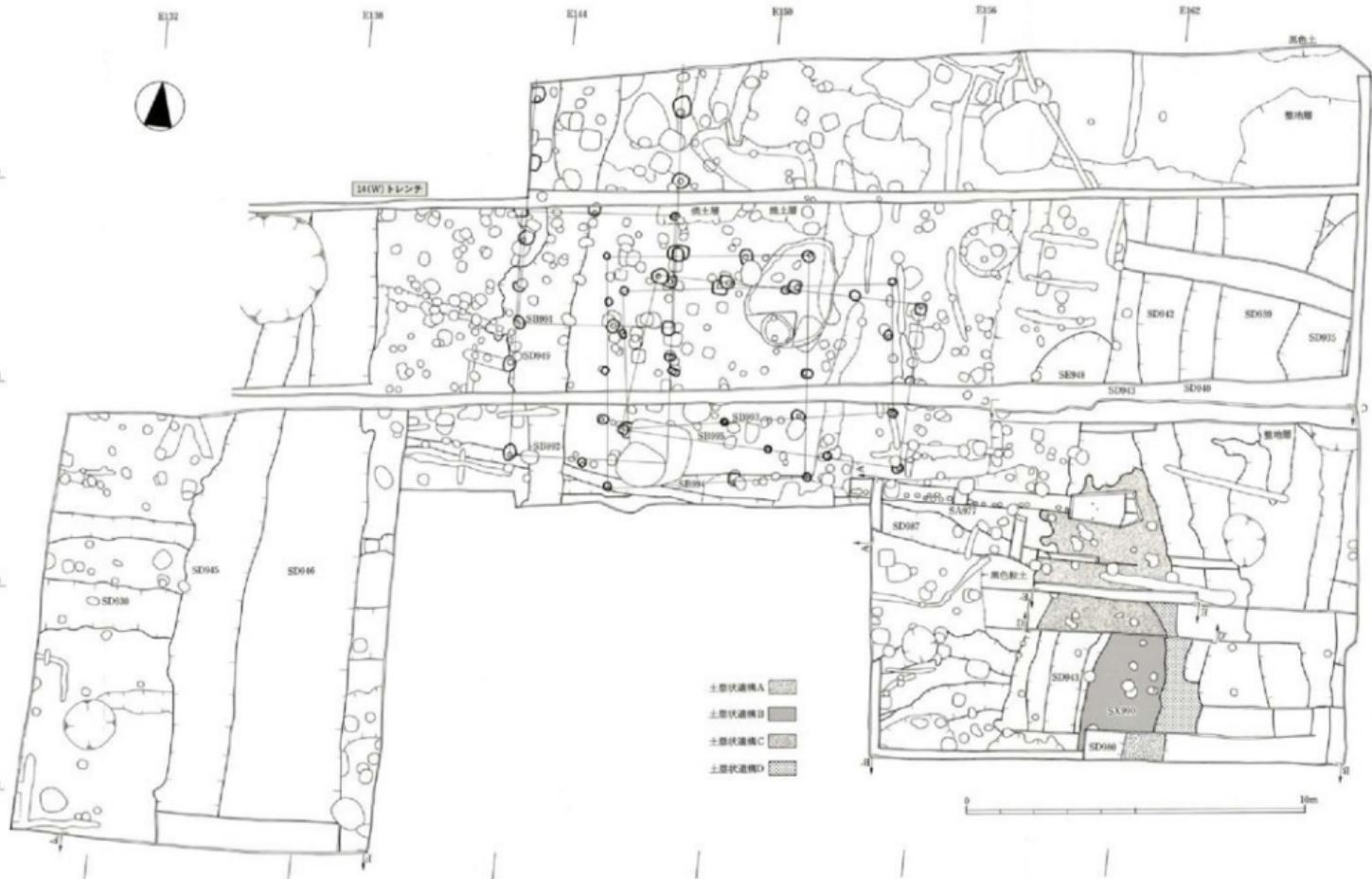
Na14(W)トレンチ中央部の地山および黒色粘土層上面で発見した東西方向の材木場跡である。布掘り状の掘方の中に丸太材を立て並べたもので、約17m検出した。残存状況が良い東半部では柱の切取溝を確認し、それを掘り下げた後、掘方埋土上面において柱痕跡を確認した。SD943・948・949・987と重複しており、そのいずれよりも古い。柱痕跡は、径10~15cmの円形で、間隔は5~10cmである。方向は、発掘基準線に対して東で約2度南に偏している。掘方は、上幅0.4m、下幅0.3m、深さは最も残存状況が良好な部分で24cmである。埋土は、黒褐色粘土と黄褐色土の互層である。切取溝は、上幅0.5m、深さ5~15cmである。埋土は黒褐色土である。遺物は、非クロロ調整の土師器杯が出土している。

(6) SE948井戸跡

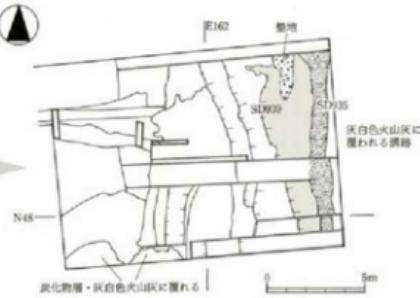
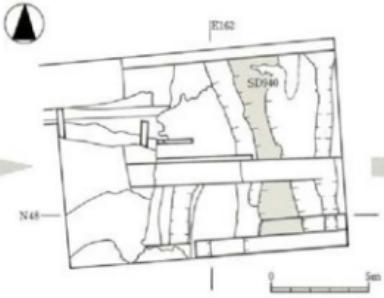
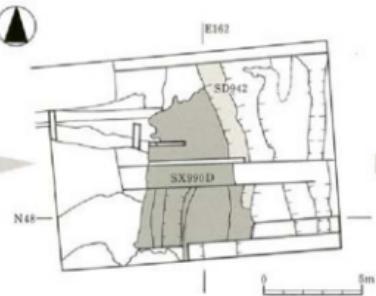
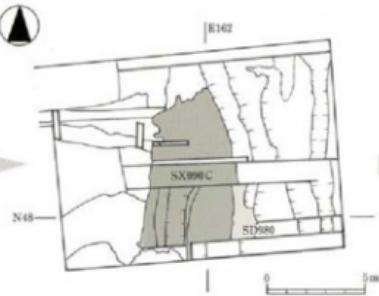
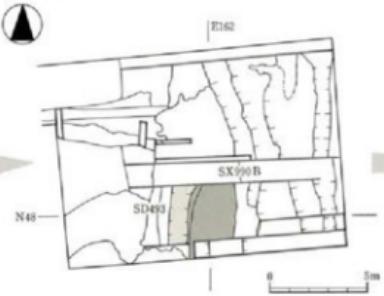
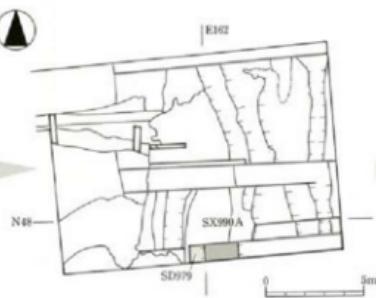
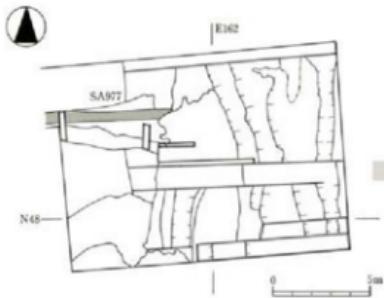
Na14(W)トレンチ東半部において発見した素掘りの井戸跡である。検出面は地山である黄褐色砂質土および黒色粘土層上面である。SD943溝跡と重複しており、それより古い。形態は、上半部が上に開き、下半部はほぼ垂直に立ち上っている。規模は、上半部が直径2.4m、下半部が



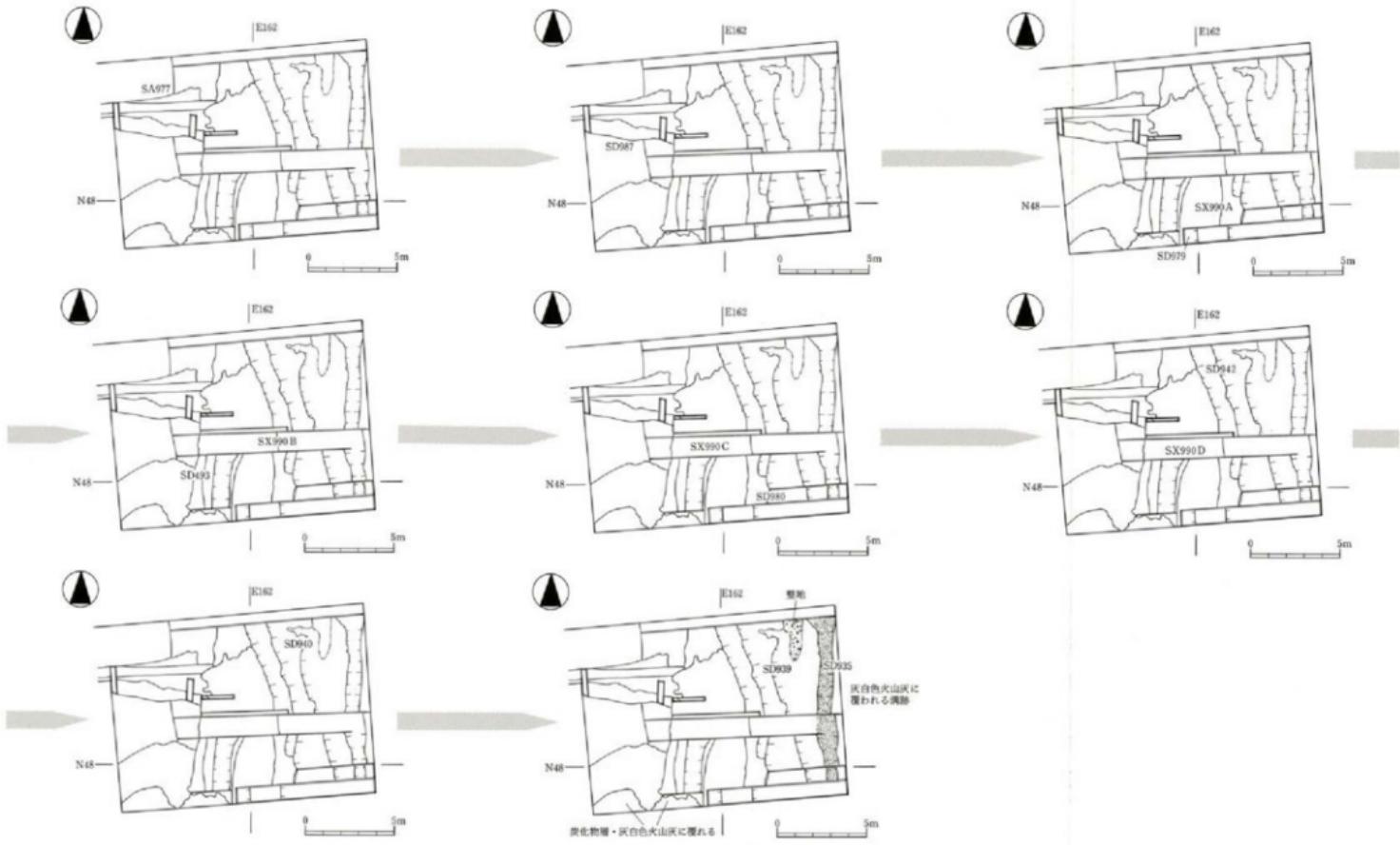
第26図 SA977林木場跡断面図



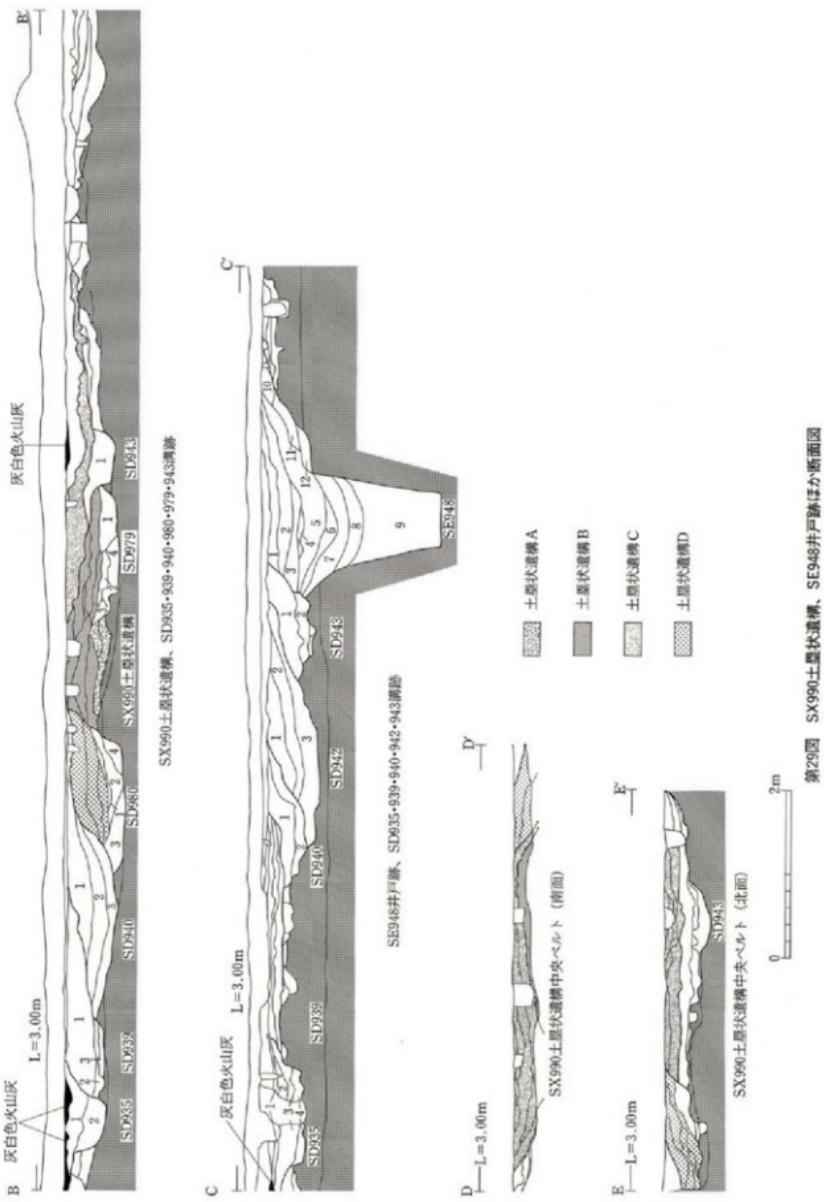
第27図 SX990土壌状透構、SA977木根鉢、SE938井戸壁ほか平面図



第28図 SX990土壤状構造変遷図



第28図 SX990土壌状造構造図



第29図 SX990土壌状態構造、SE948井戸跡ほか断面図

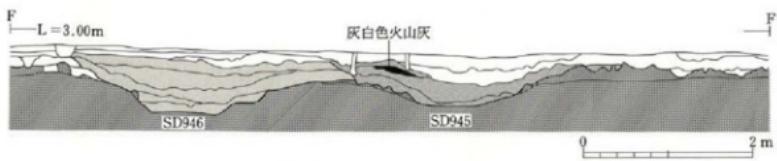
直径0.7mであり、深さは2.1mである。埋土は、黄褐色土を主体とする1層(1~4)、植物遺体の堆積層である2層(5~6)、黒色粘土の自然堆積層である3層(7~9)に大きく分けられる。1層は整地層と見られる。遺物は、2・3層からロクロ調整された土師器と須恵器の杯が出土している。土師器は、静止糸切りの後底部を回転ヘラケズリ調整したものと体部から底部にかけて手持ちヘラケズリを施したもの、須恵器は底部がヘラ切りのものなどが見られる。

(7) S D945・946溝跡

No14(W)トレンチ西部で発見した南北方向の溝跡である。ほぼ同位置で重複しており、S D946→S D945の変遷を確認した。これらの溝跡については、南側の第5・9次調査区、北側のNo49・59トレンチ、第14次調査区でその延長部分を発見しており、160m以上にわたって検出したことになる。方向はNo14-49トレンチ間で計ると、北で約2度東に偏している。S D945は幅約2m、深さ約0.5mであり埋土上層に灰白色火山灰が自然堆積している。S D946は幅3.3m以上、深さ約0.7mであり、底面付近より「天長六年」銘の木簡が出土している。なお、S D946は、埋土や出土した遺物の年代等から、No59トレンチで発見したS D1055東西溝と連結する可能性がある。



SD946出土木簡釋文



第30図 SD945・946溝跡断面図

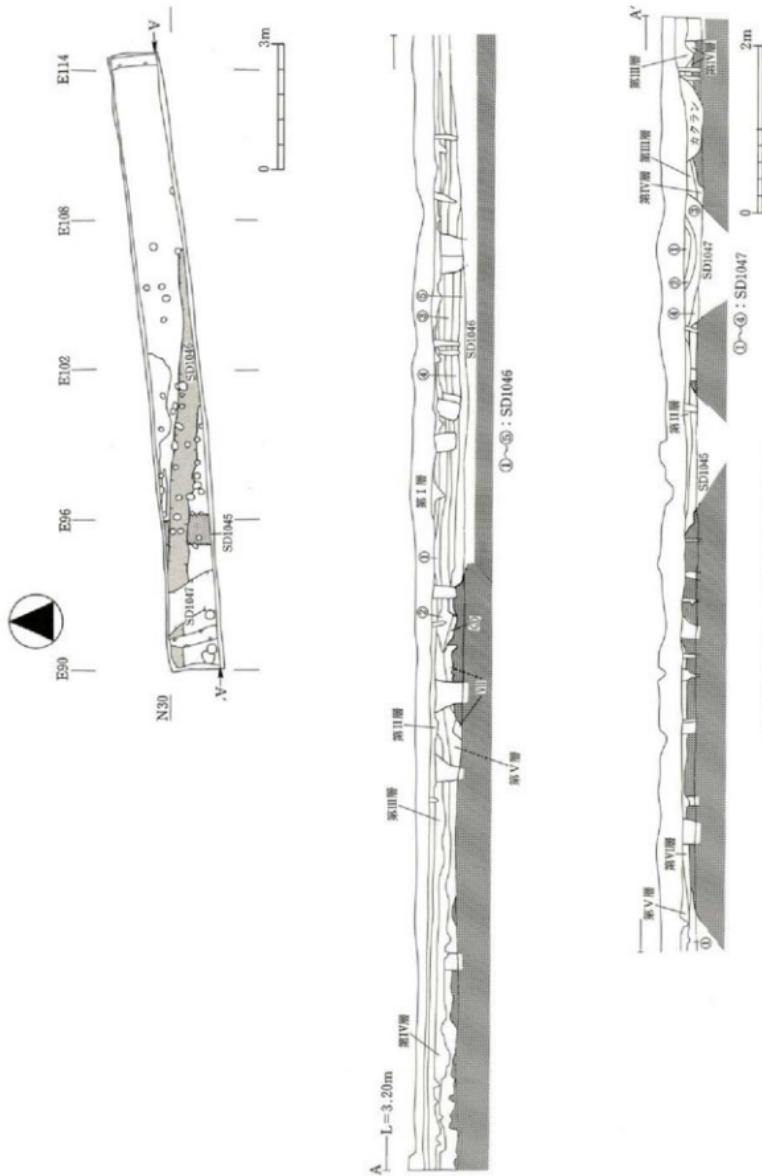
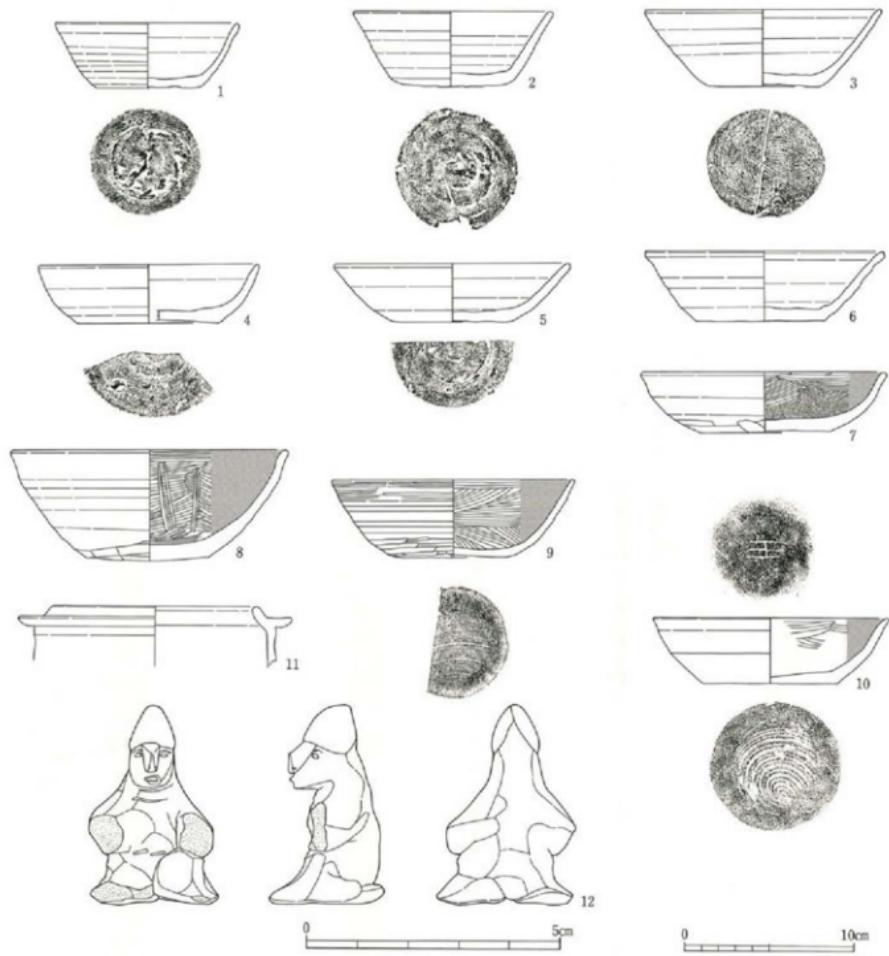


図31 図 N53トレシ子遺跡平面図・断面図



第32図 A+B区出土遺物

遺物・地区	層位	種別	器種	圖	測量				(単位cm)
					口径	底径	高さ	備考	
1 S D948	3層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転へラ切り	10.9	6.2	3.9		
2 S E948	2層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転へラ切り	(11.9)	(6.3)	4.6		
3 S D1011	2層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転余切り	14.0	6.5	4.6	外底に「×」	
4 S E948	2層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転へラ切り	(13.1)	(8.3)	3.5		
5 S E948	4層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転へラ切り	(14.1)	(6.2)	3.5		
6 S D1011	2層	須惠器	杯	【内面】クロロナデ、【底面】回転へラ切り	14.2	7.6	3.6		
7 S E948	2層	土師器	杯	【外面】クロロナデ全体下半手持ちへラケズリ 【内面】エガキ・黑色施塗、【底面】手持ちへラケズリ	14.2	7.5	4.2	内面白色付着物	
8 S B1020	A期性垢 吹穴	土師器	杯	【外面】クロロナデ全体下半手持ちへラケズリ 【内面】エガキ・黑色施塗、【底面】手持ちへラケズリ	(16.5)	7.2	6.6		
9 S E948	3層	土師器	杯	【外面】口縁部エガキ、全体施塗へラケズリ、全体下半手持ちへラケズリ 【内面】エガキ・黑色施塗、【底面】静止切り→手持ちへラケズリ	14.4	6.3	4.6		
10 S D1055	2層	土師器	杯	【外面】クロロナデ下半手持ちへラケズリ、 【内面】エガキ・黑色施塗、【底面】回転余切り→手持ちへラケズリ	(13.9)	8.0	3.9	内面底部に「王」刻書	
11 Nodトレンチ 須恵器	土師器	羽崩		【外面】クロロナデ	(12.2)	鋼径(16.2)			外側にスカベ着
12 S D1026	B期穴穴	土製人形			7.9	5.1			

5. C 区

(1) C区の概要

本地区は、北は市道新田・上野線、西は市道水入線に面しており、北東部には高崎古墳群が隣接している。現況はほとんどが水田となっているが、北東部が高崎古墳群の位置する丘陵の北西端部であり、周辺よりも若干高くなっている。

トレンチの配置：調査区西部に市道水入線と平行する南北方向のNo20トレンチを配置し、その北東と南東に東西方向のNo18・23トレンチを設定した。またNo18トレンチの中央部には、これと接続する南北方向の41トレンチを設けた。一方、北東部にはT字型のNo19トレンチ、その南西に南北方向のNo22トレンチを配し、さらに調査区のほぼ中央部には南北方向のNo21・24トレンチを設定した。

層序：No20トレンチでは、表土除去後に南部で締まりのある黄色砂質土、中央部で焼土・炭化物が混入する褐灰色土が現れ、その上面で古代の遺構を多数発見した。No18トレンチでは西部がやや粘性のある黄色土であり、遺構検出面となっている。中央部から東部にかけては砂層と黄褐色粘質土の入り混じった軟弱な地盤であり、東側に向かって緩やかに傾斜している。No23トレンチ西部では黄褐色砂質土が遺構検出面であり、東側に向かって緩やかに傾斜している。No22トレンチでは北端部に黄色砂質土があり、その上面が遺構検出面となっている。また、南部には黒褐色の粘土層が堆積しており、南側ほど厚くなっている。南端部の断面観察では、地表面下約80cmの深さで灰白色火山灰小ブロックを確認した。No21トレンチについても、軟弱な黒褐色粘質土が全面に厚く堆積しており、北半部では地表面下約80cmの深さで灰白色火山灰粒を含む層を確認した。No24トレンチでは暗褐色粘質土、黒褐色粘質土が厚く堆積している。No19トレンチでは、北部から中央部が岩盤であり、南側に向かって傾斜している。その上面には粘性のあるシルト層が堆積し、南側ほど厚くなっている。

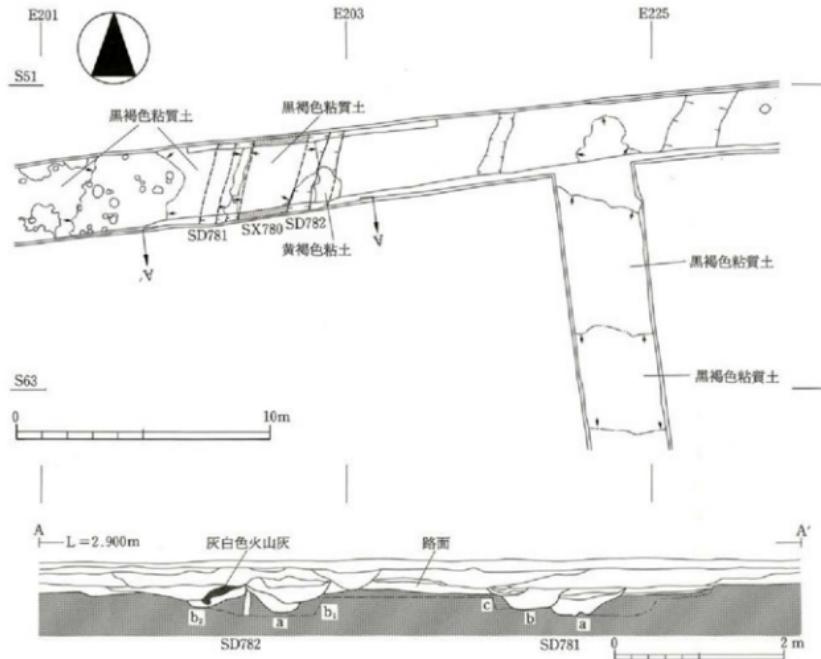
遺構の分布：北東部のトレンチより遺構の分布について見ていく。No19トレンチでは、中央部の岩盤上で埋土に焼土・炭化物が多量に混入する土壤1基、北端部で幅約40cmの小規模な溝跡1条を発見した。No22トレンチでは北端部の黄色砂質土上面で掘立柱建物1棟、土壤3基、溝跡7条のほか、多数の柱穴を発見した。柱穴は一辺30cm前後の方形のものが主体であるが、一辺70cmを越すものもある。No21トレンチでは灰白色火山灰降下以前の擬似畦畔を2条発見し、No24トレンチ北端部でも灰白色火山灰降下以前の溝跡を1条発見した。No18トレンチでは西部に遺構が集中しており、南北道路跡1条、溝跡3条のほか、径30cm～50cmの柱穴約20基を発見した。No20トレンチでは南部から中央部で土壤、溝跡のほか、多数の柱穴を発見した。柱穴は一辺30～60cmの方形のものが主体であり、焼土や炭化物が混入しているものがある。土壤は6基検出しており、南部に集中している。溝跡は中央部で東西方向のものと南北方向のものを18条検出した。規模は幅30～40cmのものが多く、重複しているものでは東西方向のものが新しい。また、東西方向のものには埋土に灰白色火山灰が混入するものがある。No23トレンチでは西半部で溝跡6条、土壤1基、東端部で土壤1基を発見し、No41トレンチでは溝跡2条、擬似畦畔2条を発見した。

(2) 主な遺構の概要

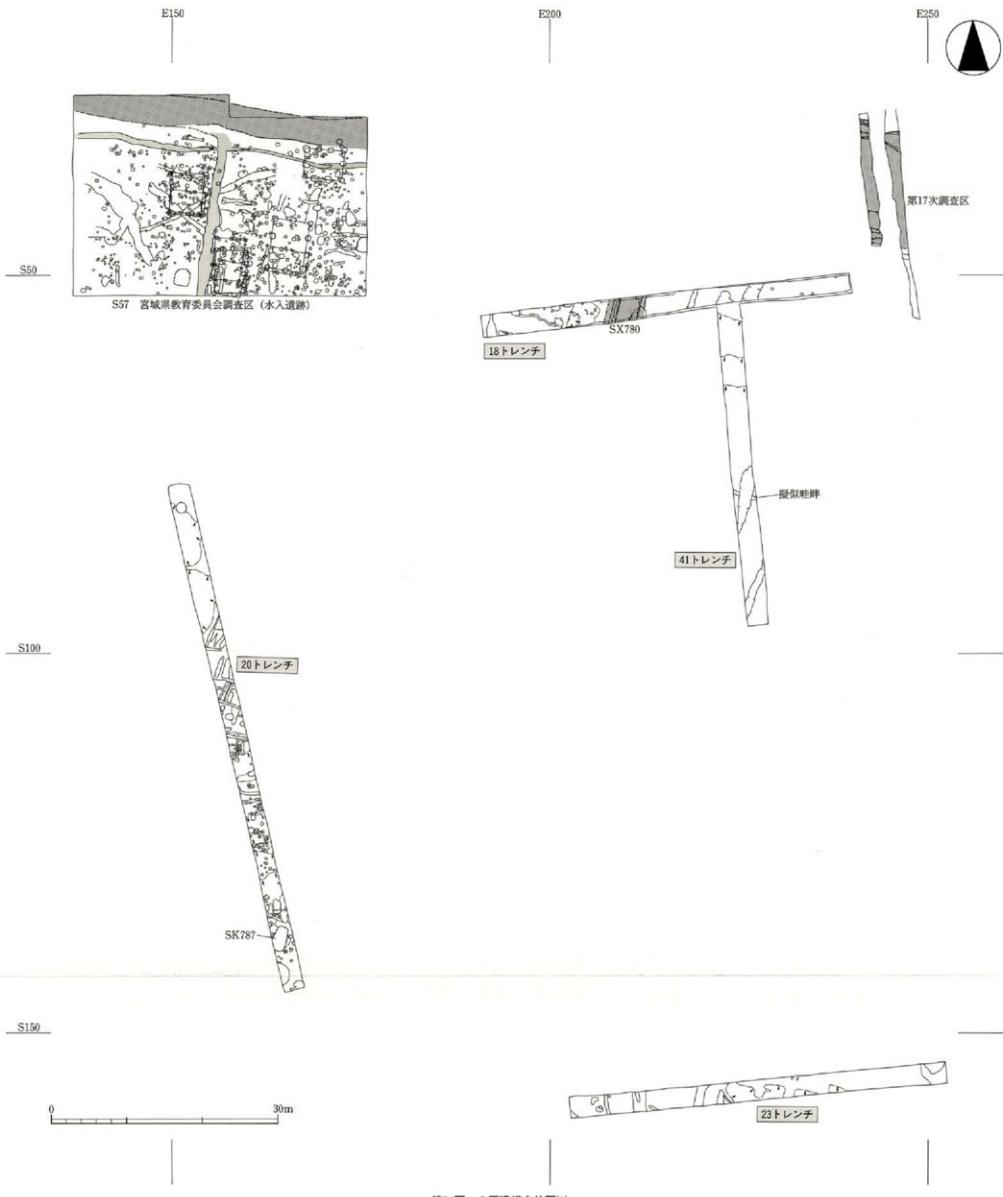
【S X 780南北道路跡】No18トレンチ西部の中央よりで発見した南北道路跡である。西側溝SD781と東側溝S D782を伴っている。SD781は3時期(a→b→c期)の変遷があり、新しくなるにしたがって東側に移動している。そのうちもっとも新しいc期の埋土上層には、灰白色火山灰の小ブロックが多量に混入している。SD782についても3時期の変遷があり、最も古いものをa期、それよりも新しいものをb₁・b₂期とし

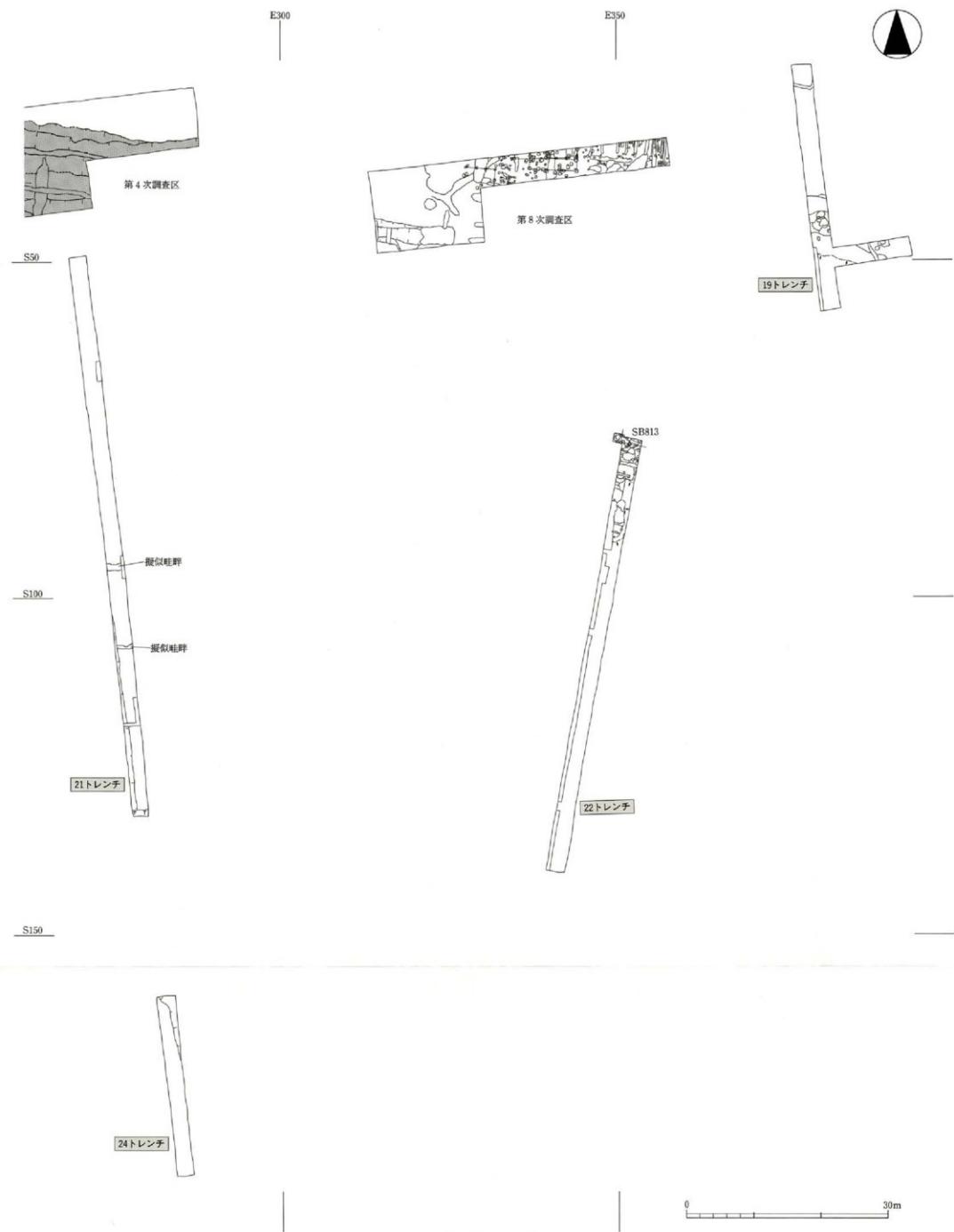
た。 b_1 ・ b_2 期の新旧関係については明らかではないが、 b_2 期の埋土上層には灰白色火山灰が自然堆積しており、SD781との対応関係から b_1 → b_2 期である可能性が高い。以上のことから、本道路跡は側溝の組み合わせより、A期—SD781a・782a、B期—SD781b・782b₁、C期—SD781c・782b₂の3時期の変遷があると考えられる。側溝間に遺物の細片を多く含む暗オリーブ褐色砂があり、B・C期にはその上面が路面となっている。規模は側溝心々間でみると、A期が約3.5m、B期が約2.8m、C期が約3.5mである。方向は路面中央軸で測ると北で約20度東に偏している。側溝埋土はいずれも粘質土が主体である。

遺物はSD781bより、体部に「神」の墨書がある須恵器杯が出土している。



第33図 SX780南北道路跡平面図・断面図



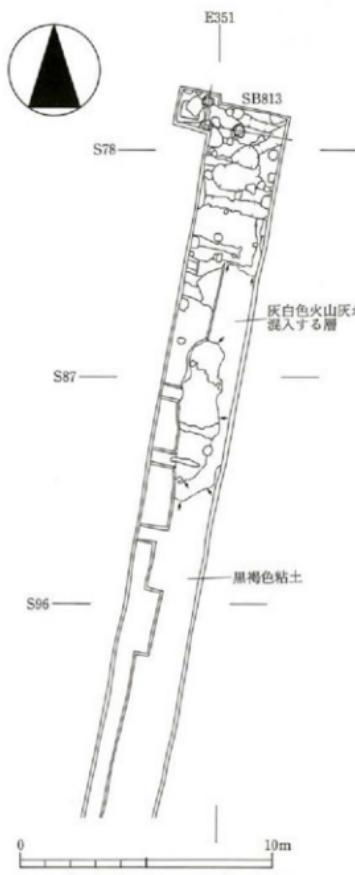


第35図 C区遺構全体図(2)

【SK787】No.20トレンチ南部で検出した土壌である。平面形は南北に長い方形であり、規模は長軸約3.2m、短軸約1.8mである。埋土には焼土、炭化物が多量に混入しており、検出時に製塩土器の破片が約180点出土している。



第36図 No.20トレンチ遺構平面図



第37図 No.22トレンチ遺構平面図

6. D区北部地区

(1) D区北部地区的概要

トレーニングの設定：本地区は、北は市道新田・上野線、西は砂押川に面している。市道の約40m南側に、東西方向のNo25・26・27トレーニングを直線的に配し、その約70m南側に南北方向のNo28トレーニングを設定した。
層序：No26トレーニングでは、西壁から約5mの範囲に遺物を含む暗褐色土が堆積しており、その上層には薄い暗褐色粘質土が見られる。それらの下層は地山である黄褐色砂質土である。暗褐色土および粘質土は古代の造構を覆っており、その上面では河川改修前の砂押川を検出したのみである。No28トレーニングでは表土の下に褐灰色土があり、その下が地山である黄褐色砂質土となっている。褐灰色土は10世紀前葉以降の堆積層であり、すべての造構を覆っている。

造構分布：No25トレーニングでは、竪穴住居跡2軒、南北方向の溝跡3条、土壙3基などを発見した。このほか、西壁際では地山の土に類似するが遺物が混入する層があり、整地層あるいは何らかの造構埋土の可能性がある。また、東壁際でも東西約7.5mの範囲で炭化物層などいくつかの堆積層が認められ、底部に木葉痕がある土器部器が出土しており、竪穴住居跡の可能性がある（図版15-6）。このように本トレーニングには多数の造構が存在し、しかもその密度は高い。No26トレーニングでは、暗褐色粘質土を除去し、その下の黄褐色砂質土上面で溝跡や小ビットなどを検出した。その地点よりNo27トレーニングの西半部にかけてはすべて旧河川埋土であり、複数の流路が見られる。特に、No26トレーニングの西壁付近には地山ブロックを多量に含む砂層で埋められた幅約11mの河川があり、河川改修前の砂押川と見られる。これらの堆積状況を見るためトレーニング南壁を約0.8mの深さまで掘り下げたところ、ほぼ中央部において、南北大路あるいはそれに続くと見られるS X 888道路状造構を発見した。東西両側は古代以降の河川によって大きく破壊されている。No27トレーニングでは、表土を除去すると直ちに黄褐色砂質土が現れ、その上面で掘立柱建物跡2棟、竪穴住居跡1軒、区画溝、土壙などを発見した。建物として組み合わない小柱穴も多数発見していることから、さらに多数の掘立柱建物跡の存在が推定される。No28トレーニングでは東西道路跡1条、掘立柱建物跡2棟をはじめ、多数の小柱穴、溝跡、土壙などを発見した。調査区のほぼ中央部には幅約26mの河川とみられる溝状の落ち込みがあり、東西道路跡はその埋土上面で検出した。その南側では掘立柱建物跡等を多数発見した。一方、道路跡の北側では小溝群などが見られるのみであり、造構の分布に大きな違いがある。

(2) 主な造構の概要

【S I 860竪穴住居跡】No25トレーニングの中央部で発見した竪穴住居跡である。S I 861竪穴住居跡、S K 864土壙と重複し、後者より古く、前者より新しい。カマド北側壁と煙道を確認した。方向は北で約2度東に偏している。

【S I 861竪穴住居跡】No25トレーニングの中央部で発見した竪穴住居跡である。S I 861竪穴住居跡、S K 865土壙と重複し、それより古い。方向は南で約12度東に偏している。

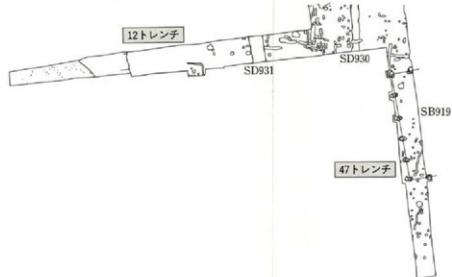
【S X 888道路状造構】No26トレーニングの中央部で発見した道路状造構である。南北大路の延長線上に位置することから、南北大路あるいはそれに続く道路の可能性がある。東西両側を河川によって破壊されており、路面の一部を確認したのみである。路面は、地山である黄褐色砂質土であり、硬く縮まっている。上面の凹みに灰白色火山灰がブロック状に堆積し、オリーブ黒色粘土層によって覆われている。



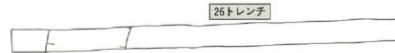
W50



E50

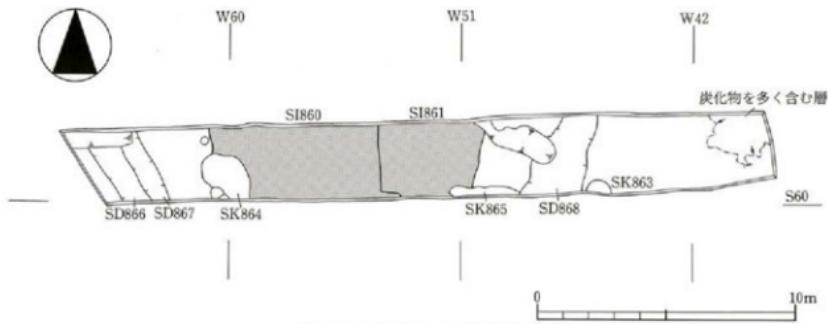


第12次調査区

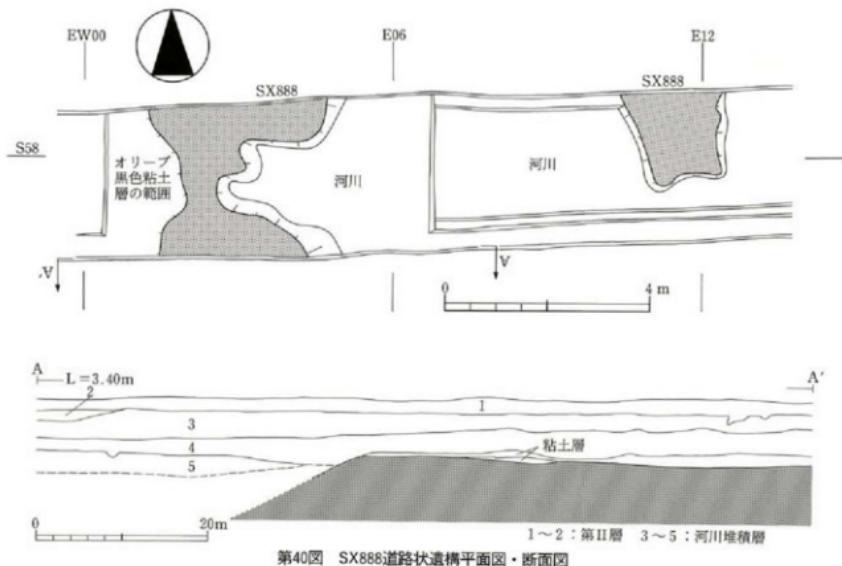


第38図 D区遺構全体図(1)





第39図 No.25 トレンチ遺構平面図



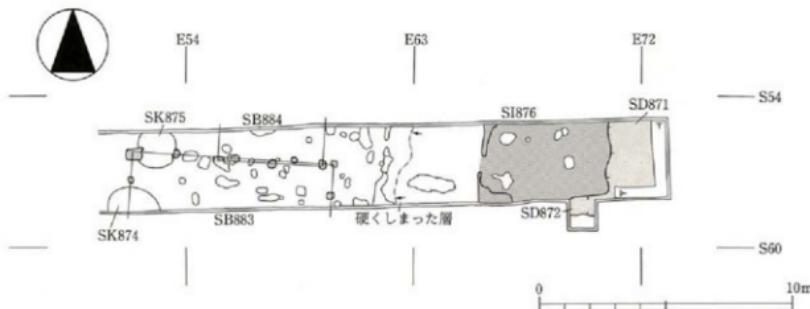
第40図 SX888道路状遺構平面図・断面図

【S B 883掘立柱建物跡】No27トレンチの中央部やや東よりで発見した東西4間、南北2間以上の東西棟掘立柱建物跡である。北側柱列および東妻と西妻の一部を検出した。SK875・874土壤と重複しており、前者より新しい。SK874土壤との関係は不明である。方向は東で約3度南に偏している。桁行については、北側柱列で総長約7.9m、柱間は、西より約1.7m、約2.3m、約2.3m、約1.7mである。梁行柱間は、西妻で約1.1m、東妻で約1.3mである。

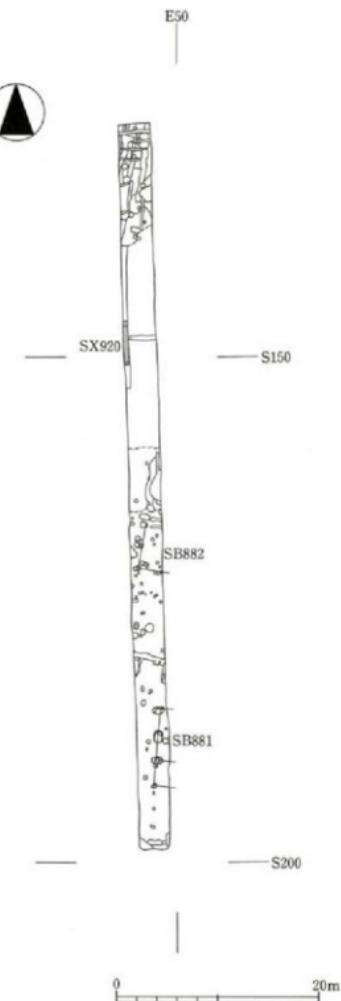
【S B 884掘立柱建物跡】S B 883掘立柱建物跡の北側で発見した掘立柱建物跡である。東西に並ぶ3基の柱穴を検出したのみであるが、それを北側に展開する南北棟の南妻と考えておきたい。方向は西で約2度北に偏している。梁行は、総長約4.2m、柱間は西より約2.2m、約2.1mである。

【S I 885竪穴住居跡】No27トレンチの東側で発見した竪穴住居跡である。地山上面に堆積した硬く縮まつた黄褐色土上面で検出した。既に床面まで削平されており、西辺の周溝と貼床の一部を検出したのみである。SD871・872と重複し、それより古い。方向は南で約4度西に偏している。

【S D 871・872溝跡】No27トレンチの東端部で発見した区画溝である。規模の大きな南北方向のSD871溝に東西方向のSD872溝が連結している。SI876竪穴住居跡と重複しており、それより新しい。規模は、SD871溝跡が幅2.5m以上、SD872溝跡が約0.9mである。方向は、東西・南北の発掘基準線とそれぞれほぼ一致している。



第41図 SB883・884掘立柱建物跡、SI876竪穴住居跡平面図



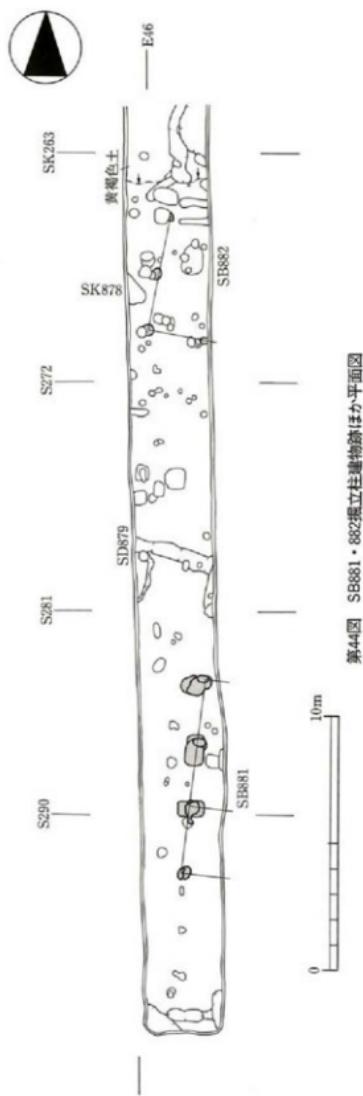
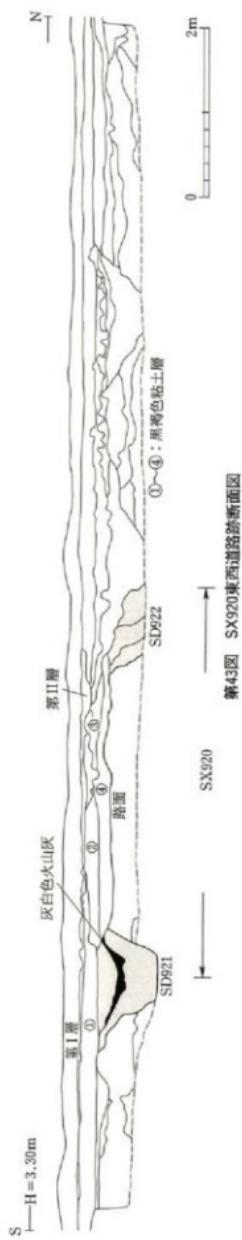
第42図 No.28 トレンチ発見遺構全体図

【S X920東西道路跡】No.28トレンチ中央部のやや北よりで発見した南1道路である。東西方向にのびる河川状の落ち込みの埋土上面に建設されている。全体が黒褐色粘土層(①～④)によって覆われており、断面で確認したにすぎない(註)。南側溝S D931と北側溝S D932があり、北側溝S D932には3時期以上の重複を確認した。規模は、最も新しい時期の側溝心間で約4.4mである。S D931の埋土には灰白色火山灰が自然堆積している。

【S B881掘立柱建物跡】No.28トレンチの南側で発見した掘立柱建物跡である。南北に並ぶ4基の柱穴を検出したのみであるが、それを東側に展開する東西棟の西妻と想定する。ほぼ同位置で2時期の重複(A→B期)がある。A期は梁行2間であり、柱間はB期とほぼ同様である。B期は梁行3間であり、南に庇が付いている。柱間は約2.5m、方向は北で約6度東に偏している。B期柱抜取穴には焼土や炭化物を多量に含んでいることから、焼失した可能性がある。

【S B882掘立柱建物跡】No.28トレンチ中央部のやや南側で発見した棟方向不明の掘立柱建物跡である。南北2間、東西2間以上あり、柱間は南北で約2.4m、東西で2.3mである。方向は南で約10度東に偏している。なお、建物北側は黄褐色土層に覆われるため南北の柱列が北に延びる可能性もある。全ての柱穴に灰白色火山灰を含む。

(註) 黒褐色粘土層④が直接堆積している面が路面か否か、すなわち黒褐色粘土層がS X930廃絶後の自然堆積層か、あるいはそれを破壊して堆積したものが明らかにできなかった。南側溝の灰白色火山灰層のあり方と黒褐色粘土層④底面のレベル関係に注目すれば、④が路面を裏し堆積しているように見受けられる。



7. D区南部地区

(1) D区南部地区的概要

トレーニングの設定：本地区は、東は市道水入線、西は砂押川に面している。今回の調査では北部にNo29トレーニング、西部の砂押川堤防沿いにNo30・35トレーニング、No35トレーニングから東に延びるNo36・37トレーニング、中央部にNo31・33・37・38トレーニング、東部にNo32・39トレーニング、市道新田・高崎線の南側にNo34・40トレーニングを設定した。

層序：No30トレーニングでは北半部において黒色粘土層が堆積している。この層は道路跡上にのみ堆積している。No31トレーニングでは表土下に黒褐色粘土層が全域にわたって分布している。東半部でその下に黄灰色粘土層が堆積し、この層の上面で擬似畦畔を検出した。西半部には亜泥炭層（スクモ層）の堆積が見られる。地盤は東から西に傾斜している。No32トレーニングの南半部においては、表土の下に褐灰色土の堆積が見られ、その下には黄灰色粘土層が堆積している。褐灰色粘土層の上面では、埋土中に10世紀前葉の灰白色火山灰が自然堆積している溝を検出した。No34トレーニングでは、全域にわたって黒褐色粘土層、オリーブ灰色粘土層、暗灰黄色粘質土層、灰黄褐色粘質土層が堆積している。これらの土層は全ての遺構を覆っている。このうち、暗灰黄色粘質土層に灰白色火山灰ブロックが含まれる。No35トレーニングでは、全域に黒褐色粘土層（第II層）と黒色粘土層（第III層）が堆積している。これらの層の下には北端部を除き、黄色土ブロックを含む黒色土層（第IV層）、暗灰黄色砂質土層（第V層）が堆積している。これらの層のうち第IV層上面で灰白色火山灰が帶状に残る擬似畦畔を検出している。第V層上面では擬似畦畔や竪穴住居跡、溝跡、土壤などを発見した。

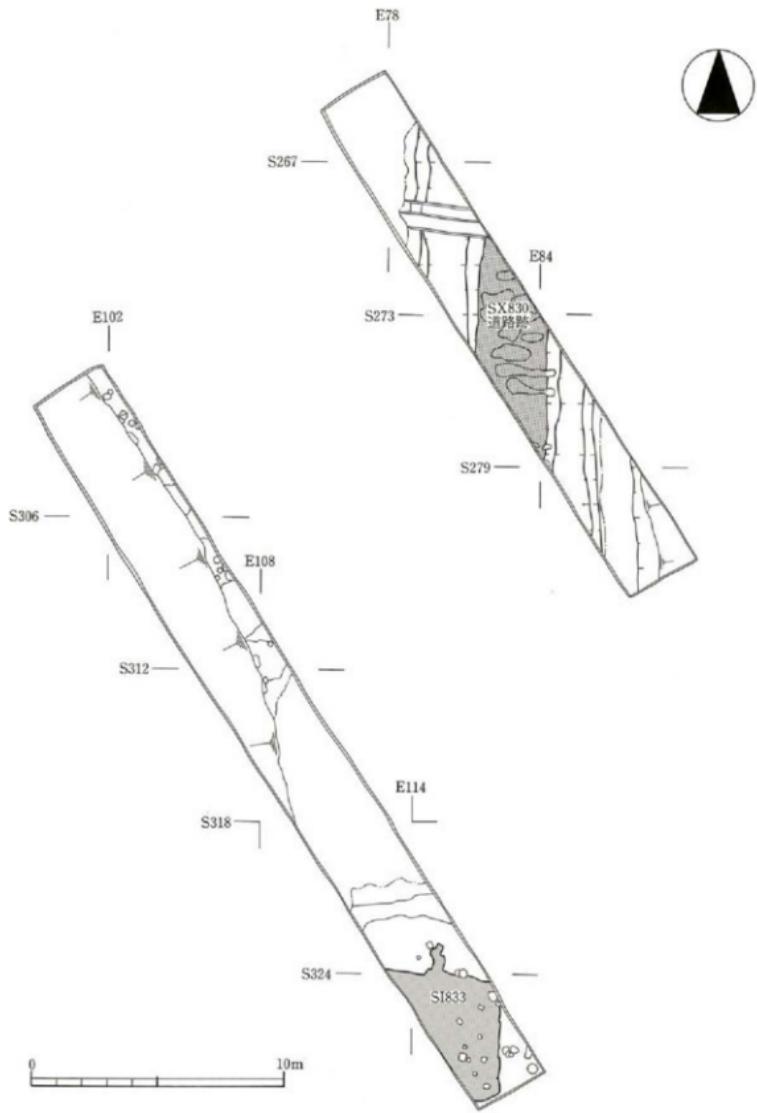
遺構分布：No29トレーニングでは溝跡2条、土壤3基を発見した。このうち東半部で発見した溝跡は幅約26mの大規模なものであり、河川跡の可能性も考えられる。No30トレーニングでは南北道路跡（東1道路）1条、竪穴住居跡1軒をはじめ多数の小柱穴、溝跡、土壤を発見した。No32トレーニングでは、溝跡を7条発見した。そのうち埋土に灰白色火山灰が自然堆積しているものが3条あり、そのうち南半部にある2条は並行している（S D848・850）。No33トレーニングからNo34トレーニングにかけては溝跡、土壤、旧河川を発見した。河川は灰白色火山灰ブロックを含む層に覆われており、No33トレーニングからNo34トレーニングに向かって延びている。No35トレーニングでは竪穴住居跡1軒、溝跡1条、土壤2基を発見した。これらの遺構は北半部の地盤の高い場所に分布している。南半部では地盤が低く、擬似畦畔の存在などから、水田が広がっていたものと考えられる。本地区中央部ではNo38トレーニングで溝跡を1条発見したのみであり、No31トレーニングには亜泥炭層が堆積している。

(2) 主な遺構の概要

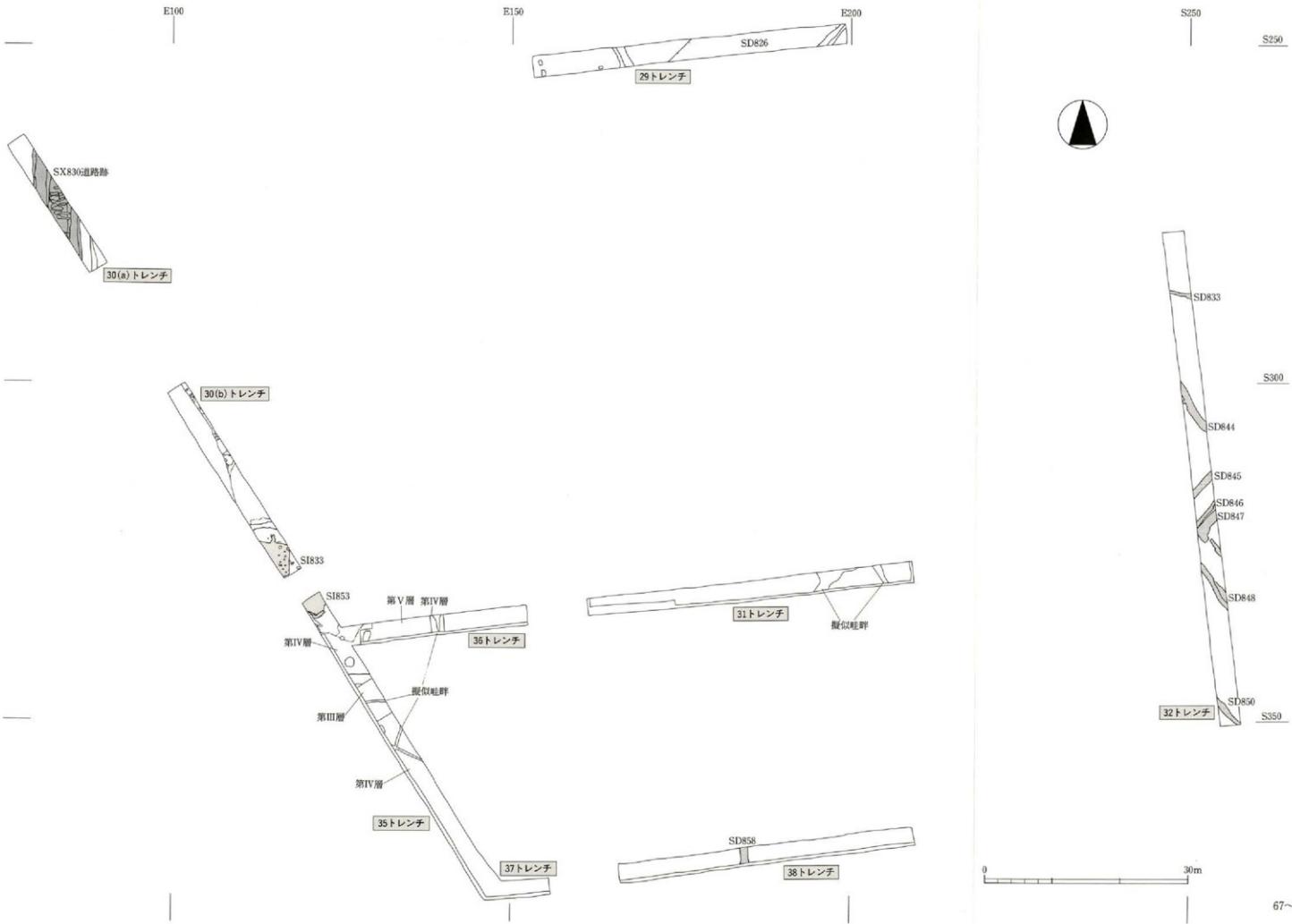
【S X 830南北道路跡】No30トレーニング北半部において検出した。素掘りの側溝を伴い、それぞれ3時期の変遷（a→b→c期）を確認した。方向は、東側溝でみると北で約1度東に偏り、西側溝でみると北で約3度東に偏している。側溝の規模は最も新しいc期で見ると、東側溝が上幅約1.2mで、西側溝が上幅約2.1m、下幅約0.6m、深さ約0.5mである。b期の側溝に灰白色火山灰が自然堆積している。

【S I 833竪穴住居跡】No30トレーニング南端部で発見した。規模は東西4.5m以上、南北約4.7mである。残存状況が悪く、すでに床面が露出している。北辺のほぼ中央から北に延びる煙道を確認した。

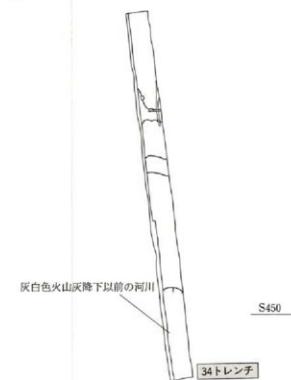
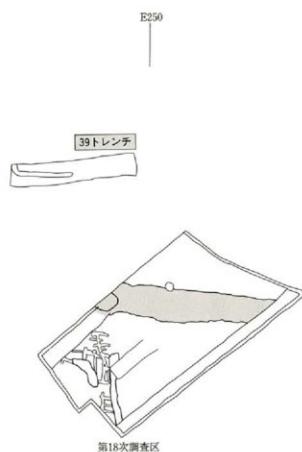
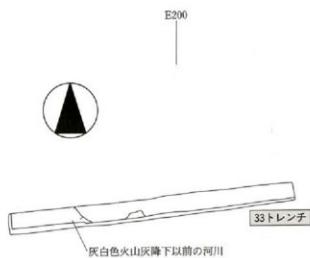
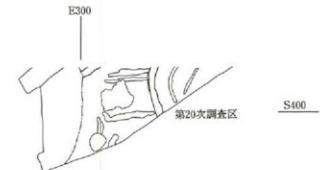
【S I 853竪穴住居跡】No35トレーニングの北端部で発見した。規模は東辺2.0m以上、南辺1.8m以上である。残存状況が悪く、すでに床面が露出している。



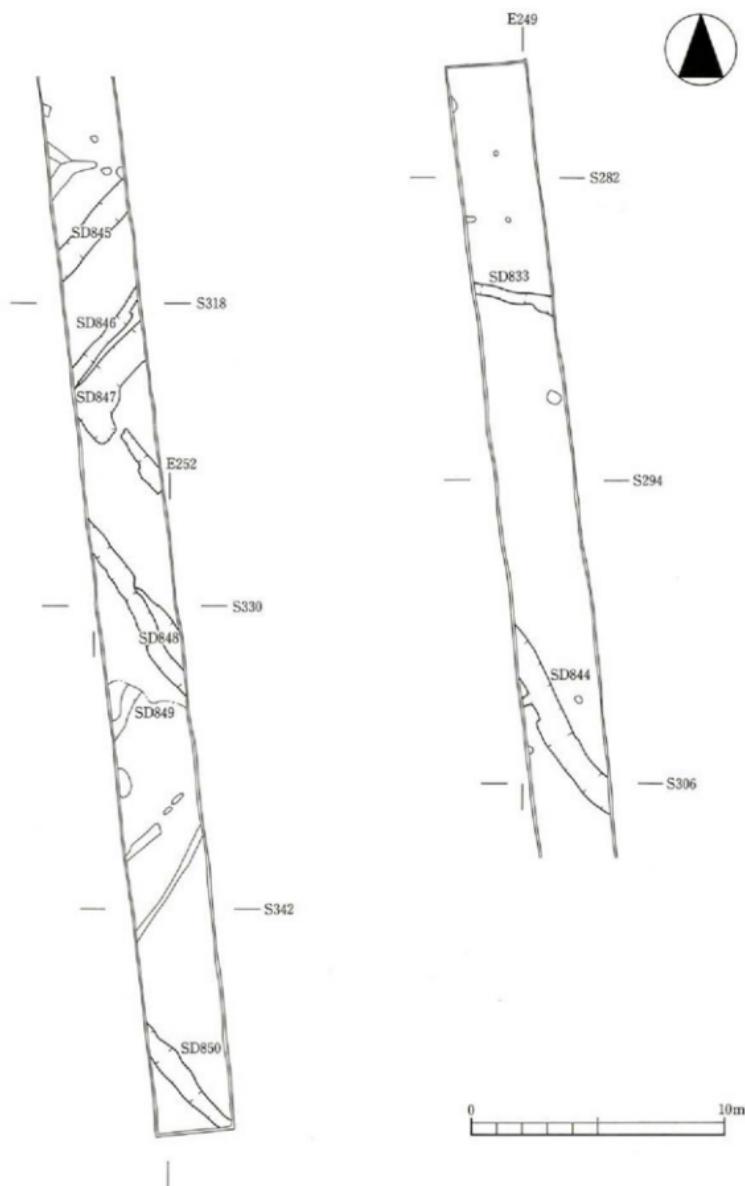
第45図 SX830南北道路跡、SI833竪穴住居跡平面図



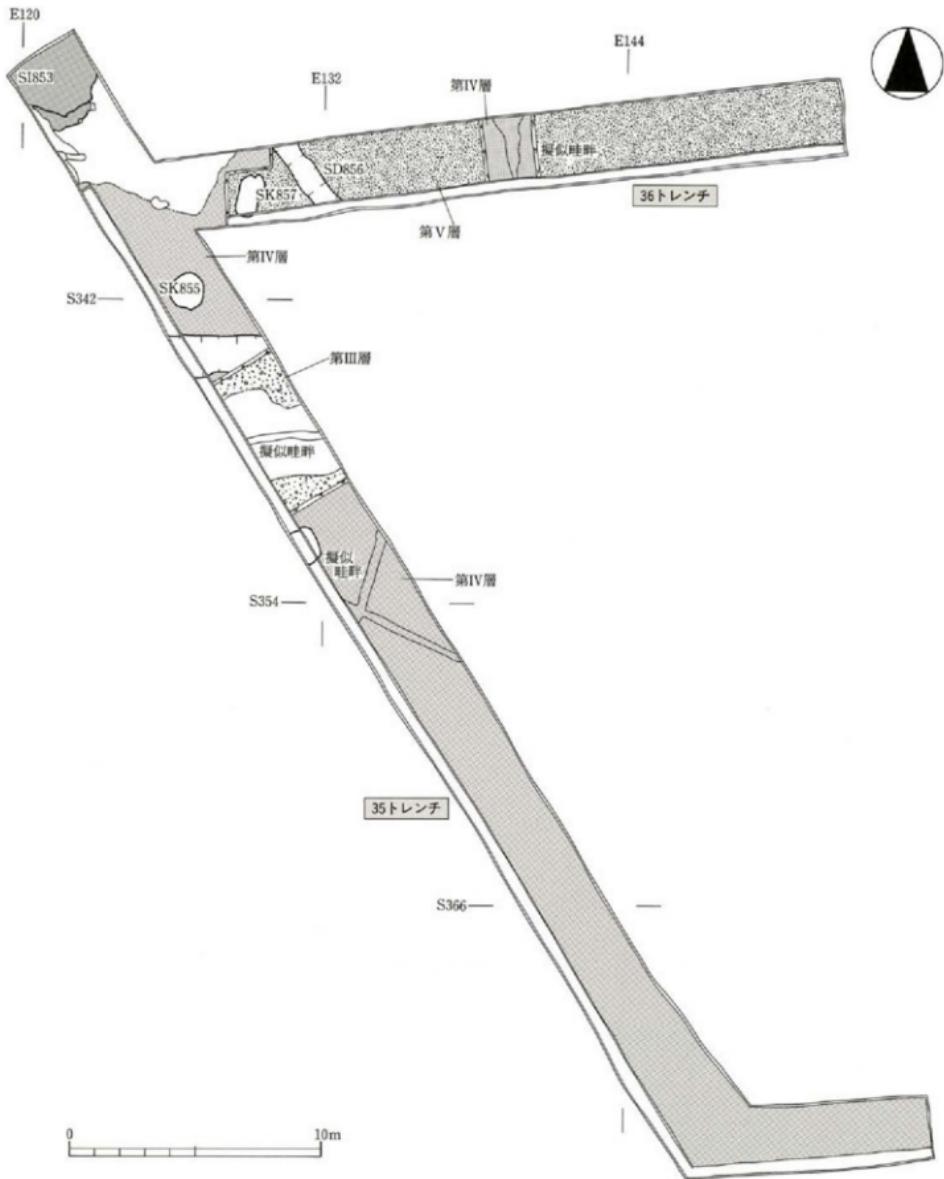
第46図 D区遺構全体(2)



第47図 D区遺構全体図(3)



第48図 SD848・850溝跡ほか平面図



第49図 No.35・36・37トレンチ発見遺構平面図

V 考 察

1. 遺構の分布とその様相

これまで述べてきたように、A区からD区にかけてのほぼ全域で古代の遺構を発見した。以下、それらの分布状況について述べていきたい。

A区No.8トレンチ南半部およびNo.9・11・43・66トレンチは、多賀城南面の方格地割りの北1・西1区、No.8トレンチ北半部は北1・西2区に位置する。No.8トレンチ南半部は柱穴群、No.11トレンチでは掘立柱建物跡や井戸跡、No.66トレンチでは柱穴や土壙、No.9・43トレンチでは小溝群を発見した。これらのことから、北1・西1区の南半部は、掘立柱建物を中心として構成される居住域として利用されていたことが窺える。一方、北半部は居住域として積極的に利用されなかった可能性が高い。No.8トレンチ北半部では、掘立柱建物跡2棟、土器溜め1基を発見した。これらの遺構は、おおよそ北1・西2区の南東隅に位置している。これらの地区と同様に、東西大路に面した北1・西3区、南1・西2区（山王遺跡多賀前地区）では遺水状遺構や庇付建物が存在する围司クラスの館と推定され、北1・西7区は国守館に比定されている。このように、東西大路に面した区画は高級官僚の館が立ち並ぶ場所と考えられている。しかし、No.43トレンチにおける小溝群の存在は、必ずしも区画内全域が居住域として利用されたものではなく、状況に応じた土地利用が行われたことを推測させる。本遺跡第5次調査区や山王遺跡第23次調査区で発見されたきわめて小範囲の水田の存在なども同様であると考えられる。

A区No.12・47・65トレンチからB区全域にかけては南北大路・東西大路交差点の北東地区にあたる。この地区は北東部に広範囲にわたる湿地が認められる。A区No.47トレンチからB区No.49・50・51・64トレンチでは大規模な掘立柱建物群を発見し、その東側では小規模な掘立柱建物跡や小柱穴、堅穴住居跡、土壙状遺構、区画溝、材木痕跡を発見した。小規模な掘立柱建物跡はNo.13(S)トレンチとNo.14(W)トレンチから第9次調査区の東半部にかけて分布しており、およそ東西約40m、南北約70mの範囲に集中している。基本的に大規模な掘立柱建物跡とは重複していない。両建物群を区画する施設として明確な遺構を示し得ないが、S D1062溝跡などはその可能性がある。No.14(W)トレンチの東半部では土壙状遺構とそれに伴う区画溝を発見している。これより東側では建物跡は全く発見できず、同時期の遺構も発見できなかった。さらに、地盤が東側に傾斜していくことなどから、B区で発見した遺構群の東端を区画する施設と考えられる。

A区北東部のNo.5・62トレンチからB区北部のNo.63トレンチ、No.64トレンチ北半部にかけて、小柱穴と見られるピットを多数発見した。No.63・64トレンチの北側に位置する第14次調査区でも同様の小柱穴を多数発見しており、それらによって構成される掘立柱建物跡を12棟確認している。また、No.5・62トレンチでは、胎土に砂を多く含む厚手の赤焼き土器が多数出土している。年代はおおよそ10世紀中葉頃と考えられており、その分布は同トレンチに限定される。このように、小柱穴群と赤焼き土器の分布が一致することから、大臣宮地区の南面及び西面には10世紀中葉頃の遺構群の存在が想定される。それは、現在多賀城周辺遺跡で知られている古代遺跡の中では最も新しい段階のものと推定される。また、調査区内には北西部から南部にかけて、古代から近・現代までの河川が複雑に重複して存在している。大部分は近・現代の河川によって壊されているため、確実に古代の河川と判断できたものは少ない。南北大路はこれらの河川によって確実に分断されているが、大路と古代の河川の平面的な重複状況を把握するには至らず、当然存

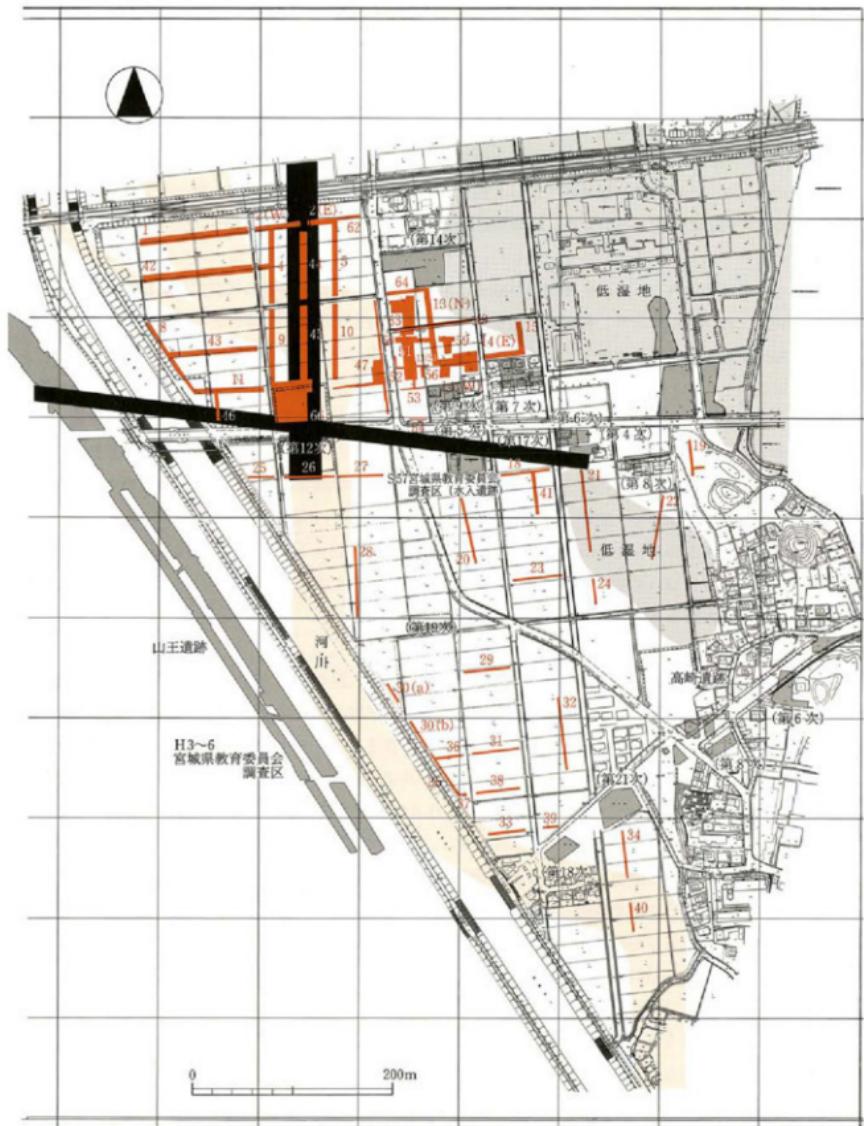
在したと推定される橋についても今回の調査では確認することができなかった。なお、No42トレンチでは、河川の流路の変動に伴い、陸地化した部分で竪穴住居跡を1軒発見した。同様な地盤における遺構の存在にも注意していく必要があろう。

C区では、No22トレンチ北端部で掘立柱建物跡、No18トレンチでは道路跡、調査区西部のNo20トレンチでは、土壌や小溝などを発見した。中央部から南東部にかけては、広い範囲が湿地となっており、No21・41トレンチでわずかに擬似畦畔を検出した。No20トレンチの北側に位置する県文化財保護課調査地区（水入遺跡）では東西大路の南側に面した区画から小規模な掘立柱建物群や井戸跡が発見されており、No21・18トレンチの北側に位置する第4・17次調査区では東西大路の一部を発見した。また、No22トレンチの北側に位置する第8次調査区では、湿地の一部を整地し、その上面に構築された小規模な掘立柱建物群を発見している。このように、遺構は現在の市道新田・上野線、水入線に沿って分布しており、中央部・南東部から東側の丘陵部にかけては広い範囲が湿地となっている。一部で擬似畦畔が存在することから、限られた場所に水田跡があったと想定される。なお、現在の市道新田・上野線に沿った地域は、東西に細長く延びる微高地となっており、東西大路はその上に建設されていたことが窺える。

D区では、北半部のNo25トレンチで竪穴住居跡、溝跡、土壌、No26トレンチでは道路状遺構と河川、No27トレンチでは掘立柱建物跡、竪穴住居跡、区画溝、No28トレンチでは掘立柱建物跡、道路跡を発見した。南半部でも北部に位置するNo30トレンチでは道路跡、竪穴住居跡、No32トレンチでは溝跡、No35トレンチ北端部では竪穴住居跡を発見した。それより南側のNo31・33・34・35（南半部）・36・37・38・39・40トレンチでは河川や湿地が広がっており、No34トレンチで東西方向の溝跡1条とNo38トレンチで南北方向の溝跡1条を発見したのみである。このように、北半部では掘立柱建物跡や竪穴住居跡、道路跡の存在から居住域として利用されていたと想定される。一方、南半部では10世紀前葉以前およびそれ以降の擬似畦畔を検出している。砂押川西岸の県文化財保護課調査地区では、南2道路の南側において10世紀前葉前後の水田跡が確認されており（註1）、東西大路より約200m離れた地域からは水田が広がっていたと考えられる。河川の流路についてみると、北部のNo26・27トレンチではA区から続く河川を発見し、南へ延びている状況を確認した。確認面ではすべて上層の近・現代の河川であるが、その下層には古代の河川の存在が想定される。その南側のNo28・30・31・35トレンチの東側では河川は発見されておらず、No33トレンチ西半部において、北西から南東方向に延びる流路の一部を確認している。それはさらに東側のNo34・40トレンチにかけても検出している。したがって、No26・27トレンチから南流していた河川は、No30・35トレンチの西側で大きく東側に屈曲し、No34・40トレンチを経て丘陵付近に迫り、そこでさらに西側に屈曲して南流していたと推定される。先にみたC区における微高地および後背湿地は、このように蛇行する砂押川の旧流路によって形成されたと考えられる。

2. 遺物の分布状況とその年代

表2・3はトレンチ出土遺物について種類ごとに集計したものである。破片総数162,639点、テンバコにして380箱出土している。すべて表土及び堆積層より出土したものであるが、これらによって遺構の年代及び特徴的な遺物の分布についておおよその見通しを得ることができた。トレンチごとの出土量について見ると、東西大路に近いトレンチほど多いという傾向がみられる。土師器杯35,498点中調整不明のものを除く11,992点の内訳は、非クロロ調整105点(0.8%)、クロロ・再調整804点(6.7%)、糸切り3,511点(29.2%)、そのほかクロロ調整したもの7,572点(63.1%)である。クロロ調整したものが99.2%と圧倒的に多い。



第50図 旧地形および造構分布図

須恵器杯24,219点中底部が残存する7,127点の内訳は、再調整を行っているもの673点（9.4%）、ヘラ切り3,804点（53.3%）、糸切り2,650点（35.0%）である。ヘラ切り・糸切りなど再調整を行わないものは約90%を占める。赤焼き土器は5,281点出土しており全体の出土量の3.2%である。8・10世紀のものはきわめて少なく、ほとんどが9世紀代のものである。したがって、発見した遺構についても9世紀代の遺構が主体と考えられ、しかも広範囲におよんでいた可能性が高い。

次に特徴的な遺物の分布についてみると、赤焼き土器は南北大路や東西大路に近いトレンチから比較的多く出土している。山王遺跡八幡地区や第11次調査区においても道路跡周辺で多く出土しており、今回の調査においても同様の傾向がみられた。施釉陶器は灰釉陶器が306点、緑釉陶器が50点出土している。東西大路に近いNo.9・11トレンチから多く出土した。こういった傾向は東西大路に面する山王遺跡多賀前地区の調査などでも顕著にみられる。灰釉陶器の窯式ごとの内訳は、62点中黒窓14号窯式12点（19.4%）、黒窓90号窯式50点（80.6%）であり、後者が多数を占めている。製塙土器は、全体の形状が明らかなものはないが、赤褐色を呈する無文の土器で、全体に火を受けてもろくなっている（註2）。1,947点出土しており、東西大路に近いトレンチからの出土量が多い。同資料は、東西大路に面した山王遺跡多賀前地区でも多数出土しているが、東西大路から離れた山王遺跡八幡地区ではほとんど出土していない。土製カマドはA・B区から多く出土している（図版18-8・9）。同資料は、東北地方では多賀城周辺遺跡、特に多賀城南面の市川橋・山王遺跡からしばしば出土している。人あるいは集団の国をこえた動きを示す資料として注目される。その他、海獣葡萄鏡、鉄斧、鉄鎌、鎌、富寿神寶（図版17）、鹿角製品（図版19）および未製品、二重口縁で体部に叩きのある土師器甕（図版18-5）・羽釜（図版18-7）など、多種多様な遺物が出土している。海獣葡萄鏡については、VII付章に蛍光X線分析のデータを収録したので参照されたい。

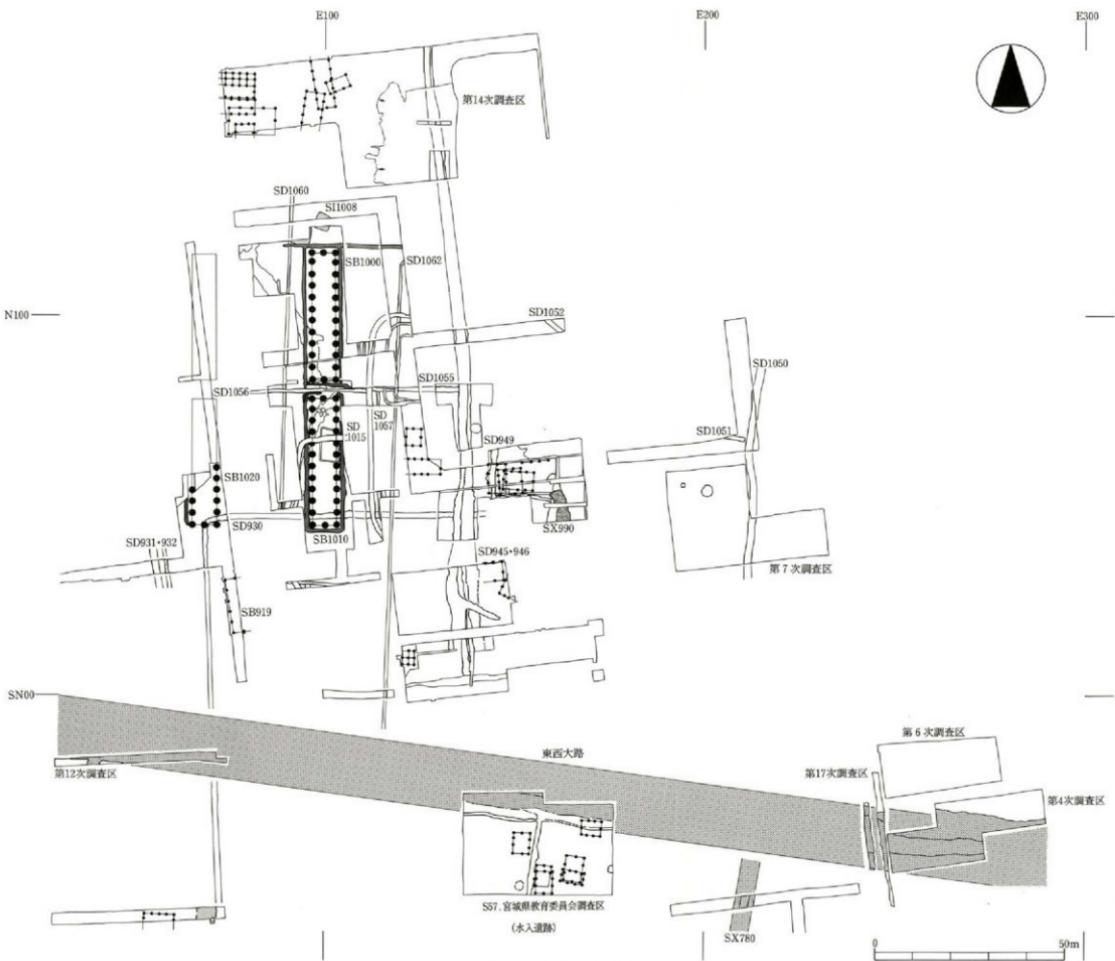
3. 多賀城南面における方格地割りとの関係

（1）道路跡

多賀城外の方格地割りについては、区画をなす道路跡が南北大路の西側の地域において多く発見され、おおよそのあり方が知られるようになってきている。一方、東側の地域においても東西大路や北2道路の存在が確認され、地割りの存在が推定されている。今回の調査では、南北大路・東西大路をはじめ、その北西地区からS X900東西道路、南東地区からS X920東西道路、S X830・780南北道路を検出した。

S X900東西道路は北1道路である。北1道路はこれまで2地点で確認されており、S X900はその延長線上に位置している。方向は、東西大路とほぼ一致し、両者の路面中心点の間隔は約126mである。北側溝の東端部が北側に緩やかに屈曲しており、西1道路との交差点に近いことが推定される。S X830・780は南北大路東側地区における南北道路としては初めて発見したものである。S X830南北道路は、南北大路と方向がほぼ一致し、両者の路面中心点の間隔は約119mである。S X780南北道路は、方向が東西大路とほぼ直交している。南北大路の路面中心点との間隔は約243mである。S X830・780は、その位置関係からそれぞれ東1・東2道路に比定される。S X780の西側に位置する県文化財保護課調査地区で発見された南北溝は宅地内の区画溝と見られ、東1道路路面中心点との間隔は約57m、おおよそ半町である。S X920東西道路については方向が明らかでないが、東西大路の路面中心点との間隔はおおよそ134mであり、南1道路と考えられる。

また、南北大路についてはNo.2トレンチにおいて西側溝を確認した。東西大路との交差点が想定されるNo.66トレンチにおいては、多量の遺物を含む黒褐色砂質土によって全体が覆われていたため、平面的に確



第51図 B区主要構造模式図

認するには至らなかったが、一部で路面と見られる硬化面を検出した。また、No26トレンチにおいて発見したS X888道路状遺構は位置的に南北大路の延長線上にある。その西側には幅約11mの旧砂押川があり、東側にはNo27トレンチにかけて広がる河川が存在することから側溝は発見できず、南北大路の一部とする確証は得られなかった。東西大路南側地域における南北大路については、山王遺跡多賀前地区において盛土による道路が発見されているものの、それが一連の道路であるか否か判断する資料に乏しい。南北大路の範囲については、城外の方格地割りとの関係も含めて検討すべき点が多い。

(2) 南北・東西大路交差点北東地区的様相

東西大路の南側で発見したS X830・780はその北側では発見されず、さらに北1道路についても発見されなかった。東1道路や北1道路の延長線上にはS B1000・1010・1020などの大型建物群が位置しており、それらの廃絶後も道路が建設された形跡はない。従って、9世紀前半から後半にかけて段階的に成立したと考えられている多賀城南面の方格地割りは、南北・東西大路交差点北東地区には施工されなかった可能性が高いと考えられる。

ただ、区画の存在に関してはS X990土墨状遺構およびその東側に位置するS D942など南北溝の存在が注目される。掘立柱建物跡はこれらの遺構より東側では全く発見されていないことから、S X990土墨状遺構やS D942などは、南北・東西大路交差点北東地区における東辺区画施設である可能性が高い。土墨状遺構、S D942などの南北溝はとともに4時期の重複があり、さらに土墨状遺構より南北溝の方が新しいことから、この地区的区画施設は土墨状遺構から区画溝に変遷していると考えられる。東西大路から大臣宮の低丘陵にかけては約170mあり、その間ほぼ全体に遺構が見られるが明瞭な区画施設は認められない。一方、南北大路と土墨状遺構の間隔は、大路の路面中心線でみると約170m、東側溝でみると約150mであり、同様に区画施設は確認できない。従って、南北・東西大路交差点北東地区は、西は南北大路、北は大臣宮、南は東西大路に面し、東の湿地帯とを土墨状遺構・溝によって区画したおおよそ1町半四方の広い区画と考えることができる。このような区画のあり方は、直線道路によるおおよそ1町四方の方格地割りが整然と施工され、基本的に宅地と見られる南北大路の西側の地域とは異なる。今回発見した大型南北棟群をはじめ館前遺跡や大臣宮地区など大規模な官衙風の建物群の存在からも、当地区は城外では特殊な地域と考えられる。

4. 大型南北棟建物について

(1) 変遷と建物配置

A区東端部からB区にかけて発見した南北棟S B1000・1010・1020はいずれも同位置で1回の建て替えが認められる。すべての柱穴を検出したS B1000とS B1010についてみると、規模は桁行11間・梁行2間であり、両側柱列の柱筋が揃っている。また、いずれの建物も各辺を巡る雨落ち溝を伴っている。S B1020については南妻から5間分検出したにすぎないが、その南妻はS B1010のそれと揃っており、側柱の位置もおおよそ対応する。残存状況は悪いが西側には雨落ち溝も確認できる。このように、3棟の建物には強い共通性が認められることから、同時期に存在し、同様に変遷した建物群と見ることができる。

S B1000・1010の間隔は、S B1000南妻とS B1010北妻の棟通り柱穴で計測すると約5mである。また、S B1010・1020の間隔は、S B1010西側柱列とS B1020東側柱列間が約24.5m、両建物の南妻棟通り柱穴間が約31.5mである。

なお、S B1020は、S B1010と南妻が揃い、側柱の位置がおおよそ対応することから、同規模であった

可能性が高い。さらに推定が許されるならば、その北側にもう1棟同規模の南北棟の存在が想定され、南北方向に2棟、2列に建ち並ぶ4棟の南北棟で構成されていたことが考えられる。

(2) 年代

年代については、a.柱穴からの出土遺物、b.雨落ち溝からの出土遺物、c.他の遺構および堆積層との重複関係などから検討する。

a. 柱穴からの出土遺物：①S B1020Aの柱穴から、ロクロ調整を行った土師器杯・甕が出土している。杯は底部に手持ちヘラケズリが施されている。②S B1020Aの柱抜取穴からロクロ調整された土師器杯が1点出土している。体部下端から底部を手持ちヘラケズリしたもので、口縁部2/3が欠損しているがそれ以外は残存状態が良好である。③S B1010B柱穴および柱抜取穴から出土した須恵器杯は、底部の切り離しが糸切りのものとヘラ切りのものが圧倒的に多い（表1）。

b. 雨落ち溝からの出土遺物：S B1000・1010に伴う雨落ち溝には新旧2時期（A→B期）の変遷を確認した。S B1010に伴うB期埋土よりほぼ完形の須恵器杯が2点出土している。底部についてみると1点はヘラ切り、もう1点は回転糸切り無調整である。検出面および1層出土資料についてみてても、須恵器杯の切り離しはヘラ切りと糸切りが主体となっている。

c. 其の他の遺構および堆積層との関係：①S B1010より新しいS D1015からは赤焼き土器が多数出土している。②S B1010より新しいS K1063は埋土上層に灰白色火山灰が自然堆積している。③S B1000・1010はほぼ全体が黒褐色土によって覆われ、さらにその上面に灰白色火山灰が自然堆積している。

これらの資料のうち、a-①は建物群の上限年代を示すものである。多賀城跡出土土器の変遷においてロクロ調整された土師器はB群土器の段階からみられ、その年代は8世紀末とされている（註3）。A期が8世紀末を過らないことは確実である。a-③の資料についてみると、須恵器杯のあり方は9世紀中葉頃と考えられている多賀城跡大畠地区第62次調査第II群土器の特徴に類似しており（註4）、B期の年代はおよそ9世紀中葉を中心とした頃と考えられる。a-②はA期の下限およびB期の上限年代に関わる資料であるが、ロクロ調整後底部を手持ちヘラケズリした土師器杯は9世紀代に一般的に見られるものであり、年代を限定することは困難である。bはS B1010Bが機能した時期を示す資料と見られる。須恵器杯のみではあるがS B1010Bと同様多賀城跡大畠地区第62次調査第II群土器の特徴に類似しており9世紀中葉頃の年代が考えられる。また、cの資料より、10世紀前葉の灰白色火山灰が降下した時点で建物群の上層には厚さ約10cmの堆積層が形成されており、建物群はそれ以前に既に廃絶していたことが明らかである。

以上のことから、建物群は8世紀末から9世紀中葉頃という年代幅の中でとらえられ、おおよそ多賀城政府第III期に機能した建物群と考えられる。

(3) 性格

今回の調査において、建物群の性格を示すような資料は発見できなかった。以下、いくつかの問題点を指摘して本項のまとめとしたい。

まず、本建物群の規模についてみると、柱間が10尺、桁行11間ときわめて長大であることが注目される。これほどの規模を持つ建物は城内でも発見例が少なく、政府北方建物S B1010（政府第IV期）、大畠地区S B1930（8世紀）など少数が知られているにすぎない。城外では最大級の建築物である。構造についてみると、いずれも切妻造りであり、間仕切りではなく、床は土間といった簡素な構造である。建物配置は、北側に未調査区が存在するものの、現状では南北棟の北側に主屋となる東西棟は想定しがたく、南北棟の

みで構成されている可能性が高い。このような構造・配置から日常生活の場とは考えがたく、むしろ、大規模で規則的に配置されている点は官衙を構成する建物との共通性が多いように見受けられる。同様の配置をとる遺構群は城内では発見されていない。陸奥国府が置かれた多賀城において、官衙ブロックは基本的に900m四方の外郭線の内側に存在すると考えられている。このような考えに立てば、城内の官衙に匹敵する規模を有しながら城外に置かれている点は注目すべきである。別の言い方をすれば、城外に置かれるべき施設と考えられ、多賀城南門に近く、さらに内陸方面からの幹線道路である東西大路に面しているという位置関係からも多賀城に関わる重要な施設であったことは疑いない。また、存続期間が政庁第III期にほぼ限定され第IV期には継続されることなく廃絶するというありかたは、恒久的な施設ではなかったことを示唆しているようにも見受けられる。遺構の配置について敢えて類例を求めるすれば、不入岡遺跡(鳥取県倉吉市)II B期の遺構群があげられる(註5)。同遺跡では大規模な総柱建物が建ち並ぶ内郭と長大な東西棟10棟以上で構成される外郭とが検出されており、いずれも国衙関連の倉庫と推定されている。特に外郭の倉庫群については一時的な物資の集積所と考えられている。本遺跡の場合も倉庫の可能性は当然検討されるべきであり、その際は東側に分布する小規模建物群、区画溝との関係も考慮すべきであろう。

VI まとめ

- 南北大路・東西大路をはじめ南北・東西道路跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、井戸跡、区画溝、土器埋設遺構、土器溜めなど多くの遺構を検出した。
- 掘立柱建物跡や竪穴住居跡は調査区北部・中央部に多く、南部には水田が広がっていたと考えられる。
- 多賀城南面に形成された1町四方の方格地割りは、南北大路・東西大路の交差点北東地区には施工されなかつた可能性が高い。
- 南北大路・東西大路の交差点北東地区において城外最大級の南北棟建物群を発見した。この地区は、大規模建物が点在する城外では特殊な地区であると考えられる。
- 須恵器・土師器・赤焼き土器などの土器類をはじめ、青磁・白磁・黄釉陶器、灰釉・綠釉陶器などの陶磁器、漆紙文書、木簡、墨書き土器などの文字資料、海獸葡萄鏡、古銭、土製人形などの祭祀遺物、鹿角製品、木製品など多種多様の遺物を発見した。
- 遺物の年代についてみると、9世紀代のものが圧倒的に多い。
- 多賀城南面地域における微高地と低湿地、および旧河川の分布がおおよそ把握され、旧地形のあり方が一層鮮明になった。

註1 宮城県教育委員会『山王遺跡Ⅱ—多賀前地区遺構編一』宮城県文化財調査報告書第167集 1996

註2 内陸部におけるこの種の土器については、塩生産というより、食用に始まるための精製作業に用いた焼塩窯と見られるが、形態が海岸部の製塩土器と類似しているため、ここではあえてこの名称を用いた。

註3 白鳥良一「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』宮城県多賀城跡調査研究所 1980

註4 宮城県多賀城跡調査研究所『4.考察』『多賀城跡調査研究所年報1992』 1993

註5 倉吉市教育委員会『不入岡遺跡群発掘調査報告書 不入岡遺跡・沢ベリ遺跡2次調査』 1996

VII 附 章

1. 海獸葡萄鏡の蛍光X線分析 (於 東北藝術工科大学保存科学研究室)

資 料: 海獸葡萄鏡 出土地: Na14トレンチ第II層 重量: 22.97g

分析装置: 大型資料室付 波長分散蛍光X線分析装置 (理学電機製)

測定条件: 管電圧—50kV、管電流—50mA、管球対陰極—Cr (クロム)

測定雰囲気: 大気中

測定箇所: ①鏡面—緑白色部分、②鏡面—緑青銅部分

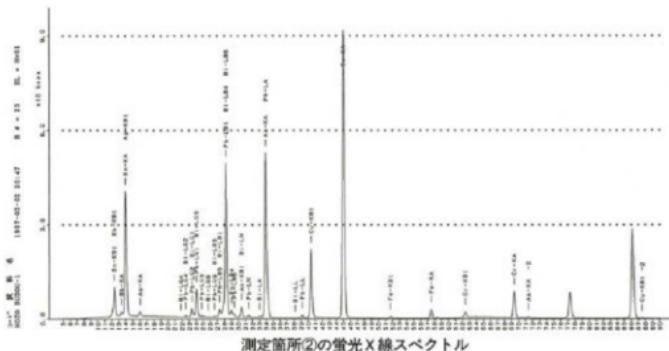
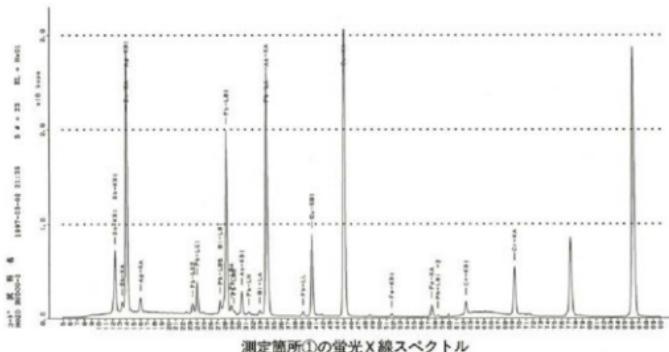


表 分析結果

	銅 (Cu)	錫 (Sb)	鉛 (Pb)	ヒ素 (As)	銀 (Ag)	ビスマス (Bi)	アンチモン (Sb)	鉄 (Fe)
①	30.0	16.0	39.0	9.6	0.71	0.77	0.52	2.3
②	36.0	11.0	43.0	6.2	0.33	0.22	0.30	2.3

2. 多賀城市市川橋遺跡から出土した8世紀末～9世紀中葉の柱・礎板の樹種同定

松葉 礼子（パレオ・ラボ）

(1) はじめに

宮城県多賀城市にある市川橋遺跡から出土した8世紀末～9世紀中葉にかけての柱と礎板計7点について樹種を調べた。これらの木製品は、いずれもSB1000・1010とされる長方形の建物の柱跡から出土している。これらの製品の樹種を同定する事によって、遺物の製品名を明らかにする一端となす事を目的として、調査した。

(2) 方法と記載

同定には、木製品から切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面(木口と同義・写真図版a)、接線断面(板目と同義・写真図版b)、放射断面(柾目と同義・写真図版c)の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とともに同定根拠を後述する。結果は、表1に示す。なお、作成した木材組織プレバラートは、パレオ・ラボで保管されている。

同定根拠

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. FAGACEAE

写真図版1a～1c : MIG478

年輪の始めに、やや放射方向に伸びた大型の丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部では、小型で、薄壁の角張った管孔が、火炎状から放射状に配列する。道管の穿孔は単一。木部柔組織は、晩材部で接線状から短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は、対列状を呈す。

以上の形質より、ブナ科のクリの材と同定した。クリは、北海道～九州までの温帯～暖帯にわたって広く分布する落葉高木、あるいは中高木である。

ミズキ *Cornus controversa* Hemsley CORNACEAE

写真図版2a～2c : MIG483

小～中型で丸い道管が、単独もしくは2～3個放射方向に複合して散在する散孔材。道管の穿孔は20～30本程度の横棒からなる階段穿孔。木部柔組織は、異性で2～4細胞幅程度。上下に直立細胞を持つ紡錘形の物と、直立細胞のみからなる単列のものからなる。

以上の形質により、ミズキ科のミズキ類の材と同定した。ミズキは、北海道～九州の温帯～暖帯に広く分布する落葉高木である。

トネリコ属 *Fraxinus* OLEACEAE

写真図版3a～3c : MIG481

大型の道管が、年輪の始めに並ぶ環孔材で、晩材部では厚壁の小型の管孔が単独あるいは放射方向に複合して散在する。木部柔組織は周囲状あるいは連合翼状に分布し、道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、1～3細胞幅。

以上の形質により、モクセイ科のトネリコ属の材と同定された。トネリコ属には、9種が含まれ、琉球に分布するシマトネリコを除けば落葉高木～小高木である。

表1 多賀城市 市川橋遺跡の樹種同定結果

MIG No	樹種	遺物名	出土位置等		
MIG 478	クリ	柱材	I B-24	P i t 2	No50 T
MIG 479	クリ	柱材	I B-24	P i t 2	No51 T
MIG 480	クリ	柱材	I B-24	P i t 3	No51 T
MIG 481	トネリコ属	柱材	I B-24	P i t 9	No64 T
MIG 482	クリ	柱材	I B-24	P i t 16	No51 T
MIG 483	ミズキ	礎板大	I B-24	P i t 24	No64 T
MIG 484	クリ	礎板小	I B-24	P i t 17	No51 T

(3) 考察

今回調べた木製品は、SB1000とSB1010と呼ばれている1辺の長い大型長方形建物の柱材と礎板、計7点である。遺物の時代は、8世紀末から9世紀前中葉と推定されている。柱材・礎板とも大部分がクリ材を利用しており、SB1000にはトネリコ属の柱とミズキの礎板が含まれていた。クリは、材質的には保存性が良く、柱材には縄文時代から全国各地で多く利用されている樹種である。しかし、近畿地方の同時期には、大部分がヒノキを中心とした針葉樹が多く利用されている。近畿地方のこの傾向は、周辺の開発が進んだ結果、官衙など大規模な建造物を構築するだけに足る木材が、すでに山地の針葉樹以外に無かつたために生じた結果であると考えられている。その上、近畿地方には建築材に適したヒノキ・コウヤマキといった針葉樹が多く自生しているが、本遺跡周辺はこれらの樹種は分布圏外で入手が非常に困難であり、かつ耐久力に優れたクリが枯渴していなかった事が今回の結果を生じた要因と考えられる。

ヒノキ・コウヤマキは宮城県内で確認された事例はあるが、いずれも小型の製品で、多賀城跡に近い立地である事から、官吏等の移動に伴い流入したと考え得る製品のみである(松葉・鈴木 1996)。

本遺跡自体にも、クリを選択せざるを得ない条件がある。まず、柱を柱穴に埋設されている構造、次に低湿地で地下水位が高い土地条件、最後に保存性の良い針葉樹であるヒノキ・コウヤマキが分布圏外である事である。これらの条件を満たし、なおかつ大型の建物を長期間維持しようとすると、クリ以上に耐朽力のある柱材は無く、この結果は非常に有効な選択であると考えられる。

近畿地方でも、クリ材の利用が無かったわけではないが、同定された遺物の相対的な量の問題もあり、古墳時代以降都城を中心として急激に針葉樹材の使用割合が増える傾向が考えられている。クリ自体は、平安時代の近畿地方でも食用として重要な植物として認識され、林の売券の資料(889年丹波国川人郷)から、栗林の売買が成立していたことが分かっており、クリ自体はあったことが分かっている(『平安遺文』補二五六号:木村 1996)。都市域では中世鎌倉、近世江戸でも周辺植生とははなれた、針葉樹材の大量消費が起きていたことが近年分かりつつある。近畿地方の傾向もこれらの起源となるような都市化の問題もはらんでいるように思われる。

引用文献

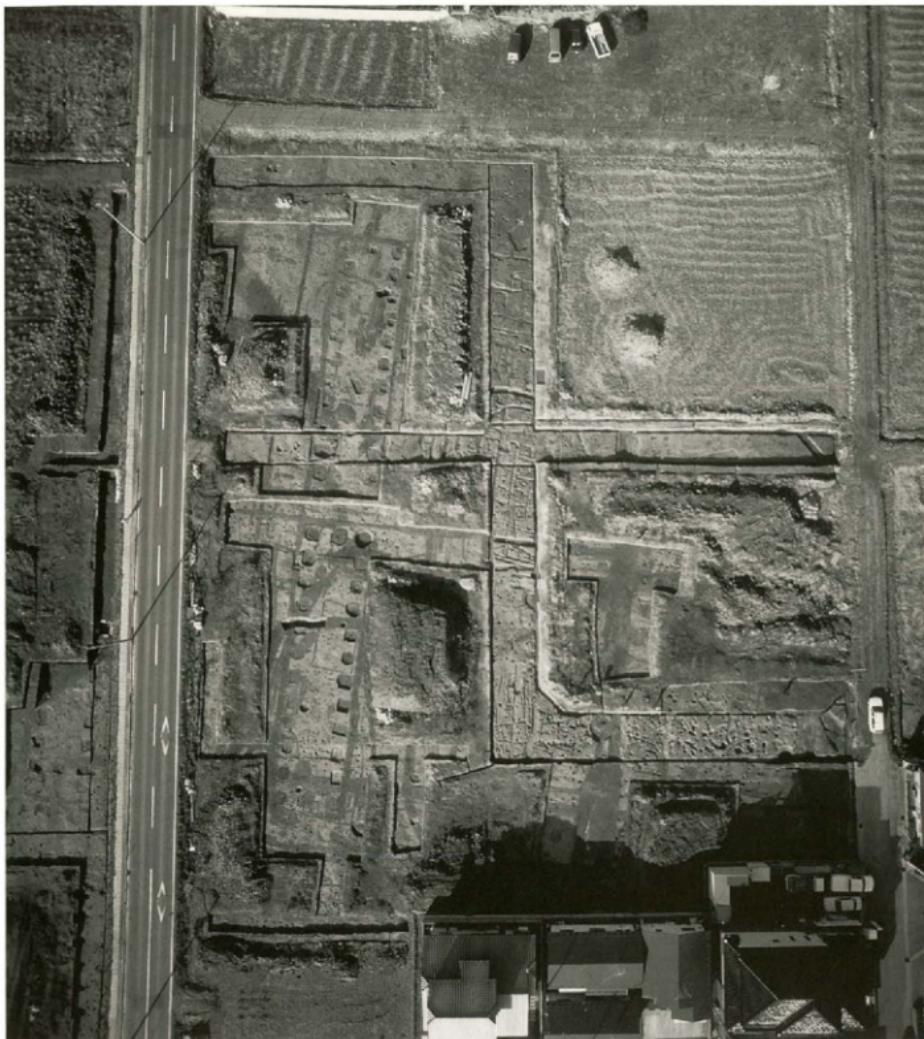
- 木村茂光. 1996. ハタケと日本人 ～もう一つの農耕文化～. 中公新書.
 松葉礼子・鈴木三男. 1996. 宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種. 山王遺跡III一仙塩道路建設関係遺跡発掘調査報告書～多賀前地区遺物編. 宮城県教育委員会・建設省東北地方建設局. 239-283pp.
 鈴木三男・熊城修一・松葉礼子. 1996. 仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種. 中在家南遺跡他 仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書 第2分冊 分析・考察編. 仙台市教育委員会. 339-414pp.



調査区航空写真



A区航空写真



B区航空写真

S B1000掘立柱建物跡



S B1000掘立柱建物跡

1	航空写真
2	全景 (北より)
	ベルト手前 S B1000 ベルト奥 I B1010



1	2
3	4
5	6

S B1000掘立柱建物跡

- 1 ~ 3 柱穴断面
- 4 碓板出土状況
- 5 柱穴・雨落ち溝断面
- 6 • 7 雨落ち溝土層堆積状況





S B1010掘立柱建物跡

1
2

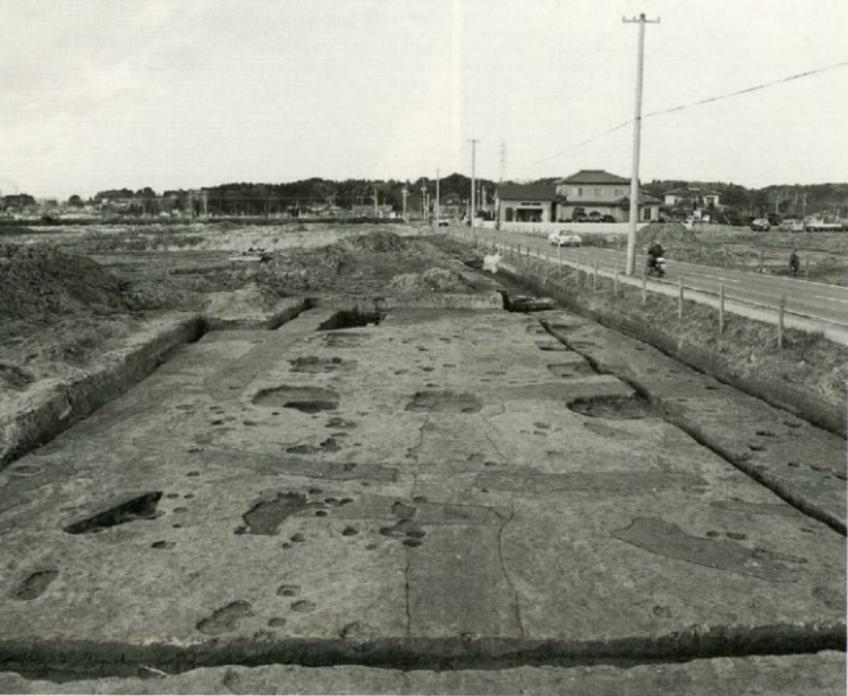
1 航空写真
2 全景(南より)
ベルト手前 S B1010
ベルト奥 S B1000



S B 1000挺立柱建物跡
1~4 柱穴断面
5・6 SD 1011雨落ち溝土層堆積状況
7 // 雨落ち溝遺物出土状況

1	2
3	4
5	6
7	





S B1020掘立柱建物跡

- 1 全景(南より)
- 2 同柱抜取穴 遺物出土状況



S X990土壘状遺構

- 1 全景（北より）
- 2 同（東より）
- 3 同土層堆積状況

1
2
3



S A987材木原跡

1 全景（北より）

2 全景（東より）



A区各トレンチ(1)

- 1 No.1 トレンチ 挖立柱建物跡検出状況（西より）
- 2 No.42 トレンチ S I 903竪穴住居跡検出状況（東より）
- 3 // S X 900道路跡（東より）
- 4 No.8 トレンチ 挖立柱建物跡検出状況（北より）
- 5 // S I 1044竪穴住居跡検出状況（西より）
- 6 No.43 トレンチ 遺構検出状況（東より）

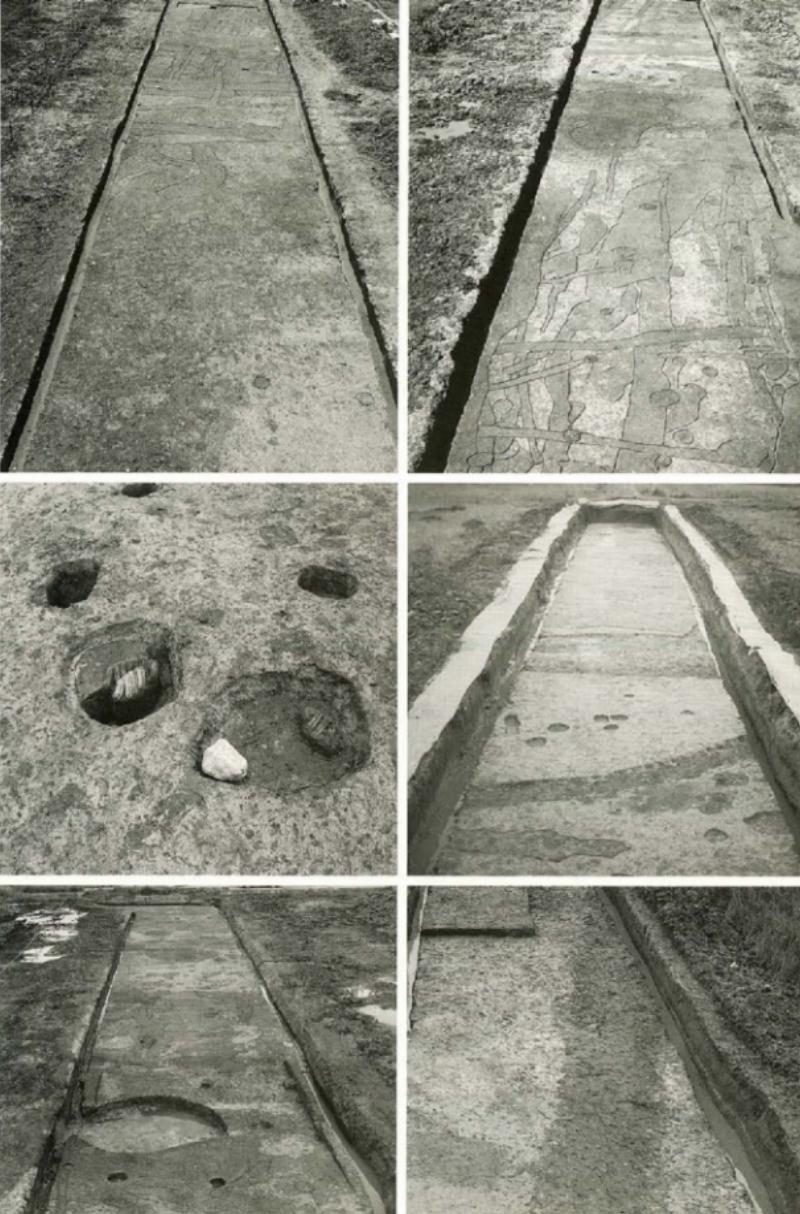
1	2
3	4
5	6



A区各トレンチ(2)

- | | | |
|---|------------|------------------------|
| 1 | No.2 トレンチ | S D911南北大路西側溝検出状況（東より） |
| 2 | 〃 | S I 905竪穴住居跡検出状況（西より） |
| 3 | No.5 トレンチ | SX924、925土器埋設遺構検出状況 |
| 4 | No.48 トレンチ | 遺構検出状況（南より） |
| 5 | No.11 トレンチ | 遺構検出状況（東より） |

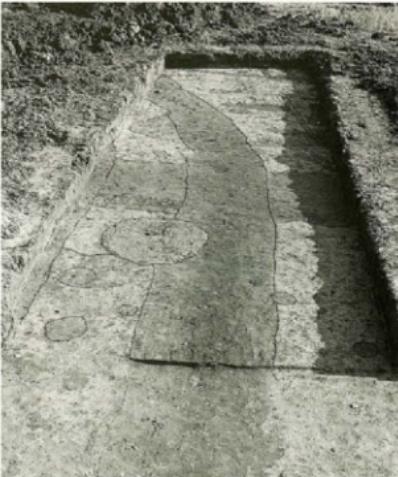
1	2
3	5
5	



B区各トレンチ

1	2
3	4
5	6

- 1 Na13 (N) トレンチ全景 (北より)
- 2 Na13 (S) トレンチ (南より)
- 3 Na13トレンチ北半部 ウマ頸骨出土状況
- 4 Na49トレンチ 東半部全景 (西より)
- 5 Na14(W) トレンチ全景 (西より)
- 6 Na15トレンチ SD1050検出状況況



B区 各トレンチ(2)

- 1 No.50トレンチ 全景(東より)
- 2 No.53トレンチ # (西より)
- 3 SD945・946 (北より)
- 4 No.54トレンチ (西より)
- 5 No.64トレンチ (東より)
- 6 No.56トレンチ (北より)

1	2
3	4
5	6



C・D区各トレンチ

- | | |
|---|---|
| 1 | 2 |
| 3 | 4 |
| 5 | 6 |
- 1 C区Na19トレンチ 全景(北より)
2 ノ Na20トレンチ SK787検出状況
3 ノ Na22トレンチ 捩立柱建物跡検出状況
4 ノ Na23トレンチ 全景(西より)
5 D区Na25トレンチ ノ(西より)
6 ノ ノ 遺物出土状況

1	2
3	4
5	6



D区各トレンチ

- 1 No.26トレンチ 全景（東より）
- 2 No.27トレンチ ノ（西より）
- 3 No.28トレンチ ノ（北より）
- 4 ノ 南端部 挖立柱建物跡検出状況
- 5 No.30トレンチ SX830南北道路跡検出状況

1	2
3	4
5	

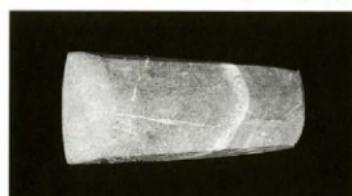
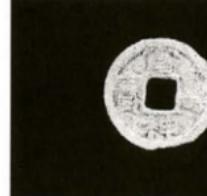


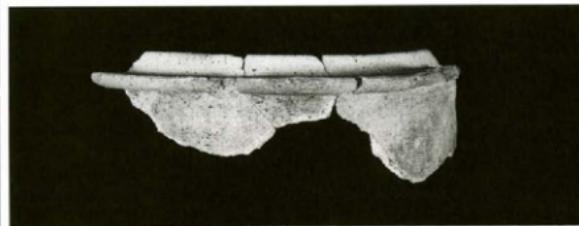
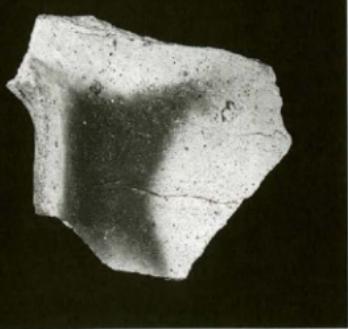
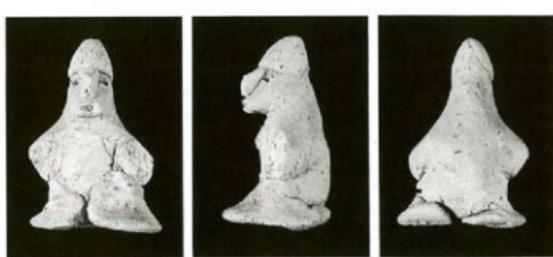
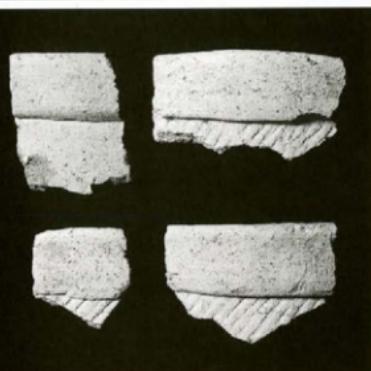
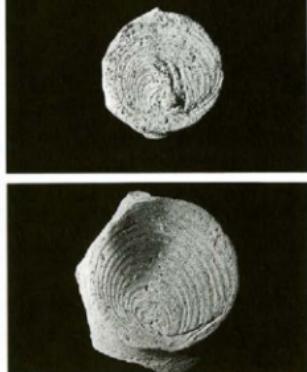
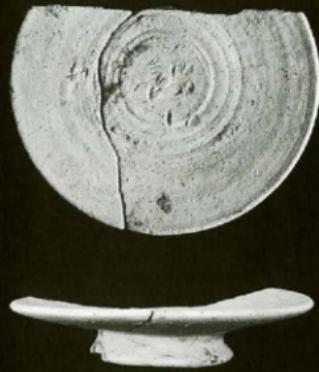
出土遺物(1)

- 1～9 墓書土器
 10・12 ヘラ書き土器
 11 第6次調査出土ヘラ書き土器(参考)
 13 富寿神寶
 14 海獸葡萄鏡
 15 石斧形石製品
 16 鐙
 17・18 鉄矛

- 1 №9 トレンチ
 2・3 №11 トレンチ
 4・7～9・14・15 №14 トレンチ
 10・12 №51 トレンチ
 3・14・16～18 №66 トレンチ

1	2	3
4	5	6
7	8	9
10	11	12
13	14	
15	16	
17	18	





出土遺物(2)

1～4 赤焼き土器

5 土師器甕

6 土製人形

7 羽釜

8・9 土製カマド

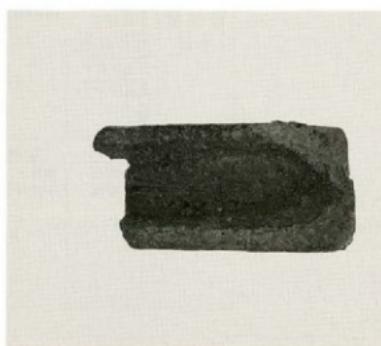
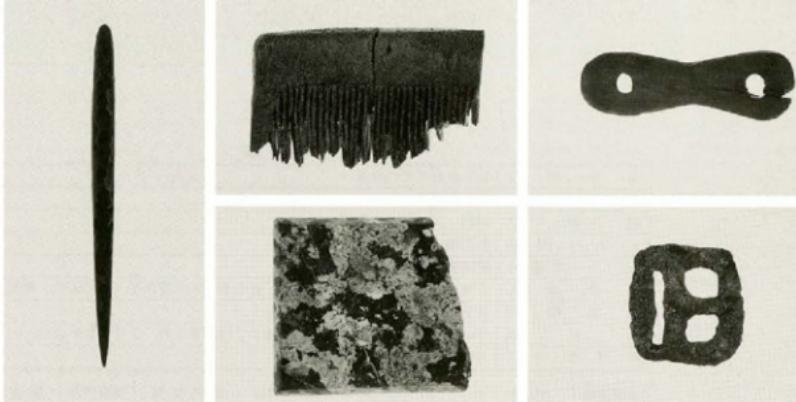
1	2	4
	3	
5		6
		7
8		9

1～9 No5トレンチ

5 No14トレンチ

6 No65トレンチ

8・9 No9トレンチ



出土遺物(3)

- | | | | |
|---|---------|------|-----|
| 1 | 鹿角製品 | 5 | 鉢 |
| 2 | 櫛 | 6 | 円面硯 |
| 3 | メガネ状木製品 | 7 | 風字硯 |
| 4 | 石帶 | 8~10 | 埠 |

- | | | | |
|-----|-----------|----|-----------|
| 1 | No.66トレンチ | 6 | No.1トレンチ |
| 2・3 | No.51トレンチ | 7 | No.14トレンチ |
| 4 | No.13トレンチ | 8 | No.42トレンチ |
| 5 | No.4トレンチ | 9 | No.20トレンチ |
| | | 10 | No.11トレンチ |

1	2	3
4	5	
6	8	
7	9	
	10	



報告書抄録

ふりがな	いちかわばしいせき						
書名	市川橋遺跡						
副書名	第23・24次調査報告書						
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第55集						
編著者名	千葉孝弥・石本敬・武田健市・鈴木孝行・三浦幸子・堀口和代・菊池豊						
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒985-0873 宮城県多賀城市中央二丁目27番1号 TEL 022-368-0134						
発行年月日	西暦1999年3月						
所収遺跡	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市川橋遺跡	市町村 多賀城市 市川字御ノ池 浮島字高平 高崎字水入 越ノ口	042099 18008	38度 17分 30秒 38度 17分 51秒	140度 59分 21秒 141度 00分 08秒	1997.10.29 ~1998.1.22	16,220m ²	遺構確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
市川橋遺跡	官衙 集落	奈良・ 平安時代	道路 掘立柱建物 竪穴住居 土塁状遺構 材木塀 溝 溝 溝	土器類、須恵器、赤焼 き土器、灰釉陶器、綠 釉陶器、黄釉陶器、青 磁、白磁、製埴土器、 土製カマド、海獸葡萄 鏡、鉄斧、鍬、土製人 形	桁行11間、梁行2間 の長大な掘立柱建物 群を発見した。		

多賀城市文化財調査報告書第55集

市川橋遺跡

—第23・24次調査報告書—

平成11年3月26日 発行

編集 多賀城市埋蔵文化財調査センター

多賀城市中央二丁目27番1号

電話 (022) 368-0134

発行 多賀城市教育委員会

多賀城市中央二丁目1番1号

電話 (022) 368-1141

印刷 今野印刷株式会社

仙台市若林区六丁の目西町4-5

電話 (022) 288-6123